「講談社　青い鳥文庫」刊行のことば

太陽と水と土のめぐみをうけて、葉をしげらせ、花をさかせ、実をむすんでいる森。小鳥や、けものや、こん虫たちが、春・夏・秋・冬の生活のリズムに合わせてくらしている森。森には、かぎりない自然の力と、いのちのかがやきがあります。

本の世界も森と同じです。そこには、人間の理想や知恵、夢や楽しさがいっぱいつまっています。

本の森をおとずれると、チルチルとミチルが「青い鳥」を追い求めた旅で、さまざまな体験を得たように、みなさんも思いがけないすばらしい世界にめぐりあえて、心をゆたかにするにちがいありません。

「講談社　青い鳥文庫」は、七十年の歴史を持つ講談社が、一人でも多くの人のために、すぐれた作品をよりすぐり、安い定価でおおくりする本の森です。その一さつ一さつが、みなさんにとって、青い鳥であることをいのって出版していきます。この森が美しいみどりの葉をしげらせ、あざやかな花を開き、明日をになうみなさんの心のふるさととして、大きく育つよう、応援を願っています。

昭和五十五年十一月

講談社

講談社 青い鳥文庫　21-2

ムーミン谷の彗星

トーベ=ヤンソン

下村隆一 訳

1981年2月10日　第1刷発行
2003年2月21日　第43刷発行

(定価はカバーに表示してあります。)

発行者　野間佐和子

発行所　株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21　郵便番号112-8001

電話　出版部　(03)5395-3536
販売部　(03)5395-3625
業務部　(03)5395-3615

N.D.C. 993　222p　18cm

装　丁　久住和代

印　刷　図書印刷株式会社

製　本　図書印刷株式会社

Printed in Japan

ISBN4-06-147045-0

(落丁本・乱丁本は，購入書店名を明記のうえ，講談社書籍業務部
あてにお送りください。送料小社負担にておとりかえします。)

■この本についてのお問い合わせは講談社児童局「青い鳥
文庫」係にご連絡ください。

＊著者紹介

トーベ＝ヤンソン

1914年，フィンランドの首都，ヘルシンキに生まれる。ストックホルムとパリで絵を学ぶ。1948年に出版した「たのしいムーミン一家」が世界じゅうで大評判となり，以降「ムーミンパパの思い出」「ムーミン谷の冬」「ムーミン谷の夏まつり」など，一連の傑作を書いている。2001年6月没。

＊訳者紹介

下村隆一（しもむらりゅういち）

1928年，大阪市に生まれる。東京大学経済学部を病気のため中退。北欧児童文学の翻訳家として活躍したが，1969年没。主な訳書に，「ノロちゃんのおとぎ話」「長くつ下のピッピ」「ムーミン谷の夏まつり」などがある。

ヤンソンさんは、一年の約半分を、フィンランド湾にうかぶ海の孤島ですごします。ムーミン童話を執筆したところです。鳥や虫や動物など、自然にすむ生きものを相手にした生活をかの女が語るとき、そこには、不安のかけらもありません。りすが流木に乗って、だれもいない海を、ほかの島へ向かっていくのを見つけて心をおどらせ、また、一面にこおった海が音をたててわれ、氷がとけだすころ、天空をわたるわたり鳥の声に、やさしく耳をそばだてています。極北の厳寒の冬をはさんでくりひろげられる、生きとし生けるものたちの生命のドラマに、ヤンソンさんの心は喜びにふるえているようです。

いかに小さくとも、せいいっぱい生きている生あるものたちと、それに感動している一人の人間が同居しているところ、それがヤンソンさんの島といってよいでしょう。そこからみれば、わたしたちの社会では、人間でさえ、生命や精神がちょくちょくおびやかされていることが、よくわかることでしょう。それが、ヤンソンさんには、たまらなく不安なことに感じられるのではないかとおもいます。

しかし、ムーミン童話はどうみても、こわく不安な物語ではありません。ムーミンたちは、わたしたちをおどろかせわらわせながら、やさしさにつつみこんでくれます。これもまた一つのなぞですが、それについては、またの機会に考えることにします。

解説……ムーミン童話の一つのなぞ

高橋静男
（フィンランド文学研究家）

ヤンソンさんは、ムーミンたちの物語を、まんがをのぞいて、これまでに、童話を八さつ、絵本を二さつ書いています。そして、これらのほとんどの作品に、洪水、火山爆発、地震、たつまき、不気味な森、きびしい孤独、それに本書では彗星というように、不安をさそう場面をきまって登場させています。なぜそうなるのかが、わたしには長いこと一つのなぞでした。

もう十年も前になりますが、ヘルシンキでの北欧児童文学者会議でお会いしたとき、ヤンソンさんは、「ムーミンを通して文明ということを考えています。」と話してくれました。これは、多くの人々が、ごくあたりまえのように生きている現代の社会に対して、かの女がどうおもっているかが、ムーミン童話に表れているということでしょう。すると、おそろしいことがたえず起きるために、ムーミン谷という社会にただよう「不安」こそが、文明に対するヤンソンさんの一つの感じかたであるとおもわれます。



しまおうと、砂浜の上へ切手アルバムをもってきていました。そして、念のために、アルバムのすみへ、いん石をのせました。

　ほかのものはみんな、山の上に一列にすわって、太陽に顔をむけていました。

「あんたのねこ、なんて名まえなの。」

と、スノークのおじょうさんがききました。

「それは、ひみつさ。」

と、スニフは答えました。

　子ねこは、スニフのひざの上にねそべって、のどをならしながら、太陽を見あげていました。

　ムーミンママが、そのときいいました。

「さあ、これから、おうちのベランダで、あのデコレーションケーキをたべましょうよ。家へかえらない？　森やお庭やおうちは、ちゃんとのこってるかしら。」

「ぼくは、ぜんぶのこってると思うね。さあ、見にいこうよ。」

　ムーミントロールは、こうさけんだのでした。

あたりはすこし、あかるくなっていました。そして、はるかかなたの地平線に、なにかいきてうごいているものが見えたのです。
「海がかえってくるのを、見ていようよ。」
と、スナフキンはいいました。
ふたりが、だまってすわったまま、まっていると、空の光が、ずんずんつよくなってきました。朝日がのぼりました。しかも、いつもとすこしもかわりのない朝日でした。
いまは、海がなつかしい海岸にむかっておしよせてきて、日がのぼるにつれて、青く青くなっていきました。波がもとのふかみに流れこみ、底におちつくと、みどり色になりました。
どろの中にかくれていた、およぐもの、くねるもの、はうもの、すべて海のいきものが、すきとおった水の中へ、おどりあがりました。海草もたちなおり、太陽にむかってのびはじめました。そして、うみつばめが一わ、海の上へとびだして、あたらしい朝がまたやってきたことを、つげました。
「海がかえってきたぞ。」
と、ムーミンパパがどなりました。
もう目をさましていたみんなは、どうくつからとびだすと、目をまるくしました。地球がのこっていたことにおどろかなかったのは、ヘムルだけでした。かれは、切手をきちんと分類して

した。なにもかも、おなじように色もなく、音もしません。

かれは、地面におそろしいあながあいているとか、なにか劇的な変化がおこっているものと、かくごしていたのです。ところが、見たところ、べつにかわりはありません。これをどう考えたらよいのかわからなくて、すこしこわくなりました。

「おはよう。」

スナフキンが、どうくつからでてきて、ムーミントロールの横にすわり、パイプに火をつけました。

ムーミントロールは、へんじをしました。

「おはよう。地球がこわれると、こんなふうに見えるものかしら。からっぽで、なにもないけど。」

「われわれの地球は、こわれなかったんだ。彗星は、地球をしっぽでかすっただけだと思うな。そして、また宇宙の遠くへ、とんでいったんだね。」

と、スナフキンがいいました。

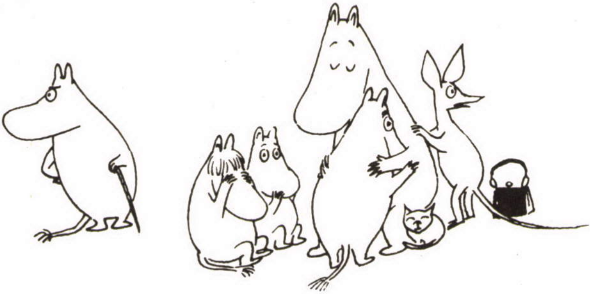
「なんでもぜんぶ、のこってるってわけ?」

ムーミントロールは、信じられないというふうに、こういってききました。

スナフキンは、パイプでさしていいました。

「あれを見ろよ。海だぞ。」

第10章



ムーミントロールは、目がさめてからも、じぶんがどこにいるのやら、わかりませんでした。どうくつの中は、にぶいうすあかりにてらされて、石油のにおいがしました。そのにおいで、かれはすっかり思いだし、がばっとはねおきました。

ほかのものたちは、まだねむっています。ムーミントロールは、ちょこちょこと入り口にちかづくと、そっと毛布をたぐりあげて、外を見ました。すべてのものを赤くそめていたあの光は、なくなっています。空にも、ぜんぜん色がありません。そして、あたりは静寂そのものでした。

ムーミントロールは、外へはいだして、山の上へすわりました。かれは、彗星がなげすてていった、いん石をひろいあげてみました。それは、黒くて、ぎざぎざとがっていて、とても重いものでした。それから、長い海岸線と、ひあがった海を見おろしま

ものがさわったので、ちょっと目をさましました。子ねこでした。かれは、その子ねこをだいて、いっしょにねむりました。

みんながねどこにはいって、ふとんをひっかぶると、スナフキンは、ハーモニカをとりだしました。そして、ハーモニカがすっかりもとどおりになっていて、小さな音も大きな音もちゃんとでるのがわかったとき、スナフキンは、子もり歌をふきはじめました。それは、ママも知ってる歌でしたから、ムーミンママは、ごくしずかにうたいはじめました。

ねむれ　いとし子たち
空は黒く
いくつもの　流れ星さまよい
そのゆくえを知らず
ねむりて　ゆめを見
さめては　ゆめをわすれよ
夜はちかく　大空はさむい
百もの子ひつじ
大空の牧場をさまよう

やがて、どうくつの中も、まったくしずかになりました。スニフは、鼻のところにやわらかい


Tove

まいました。みんなは、いっしょうけんめいに耳をすましましたが、外はしいんとしずまりかえっているばかりです。

ムーミントロールが、そっといいました。

「ママ、もう地球は、こわれちゃったの。」

「もう、すんだのよ。わたしたちの地球は、こわれたかもしれないけど、ともかく、すんだのよ。」

と、ムーミンママは答えました。

「こわれるのがすみで、おれたちはすみっこにいるわけか。」

と、パパは、むりにおどけようとしました。

スノークが、すこしわらいましたが、それきりみんなは、まただまってしまいました。ママが石油ランプを見つけて火をともしました。すると、あの子ねこが砂の上にうずくまって、からだをなめているのが見えました。

「ほんとにこわかったわ。わたし、もう二度ととけいを見たくない。」

と、スノークのおじょうさんはいいました。

「もう、ねましょうよ。あの彗星のことは、いったり考えたりしないことにしましょう。それから、外がどうなったか、だれも見ちゃいけませんよ。それは、あしたでいいことだもの。」

こういったのは、ムーミンママでした。

みんな、できるだけすみっこへかたまって、しっかりだきあったまま、彗星の石が、やねの上の湯ぶねに雨あられとふりそそぐ音をききました。じゃこうねずみは、洗面器の中へへばりついたままです。ヘムルは、切手をふきとばされないように、切手アルバムにおおいかぶさっていました。

山ぜんたいがぐらぐらゆれて、あたりいちめんがふるえ、彗星がひめいをあげました。ひめいをあげたのは、それとも、地球のほうだったのでしょうか。

みんなは、からだをちぢめ、長いあいだ、だきあったままでいました。どうくつの外では、山がくずれ、地はさけて、ガラガラところがる音が、こだましていました。時間が、おそろしく長く感じられました。だれもが心ぼそくてしかたありません。

いつまでもいつまでもつづくかと思われたことが、やっとすぎると、こんどは、完全にしずかになってし



石油ランプが、しずかにもえていました。

「ぼくのねこを紹介するよ。」

と、スニフがふるえ声でいいました。

そこでムーミンママは、大いそぎでいいました。

「まあっ、きれいなかわいいねこだこと。わたし、あんたにあげるものがあるの……。うちへきてくれた記念に、おばあさんのエメラルドをプレゼントしようと思っていたんだけど、こんな大さわぎで、わすれてしまって……。これで、このねこに首かざりをつくってやれないかしらね……。」

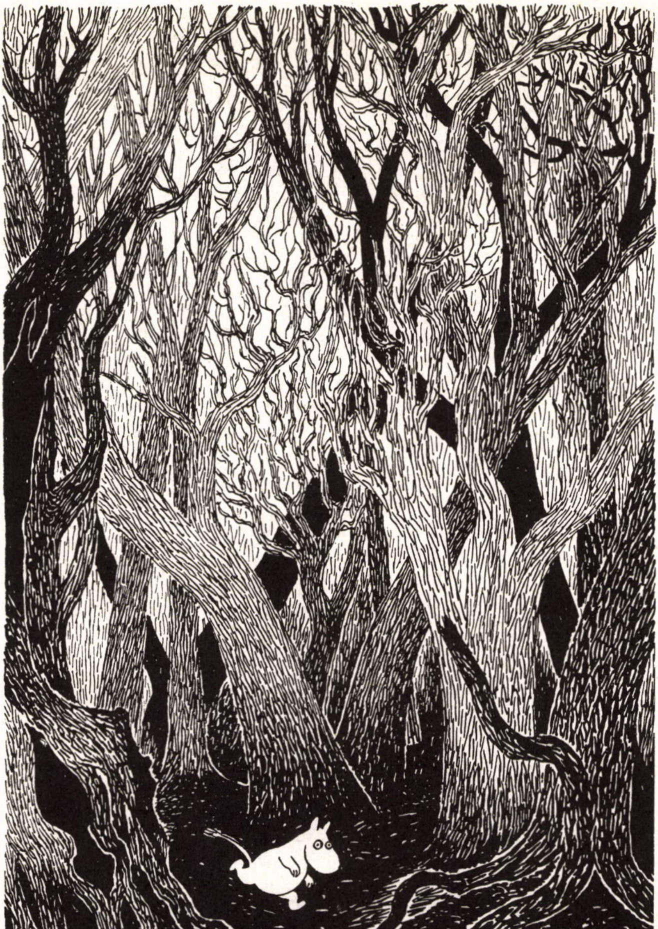
「エメラルド！　おばあさんの形見だって！　それを、このねこに。わあ、すごい。ぼく、なんてしあわせなんだ。」

スニフは、大声をあげました。

しかし、それと同時に、あの彗星が、地球へつっこんだのです。まっかにもえる火のかたまりが――。

石油ランプが、砂の上にひっくりかえって、きえました。とけいは、ちょうど八時四十二分四秒でした。

地下のやけどの油でつよくされた毛布の下に、まっかな火が見えました。でも、どうくつの中は、くらやみのままでした。



三十一分です。あと、十一分！
ムーミントロールは、赤くそまった森の中へとびこみました。かれは七足走って、スニフの名をよびました。それから、また七足、そして名を……。
すると、ずっと遠くから、かすかなさけび声がきこえました。ムーミントロールは、両手を口にあてて、せいいっぱいの大声をだしました。
「スニフ！」
小さな動物のスニフが、もういちど、へんじをしました。うんとちかくで。
ふたりはであったときに、「やあ。」のひとことさえ、いいませんでした。ただ、走ったのです。そのうしろを、子ねこがおっかけました。上には彗星がせまっています。おそろしさにうちひしがれているムーミン谷めざして。
あと六分……。砂の上を走るのは、むずかしいことでした。ゆめの中でのように、ゆっくりとしか、すすめません。あつい空気で目がいたくなり、のどもからからにかわいて……。やっとのことで、山につきました。山も、まっかです。
ママが外へでて、まちうけていました。なにかさけびながら、手をふっています。ふたりは、むちゅうでよじのぼりました……。あと、たったの三分しかありません！　きゅうに、すずしくなりました。どうくつの中へはいったのです。見れば、なにごともおこらなかったかのように、

と、ムーミントロールがたずねました。
「八時二十五分。」
パパが答えました。
「ぼく、スニフをさがしにいかなくちゃ。まにあうように、とけいをかしてね。」
「いけない。この人を外へやらないで！」
と、スノークのおじょうさんはさけびましたが、ムーミンママはいいました。
「これは、しなくちゃならないことよ。いそいで、できるだけ早く。」
ムーミントロールは、毛布の下をくぐって、外へでました。がらんとした砂浜の空気は、火のようにあつくなっていました。かれは、走りに走りました。たえずスニフの名をよびながら。これほど、ひとりぼっちだと感じたことはありませんでした。
ムーミントロールは、ときどきとけいを見ました。八時



かいものが、足にさわるのを感じました。
「そうか、おまえか。おまえは、どうくつへくるとやくそくしておいて、こなかったじゃないか。そんなやつ、知るものか。」
と、スニフはいいました。
「ね、ほれ。わたし、やわらかいでしょ。」
と、子ねこがいいました。
スニフは、へんじをしませんでした。子ねこは、のどをならしはじめました。その音だけが、しずまりかえった森の中にきこえるのです。
スニフは、あたりを見まわしました。すると、ぶるぶると足がふるえてきました。道がないのです。どこもかしこも、こけばかりです。どうくつはどっちのほうにあるのか、かいもくわかりませんでした。

だれも、食後のおかしをたべる気になれませんでした。毛がいっぱいついていて、どうにもならなかったのです。じゃこうねずみは、湯をいれたおさらの中に、つかっていました。こうして、時間がすぎていきました。
「いま何時。」

えるのなんか、ぜんぜんよけいなことだと思うんです。」

スニフは、むしょうにかなしく、はらがたっていましたから、森のおくへくるまで、こわいのもわすれていました。森の木は、赤い紙から切りぬかれたように見えました。森はすこしもうごかず、人かげも一つもありません。地面はあつくて、歩くたびに、ザラザラと音がしました。スニフの心をなぐさめてくれるものといえば、みんながきっとおどろいて、心をいためてるにきまってると、思うことだけでした。

かれは、むねをどきどきさせながら、いっそう森のおくへはいっていき、みんながどれほどいじわるしたかを考えました。みんなは、いま、かれのどうくつの中へかくれて、あの古くさいケーキをたべているのです。そして、地球ぜんたいで、にげかくれしてないのは、このスニフだけなのです。かれだって、こわいのですけれど。スニフは、あんな人たちのことを気にしないことにしました。だれをも、なにをも、気にしないことです。彗星のことも、子ねこのことも、なにもかも。

とたんに、その子ねこが、しっぽを上にぴんとたてて、スニフのほうへやってきました。

「ふん。」

スニフは、そっけなくいって、とおりすぎました。ところが、しばらくすると、なにかやわら

ておくべきだったわ……どうしましょう。」
と、ママは、大声をあげました。
「こうなったら、あの子に、なにかとってもいいものをやりなさい。」
と、パパは、むずかしい顔でいいました。
ムーミンママは、こっくりとうなずきました。ママは、おばあさんからもらったエメラルドを、スニフにやろうと、決心したのです。あのエメラルドなら、子ねこの首かざりには、ほんとにいいでしょう。
スナフキンが毛布をめくって外をのぞきながら、いいました。
「ぼくが、ついていくべきだろうな。」
「ちょっと、まって。あの子は、しばらくひとりでいたいのでしょ。きっと、すぐかえってくるわ。」
と、ムーミンママがいいました。
「おい、どうなった。わしのようすを気にしてくれるものは、だれもないのか。」
と、じゃこうねずみがききました。
ムーミントロールは、しょうじきに答えました。
「ありません。ぼくたち、ほかにいっぱい考えることがあるんです。だから、あんたのことを考

「わしは、これから一生のあいだ、ねばねばのからだで、おらねばならんのか。そんなことはねがいさげじゃ。あんたがたがわるいのだ。」
じゃこうねずみも、どなりかえしました。
「まあまあ、ふたりとも、おちつきなさいよ。形はかわっても、ケーキはケーキ……。」
ムーミンママがこういったのですが、どちらの耳にもはいりませんでした。
スナフキンは、わらいだしました。すると、スニフはじぶんがわらわれたのだと思って、マットレスの下からはいだしてさけびました。
「あんな古ぼけたケーキなんか、くそくらえ。あんなの、ムーミントロールにやっただけで、ぼくにくれたんじゃないもの。おまけに、ねこだってクリームがすきなのに、だれひとり、それを考えてやらないんだ。ぼくはこれから、あの子ねこをさがしにいく。ぼくのことを思ってくれるのは、やっぱりあの子ねこだけなんだ！」
そして、かれは、毛布の下からかけだしていってしまったのでした。
「まあ、たいへん。ほんとに、『かわいいスニフちゃんへ』とも、書い



ありましたが、「かわいいスニフへ」とは、書いてありませんでした。しかも、もう八時をすぎているのに、子ねこがこないのです。

「やれ、やれ。」

こういって、ムーミンママは、いすにへたりこんでしまいました。ずいぶん、つかれたからです。

「なにもかも、めちゃくちゃね。」

スノークのおじょうさんが、きびしい目つきで、じゃこうねずみをにらみながら、いいました。

「ちょっとたってみて！」

「すわったかぎりは、うごかん。」

と、じゃこうねずみは答えました。

そのとき、スノークのおじょうさんが、いったのです。

「おじさんは、ムーミントロールちゃんのケーキの上にすわってるのよ。」

じゃこうねずみは、びっくりしてたちあがりました。その、じゃこうねずみのおしりったら。デコレーションケーキのひしゃげかたったら……。

「なんてことをしたんだ！　このケーキは、ぼくのおいわいだったのに！」

と、ムーミントロールがどなりました。

た？」

じゃこうねずみは、おこって答えました。

「ねこも、デコレーションケーキも、わしは見やせん。口にいれたことも、さわったこともない。わしは、考えておる。」

ヘムルがわらって、切手をアルバムにはりつづけながら、つぶやきました。

「あんたのいうとおりだ。うるさいな。まったく、ここはうるさい。」

「だけど、あれはどこへいったのかしら。」

ムーミンママはこまりきって、たずねました。

「スニフちゃん、あんたまさか道であのケーキを、ぜんぶたべてしまったんじゃないでしょうね。」

「あれは、大きすぎたもの。」

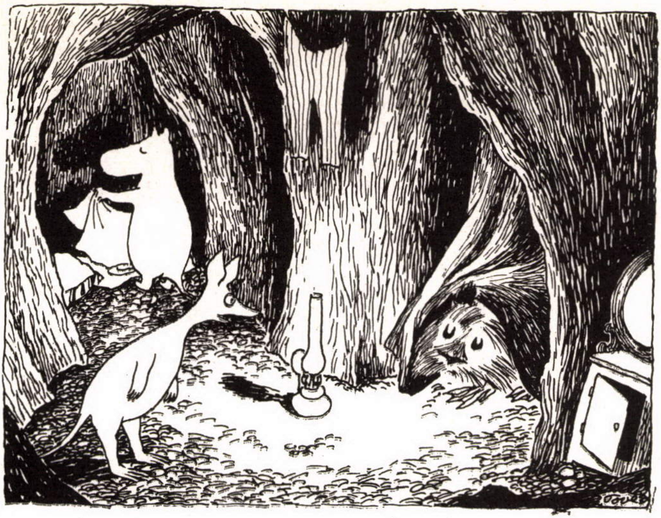
と、スニフはあっさりいいました。

「じゃ、つまりちょっとはたべたんだな。」

ムーミントロールが、大声をあげました。

「てっぺんの星だけだい。あれは、わりとかたかった。」

スニフは、こうどなりかえして、マットレスの下へもぐりました。これいじょう、みんなと顔をあわすのが、いやだったのです。あのケーキには、「かわいいムーミントロールへ」と書いて

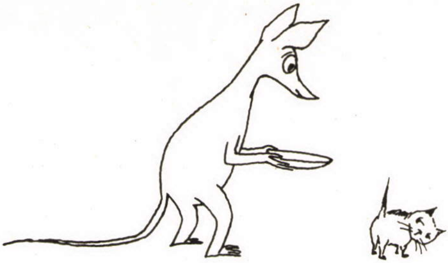


わりました。
「おじさん、とちゅうでぼくのねこを見た？」
と、スニフがききました。
「いや、見ないな。」
ムーミンパパが、とけいのねじをまきながら、いいました。
「これでよし、と。いま、八時だ。」
「じゃ、食後のおかしをたべるひまがありますわね。スニフちゃん、デコレーションケーキは、どこへおいたの。」
と、ママがききました。
「どこか、そのへん。」
スニフは、じゃこうねずみのほうを指さしました。
「どこよ。見あたらないけど。ねえ、じゃこうねずみさん、デコレーションケーキを見まし

「それをぬったら、毛布がしみになりません？」
こういったとたん、ママはだしぬけに両手をうちあわせて、さけびました。
「じゃこうねずみさんは、どこ。」
「あの人は、こようとしなかったんだ。避難するなどは、よけいなことだといってね。だから、おいてきたよ。ハンモックを、あの人にやってね。」
と、パパがいいました。
「まあ。」
ムーミンママはため息をついて、アルコールストーブで、ごはんごしらえをつづけました。
チーズをとりだしたとき、どうくつの外でゴソゴソ音がして、毛布の下にひげづらがのぞきました。
「あれ、おじさんもやっぱりきたんだね。」
と、ムーミントロールがいいました。
「あのハンモックの中は、とても暑くてな。それで、どうくつの中なら、ちっとはすずしかろうと考えたのじゃ。」
こう、じゃこうねずみはいって、あなのすみっこでガタゴトやかましくやってから、そこにす

ママが、わけを話しました。
「あれは大きすぎて、どうくつの中へはいらないの。スノークさんは、そのことで会議をひらこうというけれど、そんな時間はないもの。いま、みんなでひっぱりあげて、あれでやねをふさごうとしてるのよ。やれやれ。」
「ぼく、あの子ねこと会ったよ。八時までにどうくつへくるって、やくそくしたよ。」
と、スニフはいいました。
「それは、よかったこと。ほんとに、よかったわね。じゃ、わたし、どうくつの中へはいって、ねどこの用意をするわ。」
湯ぶねは、四センチたりないだけで、そのほかのやねのあなを、ふさいでしまうことがわかりました。なんと、運がよかったのでしょう。どうくつの中は、こうして、だんだんあながふさがりました。入り口には、ムーミンママが、毛布をつるしました。
「あれで、だいじょうぶだと思う?」
と、ムーミントロールがいいました。
「ぼくが、毛布をつよくしてやるよ。」
スナフキンはこういって、ポケットから小さなびんを、ひっぱりだしました。
「ほら。これが、地下のやけどの油さ。どんな熱でも、平気だよ。」

「いやよ。」
といって、子ねこはあくびしました。
「くるって、やくそくするね。やくそくしなきゃだめだぜ。八時までにだよ。」
スニフは、きびしくいいました。
「ええ、いきたいときにいくわ。」
そういって子ねこは、からだをなめつづけました。
スニフは、こけの上へミルクのおさらをおいて、しばらく、じっと見ていました。それから、砂浜へかけつけると、そこでは、みんなが湯ぶねを、山の上へひっぱりあげているところでした。
ムーミンパパがどなりました。
「しっかりひっぱれ。つなをはなしたら、わしの足の上へ、おっこちるぞ。」
「つるつるすべるなあ。せっけんの箱が、くっついたままだもの。」
と、ムーミントロールがさけびました。
ママは、浜べにこしをおろして、ひたいのあせをぬぐいながら、ため息をついていいました。
「たいへんなひっこしだわ。」
「みんな、なにしてるの。」
と、スニフがききました。



た。

そして、とうとう見つけました。子ねこは、こけの上にすわって、からだをなめていたのです。

「おや、元気かい？」

と、スニフは、やさしくいいました。

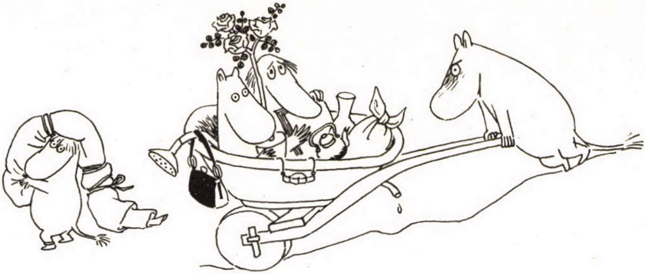
ねこは、からだをなめるのをやめて、かれのほうを見ました。スニフは、そっとちかづいていって、手をさしだしました。ねこは、すこしにげました。

「ぼく、おまえに会いたかったよ。」

スニフはそういって、もういちど、手をのばしました。子ねこは、手のとどかないところへ、ぴょんととびのきました。かれが子ねこをかわいがってやろうとするたびに、子ねこはよけましたが、でも、にげていってしまうことはありませんでした。

「彗星（すいせい）がくるんだよ。ぼくたちについて、どうくつへおいで。そうしなきゃ、おまえはぶっつぶされちゃうぞ。」

こう、スニフはいいました。



「わかった、わかった。その中へはいれ。わしが、どうくつまでのせていってやるさ。ヘムルさんは、どこにいるの。」
「あの人、切手の数をかぞえてるわ。」
と、スノークのおじょうさんが答えました。かの女は、家族の写真のアルバムをかかえていて、
「ムーミントロールちゃんは、赤ちゃんのとき、おそろしくふとってたのね。」
といいました。
　ムーミンパパは、大声でどなりました。
「ヘムルさん！　湯ぶねの中へはいってください。もうじき、衝突しますから。彗星がやってきます。」
　ヘムルは、切手アルバムをかかえて、おとなしく湯ぶねの中へはいりました。こうして、ムーミンパパは、車を出発させたのです。
　ムーミン谷をはなれたのは、スニフがいちばんあとでした。森の中をぬけるあいだじゅう、ずっと子ねこをよびつづけていまし

「ぼくの子ねこだよ。」
と、スニフはどなりました。
「ぼくをまちくたびれている、あのかわいい子ねこは、どこにいるの。ぼくたち、さがしてやらなきゃ。」
「あ、そうだわ。」
といって、ママは湯ぶねをはなしました。
「あんたのひみつの子ねこね……、そう、あれはね、ちらりともすがたを見せないことがあったわ。夜にばかり、ミルクをのみにくるの。」
「じゃ、あれは、おばさんをすきになりはじめているんじゃないね。」
「そうよ。あれは、とてもしっかりしててね。ひとりで、ちゃんとやるわ。ねこというのは、みんなそうだけど……。」
　ちょうどそこへ、ムーミンパパが、ゴロゴロと手押し車をおして、やってきました。
「これが、最後だぞ。もう、六時半だ。どうくつのやねを、ふさがにゃならん……。いったい、湯ぶねをもっていって、なににするんだ。」
　ママは、いいわけしました。
「これは、おろしたてなんですよ。ね、おふろへはいるのは、気持ちがいいでしょ？　それに……。」

た。時間がないだけに、ふつうのひっこしよりも、たいへんでした。

いまは、暑さもひどいものになりました。水のない浜べは、赤黒くおそろしい光にてらされていました。ムーミンパパは、こんなきみのわるい景色を、見ないようにつとめました。手押し車をおして、いったりかえったりしながら、わかいときからいままでに、よくもこれだけいらないものをあつめたものだと、あきれました。そして、ときどき、とけいを見るのでした。

パパは考えました。

（これが、最後の荷物だな。いや、ママはきっと、戸だなのとってからブラインドのひもまで、もってくるぞ……。）

そこで、もういちどだけ、ムーミン谷へ車をおしてもどったのでした。

家では、ママが湯ぶねを外へひっぱりだしているところでした。スニフが、ミルクいれのおさらをもって、そばにたっていました。

「おばさんは、ぼくのいうことを、ちっともきいてくれないんだね。ぼく、三べんもきいたんだ。あれは、どこにいるの。」

「えっ、なにが。」

ムーミンママは、あわててたずねました。

のを、みんなひっぱりだし、カーテンもはずしました。つくえのひきだしをぜんぶ、ゆかにならべ、シーツやふとんも外へだしました。

　パパは、かばんや、たばねたものや、ふくろや、かごや、つつみを、手押し車につみこみました。スノークはリストと計画表をベランダのテーブルの上にずらりとならべて、さしずしました。かれは、しあわせでいっぱいでした。

「花だんのまわりの貝がらは、どうしましょう。」

と、スノークのおじょうさんがききました。

「もっていくのよ。星が三つついてるわ。スニフちゃん、このデコレーションケーキを、どうくつへはこんでくれない？　手押し車にのせられないもの……。」

と、ムーミンママがいいました。

「なあ、ばらをぜんぶは、ほりおこせないよ。時間がないんだ。」

と、パパ。

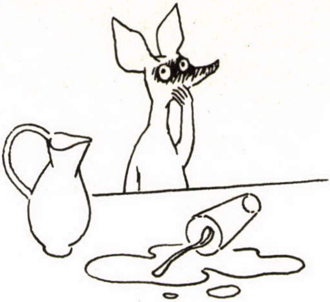
「黄色いのだけで、いいですわ。でも、それはぜひともね。」

　そういって、ママはだいこんをひきぬきに走りました。大きいのだけでもと思って。パパが、手押し車を一台、砂浜のところまでおしていって、つぎに、もう一台のをおしていきました。ムーミントロールとスナフキンがまっていて、ひっこし荷物をどうくつの中へ、はこびいれまし

みんな、だまっていました。ムーミンパパが、大きく息をすいこみました。
「あのじゃこうねずみが、どういうわけでわしの元気をなくさせるのか、さっぱりわからん。もう、三時だ……。ぼちぼち、荷づくりにかかろうか。そのどうくつは、どれぐらいの広さかね。」
それからパパは、スノークの顔を見ていいました。
「きみ、ひとつ、このひっこしのだんどりをしてくれんかね。」
スノークはうれしさで顔を赤くしながら、緊張していいました。
「やってみます。けれどさきに、横線かます目のあるノートと、ものさしと、きちんと寸法のついた、どうくつの見取図をくれませんか？　それから、あなたたちのもちものぜんぶの、一覧表がほしいですね。すきでたまらない品物には、星を三つ、ただすきだというだけのものには、星を二つ、なくてもくらせるだろうと思うものには、星を一つつけてください。」
「ぼくのリストは、いつでもできるよ。ハーモニカが、星三つだ。」
スナフキンは、そういってわらいました。

いよいよ、荷づくりの大騒動がはじまりました。じゃこうねずみは、ハンモックにねそべって、ながめていました。ヘムルは、ライラックのしげみの下で、切手を分類しています。
ムーミンママは、いそがしくうごきまわって、ひもやつつみ紙をさがしました。あなぐらのも

「ちょっとまった。そのことで、会議をひらかなくちゃ。重大会議を……。そんなふうに、かんたんにきめられることじゃないもの。」
「どうして。ゆっくりきめられることじゃないわ。わたしたち、だいじなものはすっかりもって、すぐにどうくつの中へひっこすのよ。」
と、スノークのおじょうさんがいいました。
「そうだ。ぼくの短剣を見てくれた？」
と、スニフはさけびました。
「ぼくたち、どうくつでおまつりのごちそうをたべない？　ピクニックみたいにしようよ。」
ムーミントロールが大声をあげました。
みんなは、口々にさけんで、手をふりまわしました。おかげでスニフは、ミルクのコップを、テーブルの上へひっくりかえしてしまったのです。
そのときじゃこうねずみが、たちあがっていいました。
「おまえたちのいうことは、わるくなるいっぽうだな。おまえたちは、どうせぐちゃぐちゃにつぶれてしまうんだから、そんなことを話しあうのは、よけいなことさ。わしは、もうハンモックにねころんで、考えることにする。これきり、会うことがないかもしれぬ。では、ごめん。」
そして、ぷいとでていってしまいました。



た。だが、子ねこはでてきません。

それで、スニフはベランダへもどっていきました。ベランダでは、みんながごはんをたべながら、彗星のことを話しあっているところでした。

ムーミンママがいいました。

「じゃこうねずみさんがいったんだけど、彗星は今晩、うちのやさい畑へおちてくるんだって。あのどす黒いいやなほこりが、やっとおやさいから、ふきとんだと思ったらね。それで、もうそうじする気がなくなっちゃったわ……。宇宙は、ほんとにまっ黒なんだって。それをしらべたのは、あんたじゃなかった？」

「うん、ぼくだよ。」

そうへんじして、スニフはすこしうれしく感じました。

「ぼくが、ぜんぶしらべてきたんだ。そして、彗星がきたら、おばさんたちも、ぼくのどうくつの中へかくれていいよ。」

すると、スノークがさけびました。

なかろうな。」

「あそこにつるして、かわかしてますわ。」

と、ムーミンママは、ライラックのしげみにはりわたしたほしものづなを、指さしました。ヘムルは、赤い切手アルバムをひと目見るなり、大よろこびで、うなり声をあげました。ぼろぼろになったスカートのままで、ころがるようにかけだしました。

「みんなは、ものすごくしあわせそうだな。」

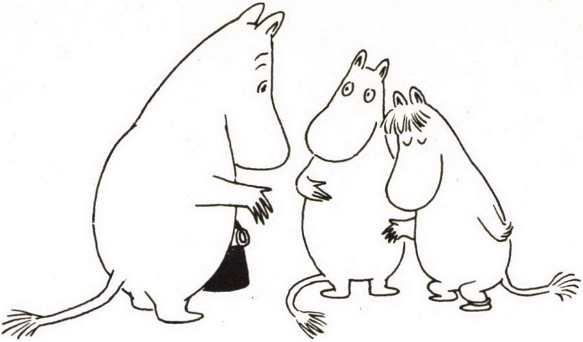
スニフは、顔をゆがめて、はきすてるようにいいました。子ねこは、かれをでむかえなかったのです。かれは、ベランダの階段におかれている、ミルクいれのおさらをさして、口をとがらせました。

「このミルクは、くさっているみたい。」

ムーミンママが、いいわけをしました。

「こう暑くちゃね。この暑さじゃ、なんでもすぐにいたんでしまうのよ。でも、あのねこは、めったにのみにこないの……さあ、みんな、ごはんにしましょう。中へはいったら、じゃこうねずみさんに、こんにちはをおっしゃいね。」

けれども、スニフは庭にのこっていました。かれは、しげみの下へもぐりこんで、子ねこをよびました。たきぎ小屋の中をさがし、そこらじゅうをさがして、いっしょうけんめいによびまし



「それは、たのしいですな。切手をあつめるのは、ひじょうによい趣味ですよ。」

「趣味なんかではない。わしの職業じゃ。」

ヘムルは、ぷりぷりしていいました。ゆうべ、あまりねむれなかったので、きげんがわるいのです。

「なるほど。それじゃ、きのう風にとばされてきた、切手アルバムを、ごらんになりたいでしょうな。」

「えっ、なんだと。」

と、ヘムルは大声をあげました。

ムーミンママが、口をはさみました。

「そうなんですよ。ねり粉をふくらまそうと思って外へだしておいたら、のりのついた紙きれが、けさ、いっぱいくっついてましたの。」

「のりのついた紙きれ！」

ヘムルは、そうくりかえして、青くなりました。

「それは、とってあるか。まさか、すててしまったんじゃ

パも、そのあとにつづきました。
むこうからムーミントロールがやってきます。スニフも、やってきます。それから、パパもママも見たことのない人たちが、ぞろぞろと。ムーミンママは、さけびました。
「まってたのよ。さあ、ここへいらっしゃい。まあっ、みんなやせて、きたなくなってるのね。いいえ、よかったわ……ゆめじゃないかしら。」
「ママ。パパ。ぼく、けんかしちゃったんだ！　食虫植物とけんかしてね、ぼく、かったよ。えいっやっと、植物のうでを切りおとして、しまいに、切り株だけにしてやったんだ。」
と、ムーミントロールがどなりました。
ママは、びっくりしました。
「そんなことまで。それで、この人たちはだれ？」
「これは、スノークのおじょうさん。ぼくが、食虫植物をやっつけて、たすけたんだよ。そしてね、これは、にいさんのスノーク。これは、ぼくの親友スナフキンでね。これは、切手をあつめてるヘムルのおじさん。」
こう、ムーミントロールは説明しました。
みんなは手をとりあって、よろこびました。
ムーミンパパが、口をひらきました。

しきますの。スニフちゃんが、おさらをなめますもの。あの子は、それがすきで……。」
　パパはため息をついて、ケーキをもちあげてから、いいました。
「あの子らを旅にだすんじゃなかった。わしらは知らなかったもので……。」
　そのとき、じゃこうねずみがやってきて、たきぎいれの上にすわりました。
「あのう、彗星はどんなぐあい？」
と、ムーミンママはききました。
「まっしぐらに、やってきておる。ケーキをやくのには、またとないよいときだわい。」
　じゃこうねずみは、気むずかしい顔でいいました。
「しょうがビスケットは、いかが。」
と、ママがたずねました。
「そうですな。死ぬのをまってるあいだに、まあ一つ。」
　三つめのしょうがビスケットをたべてしまってから、かれはいいました。
「おくさんのむすこが、橋の上を走ってくるらしい。何人も、かたまってな。」
「ムーミントロールが？」
　ムーミンママは大声をあげて、手にもっていたナイフを、くずいれの中へほうりこんでしまいました。じゃこうねずみは、いまごろになっていったのです。ママは、外へかけだしました。パ



スニフは、ベランダの階段を見ましたが、子ねこはいませんでした。

ムーミンママは、台所にすわって、もも色のクリームで、デコレーションケーキのしあげをしていました。ケーキのまわりには「かわいいムーミントロールへ」と、チョコレートで書いてありました。そして、てっぺんにはおさとうの星がのっかっていました。

ムーミンママは、ひとりしずかに口ぶえをふきながら、ときどきまどの外を見ました。ムーミンパパは心配で、へやからへやへうろつきまわっていました。

「あの子らは、なぜかえってこないんだろ。もう、一時半だぞ。」

と、パパがいいました。

「きっと、かえってきますわ、心配なさらなくても。ちょっと、このケーキをもちあげてくださいません？　下へ紙を

しい暑さでした。おまけに、たべるものものむものも、なにもありません。みんなは、ただ歩きつづけました。

（なにかをほしがって歩いていると、おかしなことになるものだなあ。ぼくには、おかしをやいている、いいにおいがしてくるように思えてしかたがない。）

こう、ムーミントロールは考えました。まもなく、かれはたちどまって顔をあげ、鼻をぴくぴくさせました。それから、きゅうにかけだしたのです。

木だちがまばらになり、おかしのにおいは、きつくなりました。とつぜん、目の前にムーミン谷がひらけました。出発したときとおなじように、しずかでかわりなく、青いムーミンやしきもたっています。そして、家の中ではムーミンママが、おちつきはらって、しょうがビスケットを、やいているところでした。

「家へかえったんだ、かえったんだぞ。ちゃんとうまくいくってこと、ぼくは知ってたんだ。早くきて、見ろよ。」

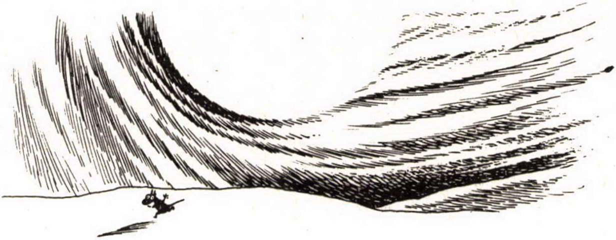
と、ムーミントロールはさけびました。

「あれが、あんたの話してくれた橋ね。そして、あれは、木のぼりの木でしょ。いいおうちね。ベランダがすてきだこと。」

と、スノークのおじょうさんはいいました。

できるだけふかく地中にもぐりこみ、鳥たちは、じっと木の中にひそんでいました。
「おや、きょうは耳のうしろに、花をつけないのかい。」
と、スノークが、妹にいいました。
「うれしいわ、それに気がついてくれて。でも、わたし、気がすすまないの。こわいんだもの。」
かの女は、そういいました。
スニフは、子ねこのことを考えながら、歩いていました。
（子ねこは、ベランダの階段にいるだろうか。ぼくを見たら、なにかいうだろうか、それとも、のどをならすだけかな。あんなに小さいのだから、もしか、ぼくをおぼえていなかったら、どうしよう。）
かれは、だんだん心ぼそくなってきて、しまいに、ひとりでしくしくやりだしました。
「心配するな、うまくいくよ。しかし、もうちょっと速く歩けよ。いまは、いそがしいんだから。」
と、スナフキンがいいました。
すると、ヘムルが、すてばちにどなったのです。
「なに、いそがしい。そうか、みんないそがしがって、がさがさしよって。この世界には、どこにも平和がないわい。」
かれは、切手のアルバムをそこらじゅうさがし歩き、悲しみで顔をゆがめていました。おそろ

第9章



八月七日金曜日。この日は、ぜんぜん風がなく、おそろしく暑い日でした。何時なのか、だれも知りません。ただ、ずいぶんねぼうしてしまったのが、だれにも感じられるだけでした。

彗星は、とほうもなく大きくなっていて、ムーミン谷めがけてやってくるのが、はっきり見てとれました。彗星のまわりのほのおは、ものすごくつよく、白く光っていました。

ムーミントロールは、まっさきに木からおりて、ゆっくりあたりを見まわしながら、くんくんとにおいをかいでいましたが、やがて大きな声をあげました。

「ここは、みどりにつつまれてるぞ。いちめんに、葉っぱと花がある！　森は、たべられていない。森らしい森だ。ぼくの家も、そう遠くないらしいぞ。」

この日は、大きな虫から小さなありまで、みんな

十二時になるまで、目をさましませんでした。

と、いちばん小さなかげがいいました。
　すると、ヘムルがおこっていいました。
「じぶんのことを、たなにあげるな。そうかんたんに、じぶんの責任はなくならんぞ。ところで、わしの服をかえしてもらえんかね。」
「はい、どうぞ。かしてくださって、ありがとうございました。」
　スノークが、そういいました。
「スノークのおじょうさんは、どこ。」
と、ムーミントロールが、大声をあげました。
　かの女が、くらやみの中でへんじしました。
「ここよ。わたし、鏡もちゃんともってるわ。」
「ぼくは、帽子をね。ハーモニカも。そして、わしの羽も、帽子についてるぞ。」
　こういって、スナフキンはわらいました。
　ヘムルは、服を頭からかぶって着てから、いいました。
「みんな、きげんがよさそうだな。こんなしわくちゃのすそかざりを、わしはすかん。」
　それからは、だれも口をきく元気がなくなってしまいました。
　かれらは、大きな木の上で、ねむりこみました。とってもつかれていましたから、あくる日は



ま夜中ちかくになって、やっとたつまきがひと息(いき)ついて、おさまりはじめました。気球(ききゅう)はある森にゆっくり落下(らっか)して、高い木にひっかかったのでした。

しばらくは、だれひとり、ものをいいません。みんな、それぞれのえだにうずくまって、赤く色づいた森のくらやみをながめ、たつまきが遠ざかっていく音をきいていました。たつまきは、やがてかすかなざわめきだけになり、それから、まったくしずかになりました。

そこで、スナフキンがたずねました。

「みんな、だいじょうぶか。」

「ぼくは、ここにいるよ。ぼくなのか、あらしに運(はこ)ばれてきた、くずのかたまりなのか、知らないけどね。こんなめにあうのは、きみたちの責任(せきにん)だと、ぼく、いったろう。」

と、スナフキンがさけびました。ヘムルがなんと答えたのか、だれの耳にもきこえませんでしたが、そのほうが、かえってよかったでしょうよ。ヘムルは、なにか口ぎたなくののしりましたから。つぎの瞬間に、みんなはよってたかって、ヘムルの服を、頭からすっぽりとひきはがしてしまったのです。それは、ヘムルがおばさんの形見にもらった服で、すごく大きなすそかざりがついていました。

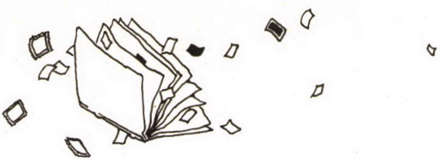
首のところのひもを、きつくしめて、そでにひもをむすんだだけで、まったくすてきな気球に早がわりしたのです。

いまは、まっ黒な雲がやってきました。それもすぐちかくに。

「しっかりつかんで！　はなしたら、だめだぞ。いま、あんたの切手アルバムを追って、とんでるんだから。」

と、スナフキンはどなりました。

みんなは、ヘムルの服のすそかざりにしがみつきました。服は、あらしにふくらまされて、ふきとんでいきます。いまは、沼の上も黒雲におおわれていて、うなり声をあげながら、黒雲がかれらを追っかけてきます。足もとの地面も見えません。かれらはまっくらな中を、西のほうへ、ずんずんふきとばされていきました。夜のくらがりの中をまっしぐらに——。



服は、頭の上までまくれあがり、もう希望もなくなって、なにもかもあきらめねばなりませんでした。

しばらくあとで、だれかがそでをひっぱりました。

「うるさい。わしは、だいじな切手のアルバムを、うしなってしまったへムルなんだ。」

こういってわめくへムルを、ムーミントロールがなだめました。

「わかりますよ。ほんとうにかなしいことです。だけど、すみませんが、おじさんの服を、かりなけりゃならないんです。その服で、軽気球をつくろうと思うんですよ。ぼくたち、家へかえらなくちゃ。彗星がくるんですよ。どうか、その服をぬいでください。」

へムルは、やけくそでどなりました。

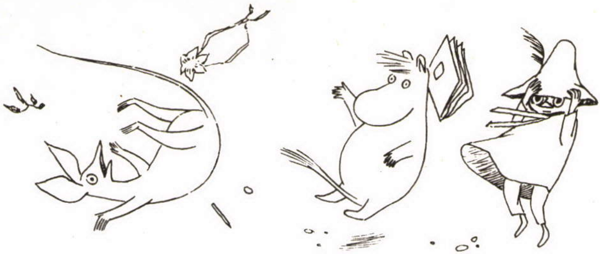
「うるさい。彗星のことなんかいうな。彗星なんか、大きらいじゃ。」

いまは、あらしが風力10になりました。

地平線に、うずまき形の雲がわきおこり、それがうずをまきながら、ちかづいてきます。

「早く、服をぬいで。」

されてかえれるよ。」
と、ムーミントロールがさけびました。
　あらしは、ヒューヒューとうなって、かれらを沼のむこうへ、ふきとばしました。あらしは、スナフキンの帽子をもぎとろうとしたり、スニフをひっくりかえしたり、ムーミントロールのメダルを、空へまきあげたりしました。
「こわいわ。手をつかまえてて……。」
と、スノークのおじょうさんは、ひめいをあげました。
　ムーミントロールが、かの女の手をしっかりつかみました。そして、こんなことを思ったのでした。
（大きな軽気球がありさえしたら、家までとんでかえれるんだがなあ……、パパとママのところへ、まっすぐに……。）
　そのときヘムルが、サイレンよりけたたましくさけんだのです。あらしが、かれの切手アルバムをうばいとって、めずらしい切手も四まいぞろいのシートも、すかしもようの切手も、みんなあたりにとびちらせたのでした。小鳥のように空をまって、小さく小さくなっていきます。ヘムルは、あとを追って、かけだしました。スカートは、まくれあがり、風にふくらんでさけました。大きな紙だこのように、ヘムルはふきとばされて、一本の木にしがみつかねばなりませんでした。



……家は見つからない！

「おそろしい歌だなあ。」
と、ヘムルがいいました。
そして、つかれた小さな足で、みんなは歩きつづけたのでした。夕がたちかくなって、風がふきだしました。はじめは、ふつうのつよい風でした。ところが、ぐんぐんつよまって、風力5か風力6になり、やがては風力7になって、まもなく、あらしになってしまいました。あらしがやってきたのは、かれらが大きな沼の上にいるときでした。
「カタストローフ第二号、こんどは、たつまきだ。」
スノークは、ノートをふりながら、どなりました。
とたんに、かれの手から、ノートが空高くまいあがってしまったのです。彗星からたすかるにはどうしたらよいかと、こまかくちゃんと書いてあったのに。
「ありがたいことに、いい風向きだぞ。ぼくたち、風にふきとば

と、ヘムルは、ぶうぶういいました。

いなごにくいあらされた森をとおって、みんなは歩きつづけました。

（うちの庭の木が、たべられてなけりゃ、いいがなあ。こんなにされたら、ママは気がくるっちゃうぞ。パパのたばこ畑だって……。）

ムーミントロールは、こんなことを考えて、かなしくなったので、たのみました。

「スナフキン、なにか歌をふいてよ。かなしいのがいいよ。」

「ハーモニカは、だめになってしまったよ。ちょっとだけしか、ならないんだ。」

と、スナフキンはいいました。

「ふうん、それでもふいてよ。」

そこでスナフキンは「こまったこまった」の歌をふいたのです。

こま……　こま……！
夜……　つめ……！
……五時
おまえは　ひとり……
つかれた……

きだしになっています。のこっているのは、スノークのおじょうさんの耳のうしろについている花だけでした。

そのうち、おなかをすかしたいなごの、雲のような大群は、西の空へとんでいきました。森は、ふたたびしずかになりました。スノークがこしをおろして、ノートをひろげました。

「カタストローフ第一号」

かれはこう書いてから、いいました。

「彗星は、いつもカタストローフをつれてくるものだってこと、きみたちは知ってるかい。」

「カタストローフって、なあに。」

と、スニフがたずねました。

「いなごの大群とか、伝染病とか、地震・洪水・たつまきなんかさ。」

こういってスノークは、いろいろと例をあげました。

「つまり、大騒動のことだな。どこへいっても、のんびりとはできんわい。」





たちまち森をたべつくしてしまいそうでした。バリバリ音をたてて、くいちらし、一本また一本と、木をまるはだかにしていきます。いなごたちは、むらがってとびはねたり、おしあったりしながら、かじったり、ひきさいたり、むしりとったりしていきました。

　スノークのおじょうさんは、石の上へはいあがって、ひめいをあげました。

「あんなのただのいなごじゃないか。まえに見たろう。ダンスのときに、バイオリンをひいてたやつを……。」

と、にいさんがいいました。

「でも、これは大集団よ。一ぴきじゃないもの、あれとはべつよ！」

　こう、スノークのおじょうさんはさけびました。

「あいつらは、切手もたべよるかね？」

　ヘムルは、そうききながら、切手のアルバムをかかえて、立ち往生していました。

「ああ、うつくしい森が、あんなになって！」

と、ムーミントロールは、声をあげました。

　どの木も、葉っぱがなくなって、まるはだかでした。地面も、すっかりむ

（ムーミンママは、子ねこにミルクをだしておいてやるのを、わすれなかったろうか。もし、あの子ねこが、ぼくをすきになるかわりに、ママをすきになりかけていたら、どうしよう。ぼくに、からだをすりよせてくるだろうか。それとも、しっぽをぴんとつきたてたまま、いってしまうだろうか。）

だれだって、じぶんのねこがどこにいるのか、たしかなことは知りません。たしかなのは、ものすごくじぶんをすいていてくれるということを、態度でしめされることだけです。スニフは、この旅のあいだじゅう、子ねこのことをひとこともいわなかったと、たいそう得意に思いました。

だしぬけに、スナフキンが声をあげて口からパイプをはなしました。

「あっ、風がふきはじめたぞ。」

みんな足をとめて、耳をすましました。遠くの森のおくで、風のそよぐ音がしたかと思うと、たちまち、ゴーゴーという重いひびきになりました。ところが、森の木はちっともゆれません。

「あっ。」

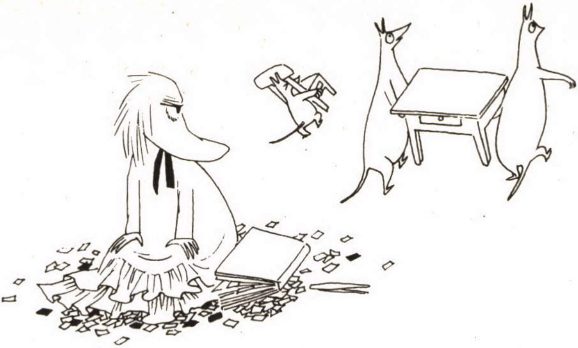
と、スノークがさけびました。

木のてっぺんの上を、大きな雲が、こちらへむかってくるのです。雲は上へあがったり、下へしずんだりして、赤い空を黒くぬりつぶしていたかと思うと、とつぜん森をめがけて、つっこみました。雲ではなくて、いなごだったのです。何百万びきという、みどり色の大きないなごは、

それから、ヘムルはたずねました。
「わしは、どうしたらよいんじゃ。」
「わたしたちについていらっしゃいよ。あんたは、じぶんも、その切手も、わたしたちのすばらしいどうくつの中へ、かくせるわ。」
と、スノークのおじょうさんがいいました。
「ぼくのすばらしいどうくつの中へだい。」
と、スニフはいいました。

こうして、ヘムルもいっしょに、ムーミン谷へむかうことになりました。かれをつれて歩くのは、なかなかやっかいでしたが、しかたありません。ときには、めずらしい切手をおとしたというので、それをさがすために、何キロもあともどりしなくてはなりませんでした。しかも二、三回もスノークとけんかをしましたが、なんのためのけんかか、ふたりとも、わけがわかりませんでした。(けんかじゃない、議論してたんだと、ふたりはいいはりましたが、それは、けんかとおなじ声でした。)

スニフは、ひとりはなれて歩いていて、いつになく、だまりこくっていました。かれは、子ねこのことを考えていたのです。



らんとは！」

スナフキンが、とてもゆっくりと、そしてはっきりといいました。

「ヘムルさん。それはね、彗星が地球と衝突するからなんですよ。」

「なに、衝突する？　それは、切手の収集となにか関係があるのかな。」

「ありませんよ。尾をつけた星と、関係があるんです。そして、そいつがやってきたら、あんたの切手も、あんまりのこりませんね。」

と、スナフキンがいいました。

「そりゃたいへんだ。」

ヘムルは、はいているスカートを、あわてててつまみました。

（ヘムルというのは、スカートをはいて歩くのです。そのわけは、だれも知りませんけれど、たぶん、ズボンをはいたらどうかなどと、考えたことがないからでしょうよ。）

と、ムーミントロールがたずねました。

ヘムルは、きらいだということを、かくしきれずに答えました。

「あれは、わしのいとこじゃ。大ばかものよ。あんなやつとは、もう親類でもなんでもないわ。わしは、あいつと絶交したぞ。」

「どうしてなんです。」

と、スニフがききました。

「あいつは、一つのことばかりいいよる。こん虫、こん虫、こん虫、そればっかりじゃ。足もとで地球がこわれても、あいつは、知らん顔をしとるよ、きっと。」

スノークが、口をはさみました。

「それなんですよ、いまおころうとしてるのは。くわしくいえば、あしたの八時四十二分です。」

「なんだと。」

といって、ヘムルはことばをつづけました。

「それで、おそろしいさわぎをしてるんかね。わしは、まる一週間かかって、切手を整理して、すかしもようをぜんぶしらべたのさ。それが、どうじゃ。つくえはもっていってしまうし、いすは、とりよる。家じゅうの戸をしめてしまってさ！　おかげでわしの切手は、ごちゃまぜになって、いまこうしておるわけじゃ。しかも、なにごとがおこるのか説明できるやつが、ひとりもお

スナフキンが、こういいました。

スノークのおじょうさんが、ムーミントロールのうでに、手をさしこみました。

「どんなことがあっても、あんたがこわがらないあいだは、わたしもこわくないの。やくそくするわ。」

とうとう、むこう岸につきました。みんなは竹馬からとびおりて、砂の上にころがりました。森の中へかけこみました。うれしくて大声をあげ、にぎやかにわらいながら、だきあってよろこんだのです。

「もう、家はちかいぞ。いそごう、いそごう。パパとママが、ベランダでまってるんだ。」

こう、ムーミントロールはさけびました。

けれど、家へかえる道は、思ったよりもずっと遠いものだったのです。

森の中で、一ぴきのヘムルに会いました。そのヘムルは、切手のアルバムをかかえて、ひとりでぶうぶういっていました。

「大さわぎで、かけまわって、やかましいことだ。いったい、なにごとがおこったんだ。わけをいえるやつが、ひとりもおらんとはなあ！」

「こんにちは。あなたは、ちょうちょのすきなヘムルのおじさんと、親類ですか。」

ムーミントロールは、かなしくなりました。
「ふしぎだなあ。ぼくは、あの人たちをたいてい知ってるし、長いあいだ、会っていないんだよ。だから、いまこそ、うんと話があるのに。」
「あの人たちは、おびえているのさ。」
と、スナフキンはいいました。
「ばかだなあ。じぶんの家にいて、おそろしいことなんか、あるものか。」
と、ムーミントロールはいいました。
「ぼくたちは、きっとものすごく勇敢なんだ。」
こうスニフはさけんで、宝石のきらきらしている、あの短刀を、ふりまわしました。
ムーミントロールは、首をかしげて、こういいました。
「ぼくたちが、とくべつに勇敢なのじゃないと思うよ。ただ、あの彗星になれてしまっただけなんだ。彗星と、なじみになってるくらいだもん。あれを知ったのは、ぼくたちがさいしょなんだ。しかも、あれがどんどん大きくなるのを見てきたんだ。彗星って、ほんとにひとりぼっちで、さびしいだろうなあ……。」
「うん、そうだよ。人間も、みんなにこわがられるようになると、あんなに、ひとりぼっちになってしまうのさ。」



こういうなり、スクルットは髪の毛をふりみだして、自転車を走らせていったのでした。

みんなは、しばらく、ただかれのうしろすがたを、見おくっているばかりでした。

「かばん。あの荷物。この暑いのになあ。さあ、それじゃ前進だ。」

と、スナフキンがいいました。

しばらくいくと、何百ぴきというニョロニョロが、東へむかっていくのが見えました。海の底は、避難するものたちで、ごったがえしています。はつかねずみの一家やら、こけのトロールたち、森の動物たちなど、ありとあらゆる種類の小さないきものでした。みんな、ムーミン谷からにげだしてきたのです。たいていは歩いていましたが、興奮して、走っているものもいます。けれども、手押し車か荷車をもってきているのがふつうで、家をそっくりそのままおしてくるものさえいました。どの人も、おびえて空を見あげていて、「ハロー。」とあいさつするのが、せいいっぱいでした。ものをいうひまは、なさそうなのです。

そのスクルットは、顔をまっかにしていて、みんなの顔を見ても、あいさつもしません。

ムーミントロールが、声をかけました。

「やあ、ぼくをおぼえてないのかい。きみは、ひっこすの。」

スクルットは、自転車からおりて、早口でいいました。

「ムーミン谷のものは、みんなひっこしたよ。あそこにのこって、彗星のくるのをまってるものが、いると思うのか。」

「彗星が、ムーミン谷へぶつかるって、だれがいったんです？」

と、スノークがたずねました。

「じゃこうねずみさ。」

と、スクルットは答えました。

「だけど、パパとママはのこってるよ。パパとママは、ぼくをまってるよ。」

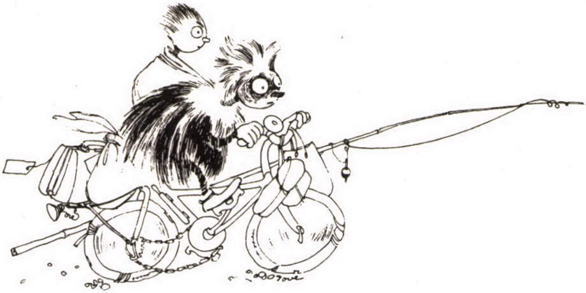
ムーミントロールは、そうどなりました。

「うんうん。」

スクルットは、いらいらしていいました。

「あの人たちは、ベランダにいるさ。しかし、そんなことは、ぼくに関係ない。それに、きみも早くいかないと……。」

第8章



スニフは、目をさますなり、いいました。
「あしたは、いよいよあれがくるんだね。」
みんな、彗星を見ました（スノークのおじょうさんもです。でも、こっそりとでした）。彗星はおそろしく大きくなっていて、まわりには、めらめらもえあがる、ほのおのふちどりがついていました。湯げはきえてしまって、海の底のずっと遠くまで見えました。
「おはよう。さあ、出発しよう。」
スナフキンはそういって、ぐっと帽子をふかくかぶりました。
朝ごはんのころ、一ぴきのスクルットが、じぶんの子をふくろにいれてせなかにのせ、自転車で走ってくるのとであいました。荷物台にはかばんがのせてあり、ハンドルにも、たくさんの荷物がゆれていました。

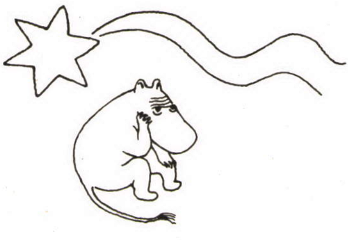
けれども、やがてこう考えなおしたのでした。
（きっと、みんなどうやったらたすかるか、ママが知ってるよ。）

いて、奇妙にしずかでした。地上で、夕がたになると、きこえてきたやさしい音のかずかず――夜風にそよぐ木の葉の音や、小鳥のさえずりや、帰宅をいそぐ足音などを、みんなはなつかしく思いました。たき火をすることもできません。そして下にひそんでいる、えたいの知れないおそろしいもののあいだでねむるのは、こわいことでした。みんなは、やっと、高い岩の上にたどりつき、そこですこしは安全だと感じました。そして、スノークたちの乾パンののこりを、すっかりたべました。

　ムーミントロールが、いちばんはじめの見はりをひきうけて、スノークのおじょうさんのかわりも、ひきうけることにきめました。ほかのみんなが、身をよせあってねむっているあいだ、かれは、ひあがった海の底を、じっと見つめていました。彗星の赤い光にてらされていますが、ものかげはすべて、ベルベットのように黒かったのです。

　ムーミントロールは、きみのわるい風景を見ながら、考えました。

（あんな火の玉がとんでくるのを見て、地球は、どんなにこわがっていることだろう。ああ、森や海や、雨や風、そして日光や草やこけ、ぼくはどれもすきでたまらない。あれがみんななくなったら、ぼくはとてもいきていられないな。）





いちばん大きくいちばんうつくしい貝が、ころがっていたからです。とても白くて、うすくらがりの中で光っていました。海の音が貝の中でうたっています。

　スナフキンが、声をかけました。

「そんなものに気をとられちゃいけない。ここは、危険なんだ。この下には、すがたを見せたことのない怪物たちがいるんだぞ。あのどろの下に……。」

　さて、夕がたになりました。みんなは、できるだけくっついて、この世のものとも思えないしずけさに、耳をすましました。なにもかもが、やわらかくぬるぬるして

「この中に、人が住めるわね。なにやら、スースー音がしないこと？　貝の中で、だれかが声をだしてるのかしら。」

「あれは、海の音だよ。貝が、海のことを思ってるんだ。」

そういうと、スナフキンは、じぶんもハーモニカをふきたくなって、ハーモニカをとりだしました。けれども、音がでなくなっていました。湯げが、すっかり音をうばってしまったのです。

「ハーモニカが、いたんでしまったよ。」

スナフキンは、まゆをしかめました。

「家へかえったら、きっとパパがなおしてくれるよ。パパは、なんでもなおしちゃうさ。」

と、ムーミントロールがいいました。

「もう、海底のいちばんふかいところへ、ちかづいたぞ。気をつけて歩かないと……。」

と、スナフキンがいいました。

ここには、海草もありません。ねずみ色のどろにおおわれた絶壁が、目の前にきりたっているだけでした。まったくしずまりかえっていて、ぞっとするほどです。そして、とつぜん、底がなくなってしまいました。かげと湯げにつつまれた谷の中に、見えなくなっているのです。

だれもそこへは、ちかづいてみようとしません。みんな、おしだまったままとおりすぎました。スノークのおじょうさんだけが、ふりかえって、ため息をつきました。絶壁のふちに、海で

でしまいました。
「きみは、ぼくの命をたすけてくれたよ。とってもかしこい方法で。」
と、ムーミントロールは、スノークのおじょうさんにいいました。
「あれは、もののはずみよ。でも、あんたを大だこから、毎日でもたすけてあげたいわ。」
「いやだよ、そんなの。きみは、よくがふかすぎるよ。おいでよ。ここからでよう。」
みんなは一日じゅう、さびしい海底の土地を、ふかくふかく歩きつづけました。このへんには、海岸でひろえる貝とは、およそにていない、ものすごく大きな深海の貝が、ころがっていました。ぎざぎざのついた貝や、うずまきになった貝で、こいうつくしい色をしていました。
スノークのおじょうさんがいいました。



れのうしろのくらやみの中に、なにかもぞもぞとうごいているものが見えたのです。それが、ゆっくりとムーミントロールにちかづいてきます……。

「あぶない、うしろに、なにかが！」

と、おじょうさんは大声をあげました。

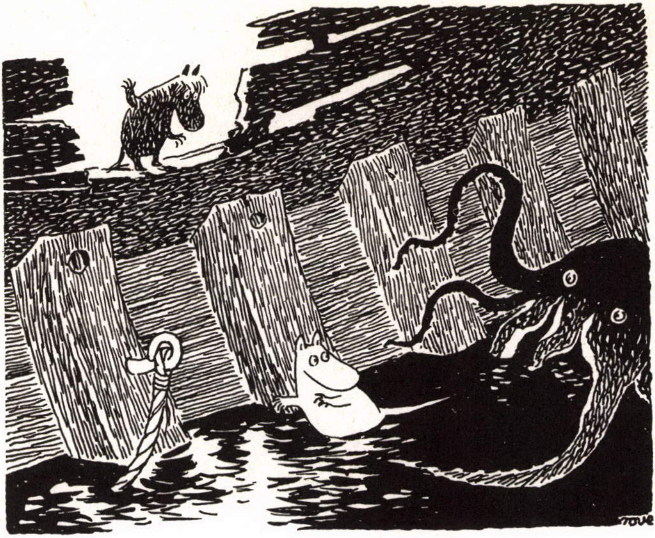
　ムーミントロールは、あわててうしろをふりむきました。

　それは、たこでした。海でいちばんおそろしい怪物の大だこが、くらやみの中からそろりそろりと、こちらにむかってきているのです。

　ムーミントロールは、上へよじのぼろうとしましたが、板がぬるぬるしていました。なんべんもすべりおちて、ドブンと水の中へおちてしまいます。スノークのおじょうさんは、手に鏡をにぎりしめながら、上でやきもきしていました。

　そのあいだに、大だこは、いっそうちかづいてきました。

　ところが、きゅうにたこはたちすくんで、目をぱちくりさせました。鏡が、赤くもえている彗星のすがたをとらえて、そのまぶしい光が、大だこの顔に、まっすぐ反射したのです。たこは、びっくりぎょうてんしました。ふかい海のおくで、ずっとくらしてきたのに、いまはそのくらさが、なくなっているのです。海がありません。いやな赤い光が、まっすぐ目にさしこむのは、なによりもおそろしいことでした。大だこは、大きく息をついて、ぜんぶのうでで頭をかかえこん



「そうね。じゃ、わたしを上へあがらせてよ。」

そこでムーミントロールは、貨物べやの天まどのふちへ、かの女をおしあげてやりました。

「きみたち、ぶじだったかい。」

と、スナフキンがどなりました。

「わたし、またたすかっちゃったわ。」

スノークのおじょうさんは、ほがらかに答えて、鏡がわれなかったかどうかしらべました。うれしいことに、ガラスもだいじょうぶだし、ルビーのばらの花も、うらがわにちゃんとついていました。鏡にうつっているじぶんのすがたを見ると、前髪がずぶぬれでした。それから、黒い天まども見えました。その下に、ムーミントロールの耳が見えて、か

たすけにかけだしたムーミントロールは、さびついたいかりのくさりをよじのぼり、甲板の上の海草に足をとられながら、貨物べやのくらがりをのぞきこんで、さけびました。
「どこにいるんだい。」
「ここよ。」
スノークのおじょうさんが、あわれっぽい声で答えました。
「どこかをうったかい。」
「いいえ、だけどびっくりしたわ。」
ムーミントロールは、貨物べやへとびおりましたが、おなかまで水につかってしまいました。くさったいやなにおいがしました。
「あのスニフのやつめ、宝石なんぞを……。」
と、かれはいいました。
ところが、スノークのおじょうさんは、そうは思いませんでした。
「でも、わたし、あの人のことわかるわ。わたしだって、宝石や金や真珠やダイヤモンドが、大すきよ。きっと、この中にもあるわ。さがさない?」
「ここは、くらすぎるよ。どんなおそろしいことがあるか、わからないぞ。」
スノークのおじょうさんは、おとなしくいいました。

ましたが、船首かざりはのこっていました。かざりの像は、まっすぐ前をにらんで、さびしそうにほほえんでいます。

「船の人たち、たすかったかしら。」

スノークのおじょうさんが、小さい声でいいました。

「もちろんさ。船には救命ボートがつんであるもの。もう、いこうよ。あれを見ると、かなしくなりすぎるもの。」

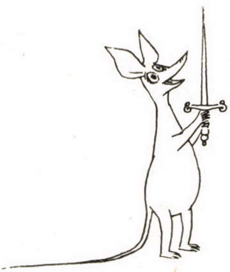
と、ムーミントロールは答えました。

「ちょっとまって。なにか光ってるよ。金でできたものが……。」

スニフがさけんで、竹馬からとびおりました。そして、難破船の下にもぐりこむと、海草の中をほじくりはじめました。

「短剣だ。つかは金で、宝石がついてるぞ。」

スノークのおじょうさんは、それを見ようと、かがみこんだひょうしに、重心をうしないました。竹馬にのったまま、大きく前へかたむいて、それから、うしろへかたむいたのです。かの女は、かん高いひめいをあげて、ふわりと難破船の中へころげこみました。




TOVE

ないんだと思えば……。」
「あそこに。」
と、とつぜんスニフがさけびました。
「宝箱だ！　さっきいってたとおり……。」
かれは、竹馬をほっぽりだして、砂の中かららんぼうに、箱をかきだしました。
「てつだってくれ。かぎがかかっていて、どうにもできない……。」
「ぼくたちには、もてないな。大きすぎるもの。スニフ、早くおいで。むこうへつくまでには、もっといいものが見つかるにきまってるよ。」
こう、スノークにいわれて、スニフは、とてもざんねんそうに顔をゆがめながら、歩きだしたのでした。
岩山は、いっそう高く、そしてすさまじくなり、地面は、われめでいっぱいでした。たえず、竹馬が大地のひびわれにひっかかってしまいます。すすむのが、だんだんのろくなっていきました。ときどき、だれかがたおれてしまうこともありました。みんな口をきかなくなって、ただむちゅうで歩きました。
ふいに、難破船が見えました。そのあわれな船は、たいそうみじめなようすでした。マストはおれ、船体には貝がらや海草が、いっぱいくっついています。船具はあらい流されてしまってい

と、おじょうさんはいいました。

すると、ムーミントロールがいいました。

「ほんとにかなしいけどね。ぜんぶをたすけてやってる時間は、ないと思うよ。」

「そうね、でも何びきかでも。」

そういって、スノークのおじょうさんは、ため息をつきました。かの女は竹馬にのって、みんなのあとにつづいたのでした。こんな海の底では、彗星がことさらに大きく感じられ、まるではあはあと息をはずませながら、湯げの中でゆれているように思われました。みんなは、足の長い小さなこん虫みたいなかっこうで、海のふかいところへ、ずんずんおりていきました。

そこここに、ものすごく大きな山が、砂の上にそびえています。まえには、そういう山々のてっぺんだけが、海から外へでていて、小島や岩島になり、船あそびの連中は、そこへ船をつけて、小さな虫たちが、島のまわりで水あそびをしたものだったのです。

「ぼく、もう二度とふかい水の上でおよぐ気がしないな。おなかの下が、こうなっているんじゃや。」

スニフは身ぶるいしてこういうと、ふかいわれめの中を、のぞきこみました。そこには、まだ水がのこっていて、なぞにつつまれた世界がひそんでいるのでした。

スナフキンがいいました。

「しかし、うつくしいよ。こわくて、うつくしいよ。それに、いままでだれもここへきたことが

「まだ、だめだよ。ぼく、もうちょっとけいこしなけりゃ。」

スニフは、そうたのみながら、ちらりと海底を見おろしました。

スナフキンはいいました。

「もう、時間がない。みんないいか、どろんこやわれめに気をつけろよ。ぼくに、ついてこい。」

ひとりずつ竹馬をかかえて、赤い夕もやの中をくだっていきました——。海草に足をとられたり、すべったりしながら。湯げのためにおたがいの顔もよく見えないくらいでした。

「いいかい、こんなことになったのも、きみたちの責任だぜ。」

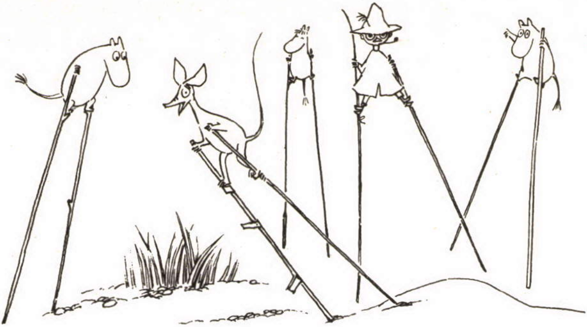
と、スニフがいいました。

「ふんふん、わかってるさ。安心してろ。」

ムーミントロールは、そう答えました。

目の前には、死んだ海底がひろがっていて、とてもあわれなようすでした。すみきった水の中でうつくしくゆれていた海草が、ぺたりと黒くはりついていて、わずかにのこっている水たまりの中で、さかなたちが、みじめにはねています。とってもいやなにおいがします。くらげとか小さなさかななどが、あちこちであっぷあっぷしていました。スノークのおじょうさんは、いそがしくかけまわって、ふかい水のあなへ、さかなたちをはなしてやりました。

「おお、よしよし。すぐに、よくなるからね。」



を見るな。下を見たら、しせいがくずれて、たおれるぞ。」

「ぼく、めまいがする、げろがでちゃう。」

スニフがわめきました。

スナフキンはいいました。

「よくきけよ、スニフ。海の底には、沈没してる宝箱があるものなんだぞ。」

それをきくと、たちまちスニフの気分のわるさは、ふっとびました。

スノークのおじょうさんが、大声をあげました。

「これ、見てよ。わたし、うまいでしょ。ほら。わたし、考えたりしないわ。からだがうごくだけよ。」

「そんなこと、わかってるさ。」

と、にいさんのスノークはいいました。

しばらくすると、スナフキンがいいました。

「もう、みんなうまく歩けるようになったらしいね。さあ、それじゃ出発しよう。」

つぶれちゃうと、そのぼろノートに書いとけよ。スナフキンでも、だめだと思ってるくらいなんだぞ。」

みんな、だまりこくってしまいました。

そのとき、スナフキンがたちあがって、いったのです。

「ぼくたちは、竹馬にのって歩いていこう。それなら、きっとまにあうよ。」

「そうだ。それは、いい思いつきだな。うん、竹馬だ、もちろん。それ、いそげ。みんな、いそいでじぶんの竹馬を見つけなくちゃ。ぼくたちは、たすかるんだ。家へかえれるんだぞ。」

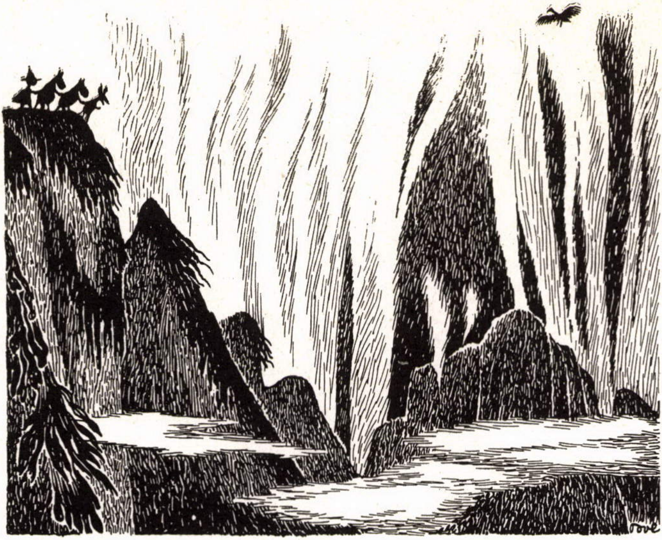
ムーミントロールは、どなりました。みんな、竹馬になるものをさがしに、かけだしました。

海岸ほど、そんなものが見つかるところは、どこにもありません。ムーミントロールは、二つにおれた危険標識の支柱を見つけました。スノークのおじょうさんは、ほうきの柄と、一本のかいを見つけました。スナフキンは、つりざおと、はたざおを見つけました。スニフは、ホップの支柱と、こわれたはしごを見つけました。ところが、スノークはわざわざ森までいって、きっちりおなじ長さの、ほそいもみの木を二本もってきたのでした。

それから、みんなあつまって、竹馬で歩くけいこをしました。スナフキンが、竹馬にのって、前へすすんだり、うしろへさがったりして、みんなに歩きかたを見せながら、どなりました。

「大またに歩くんだ。どっしり、おちついて。考えちゃ、いかん。からだで、おぼえるんだ。下

んでした。
スノークが、だしぬけに、こういってききました。
「ここを、どうやってわたればいいんだね。二日しかないから、まわり道してどうくつへいくひまはないぞ。」
だれも、なんにもいいませんでした。
スノークがつづけました。
「会議をひらかなくちゃ。ぼくが、議長で書記になるよ。なにか、いい考えがあるかい。」
「空をとぶんだよ。」
と、スニフがいいました。
「歩くさ。」
と、ムーミントロールはつぶやきました。
「ばかなことばかりいうな。じょうだんをいってるひまは、ないんだぞ。そんな意見は、満場一致で却下する。」
「じぶんの意見を、いってみろ。」
と、ムーミントロールはおこって、どなりました。
「どうにも、しかたないじゃないか。彗星がやってきたら、ぼくたちはみんな、ぐちゃぐちゃに



けれどもスナフキンは、頭を両手でかかえてすわりこむと、こうさけんだのでした。

「あのうつくしい海が……どこにもない。船あそびも、水泳も、さかなつりもできない。ものすごいあらしもなく、すきとおった氷もないんだ。月がすがたをうつすこともない。そして、この砂浜にも、もう波はうちよせないのだ。もはや、浜べは浜べではない。なにもかもないんだ。」

ムーミントロールが、そのそばにこしかけて、いいました。

「またかえってくるよ。彗星がいってしまったら、みんなかえってくるよ。そう思わない？」

だけど、スナフキンは、へんじをしませ

と、スニフがうったえましたが、だれひとりへんじしません。
砂丘が、いっそう長くなりました。地面は海草におおわれていて、それが彗星の赤い光にてらされています。あちらには、岩や貝がらがありました。こちらには、ぼうきれや木やコルクがころがっていました。つまり、海岸で見られるものが、なんでもあるのです。しかし、海がありません。

かれらは、ならんでたったまま、目を見はるばかりでした。ここには海があって、青いやわらかな波がおしよせ、沖にかもめがうかんでいるのがほんとうなのに、谷間が口をひらいているだけなのです。まわりには、湯げがたっているし、下には、あわがたっていました。そして、くさったようないやなにおいがするのです。足もとに砂浜がつづいていて、みどり色のぬるぬるしたがけへくだっていました。

「海がなくなったのね。どうして、なくなっちゃったのかしら。」

と、スノークのおじょうさんが、力なくいいました。

「ぼく、わからないよ。」

と、ムーミントロールは、口の中でぼそぼそいいました。

「さかなでなくて、たすかったね。」

スニフが、むりにおどけてみせました。

「海のにおいが、ちっともしないや。いやなにおいだ……。」
「これは、きっと砂漠だ。この中で、ぼくたちの足はひからびて、みんなゆくえ不明になっちゃうんだよ。ぼく、頭がいたい。」
と、スニフが、顔をくもらせました。
砂で足が重いのです。それでもみんなは、一つの丘をのぼっては、つぎの丘をくだって、歩きつづけました。
そのとき、スノークがさけびました。
「見ろ。あそこを、ニョロニョロが歩いてるぞ。」
砂丘のむこうに、ニョロニョロが長い行列をつくって、うごいています。ニョロニョロたちは、地平線をじっとにらんだまま、たえまなく手足をゆりうごかしていました。
「あいつらは、東へ歩いてるんだ。あのあとについていくのが、いちばんたしかだろう。ニョロニョロたちは、本能で感じるんだからね。」
と、スノークがいいました。
「だけど、ぼくたちの家は、西なんだよ。パパやママは、西のほうに住んでるんだぜ。」
ムーミントロールはこういって、まっすぐムーミン谷をめざして歩いていきました。
「ぼく、のどがからからからになっちゃったよう。」

第7章



八月五日。この日には、もはや一わの鳥もうたわなくなっていました。太陽はぼんやりかすんで、見えないくらいでした。けれども、森の上には、車輪のように大きな彗星がかぶさっていて、彗星のまわりに、火の輪がついているのでした。

スナフキンは、ハーモニカをふく元気もありません。かれは、ひとりで考えこみながら、歩いていました。ほかのものも、口をききません。スニフだけが、頭がいたいといって、ときどきぐずりました。ものすごい暑さでした。

そのとき森がひらけて、砂丘のつづいたあれはてた風景が、目の前にあらわれたのです。やわらかい砂の丘が、どこまでもつづいていて、あちこちにはまにんにくのたばが、ころがっていました。ムーミントロールはたちどまって、あたりのにおいをかぎました。

あ……。」
と、スニフはいいました。

スノークが、たずねました。

「それ、ねこだろう。」

「ぼくは、いわない。きみも考えちゃいけない。」
と、スニフはどなりました。

スナフキンが、ねむくなるような子もり歌や、いさましい行進曲を、つぎからつぎへとふきました。小さな虫たちや水の精たちは、つぎつぎに森のおくへかえりはじめました。木の精たちもいなくなり、スノークのおじょうさんは、鏡を手にもったまま、ねむってしまいました。

やがて、ハーモニカの音もやんで、草原はしんとしずまりかえりました。ほたるたちも光をけしました。

ゆっくりゆっくりと朝がちかづいてくるのでした。

スノークのおじょうさんが、ため息をついて、いいました。
「わたし、ゆううつになっちゃったわ。わたしたちも、この歌とそっくりなんですもの。みんな、つかれた足をひきずって、おうちは見つからないんだわ。」
「あんまりダンスしすぎたから、足がつかれたのさ。」
こういってスニフは、さかずきをのみほしました。
「家は、きっと見つかるよ。ゆううつになんか、なるな。ぼくたちがかえったら、ママはごちそうをつくってまってるんだ。『まあっ、りっぱにやってきたのね。』って、ママがいうから、ぼくたちも、『あれをママに見せたかったよ。』っていうのさ。」
と、ムーミントロールがどなりました。
「そして、わたしは真珠の足輪をもらうのね。あんたには真珠でネクタイピンをつくってあげるわ。」
スノークのおじょうさんが、そっといいました。
「うん。ぼく、いまはめったに、ネクタイをしないけどね。」
「ぼくは、いいものの首に、真珠をつるしてやるんだ。ぼくのひみつは、上が『ね』で下が『こ』、そしてどこへでもついてくるのさ。ぼくがいないから、あれはずっとさびしがってるだろうな

と、ムーミントロールがさけびました。
「それじゃ、『こまったこまった』の歌をふこうか。」
と、スナフキンがいいました。
「だけど、あれはかなしすぎるよ。」
と、スニフは反対しましたが、
「なんでもいいから、あれをふいてよ。あれは、口ぶえによくあうからね。」
と、ムーミントロールはいったのです。
スナフキンが、ハーモニカをふき、ムーミントロールは口ぶえをふき、みんなはくりかえしをつけて、合唱しました。

こまった　こまった
夜は　つめたい
ときは　五時
おまえは　ひとり　さまよう
つかれた足を　ひきずって
けれども　家は見つからない



りひとりにくばられました。ほたるたちは、ダンス場のまん中におかれた玉の中へもぐりこみ、そのまわりでみんなはサンドイッチをたべたり、りんご酒をのんだりしました。

「これから、みんなで話をしあうことにしようや。そこの小さなはい虫ちゃん、なにかお話ができるかい。」

と、スニフがいいました。

そのはい虫は、大あわてにあわてました。

「あら、だめよ。一つは、まあ……。」

「じゃ、それを話してよ。」

「ピンプという名まえの、森のねずみがいました。」

と、そのはい虫は口の中でぼそぼそいって、はずかしそうに、両手で顔をかくしました。

「うん、それで?」

と、スニフがうながしました。

「お話は、これだけなの。」

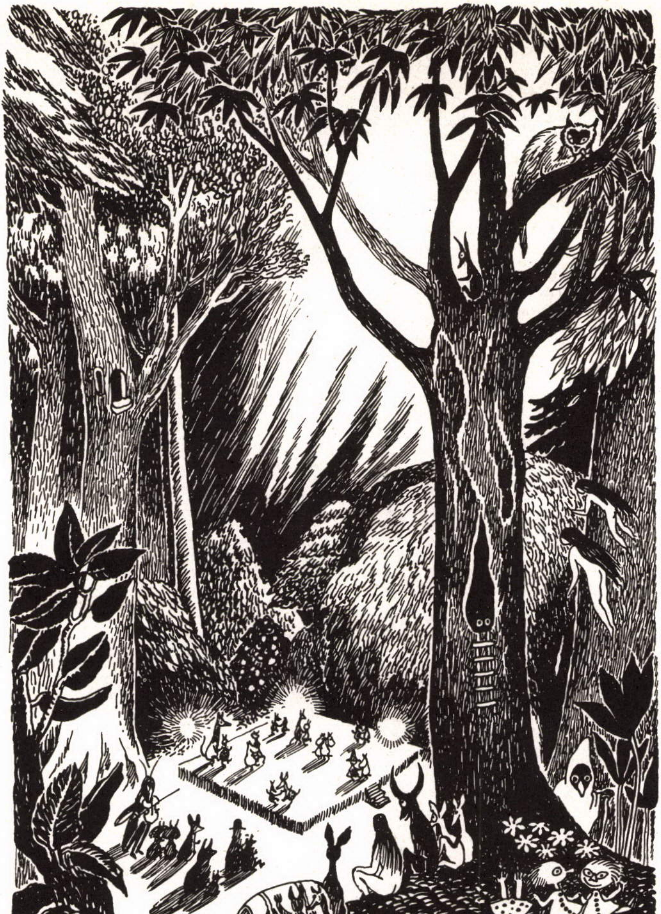
はい虫は、かのなくような声でいうと、こけの中へもぐりこんで、かくれてしまいました。みんなは、おなかをかかえてわらい、水の精たちは、しっぽでたいこをたたきました。

「みんなが口ぶえであわせられるものを、なにかふいてよ。」

「ぼくのダンスさ。ぼく、いま発明したんだ。」
と、ムーミントロールは答えました。
　スノークは、髪に水草をかざった沼のおくさんを、ダンスの相手にえらんでいて、調子をあわせるのにずいぶんほねおっていました。スニフは、いちばん小さな虫とおどりまわっていて、じぶんをすごく大きいように感じていました。虫たちが、スニフのことをほめているのが、はっきりわかりました。ありたちは、それぞれの場所でおどり、森じゅうのすみっこから、あたらしいお客さんたちが、ダンスを見に、ちょこちょこと走ってきたり、のそのそとはってきたり、ぴょんぴょんとはねてきたりしました。黒い夜空を、ひとりでもえながらとんでいる彗星のことなど、考えるものは、だれもいませんでした。
　十二時ごろに、りんご酒の大きなたるがころがされてきて、かばの木の皮でつくった小さなさかずきが、ひと



た。口々にこういっています。
「いい音楽ね。あれでダンスしたら、きっとすてきだわ。」
小さな虫の子どもが、ムーミントロールを指さして、いいました。
「ママ、あそこに大将がきてるよ。」
家族みんながやってきて、ムーミントロールのメダルを、感心してながめました。
「きれいな前髪をしてるんだね、あんたは。」
と、スノークのおじょうさんにむかって、いいました。
木の精たちは、うらがわにルビーのばらがついている鏡で、かわるがわるすがたをうつして見ていますし、水の精たちは、スノークのノートに、ぬれたサインをしました。
そのとき、木かげから「すべてちっちゃな動物は、しっぽにリボンをつけなくちゃ」の歌がきこえたのです。一節もぬかさないで、力のかぎり演奏しながら、スナフキンといなごがあらわれました。
みんなが、ダンスの相手を見つけようとしたときは、ちょっとしたさわぎになりました。でも、しばらくのうちに、めいめい相手を見つけて、ダンス場をおどりまわっていました。
「あんた、ほんとにダンスがじょうずね。これ、なんというダンスなの。」
と、スノークのおじょうさんがききました。


Tove

ており、かばの木の下には、木の精がたくさんいて、ぺちゃくちゃおしゃべりしていました。（木の精というのは、小さな女の人で、みきの中に住んでいるんですが、夜には外へでてきて、葉っぱをゆすります。まつやすぎなど、針のある木には、いないのがふつうです。）

スノークのおじょうさんが、鏡をとりだして、前髪にくしをあて、耳のうしろの花がちゃんとついてるかどうか、しらべました。ムーミントロールは、メダルをまっすぐにしました。ふたりとも、こんなに大がかりな舞踏会にきたのは、はじめてなのです。

「ぼくがハーモニカをふいたら、あのいなごが気をわるくするかねえ。」

と、スナフキンが、そっとききました。

「ふたりでやれよ。あの『すべてちっちゃな動物は、しっぽにリボンをつけなくちゃ』という歌を、あいつにおしえてやったらいい。」

こう、スノークがいいました。

「そいつはいいね。」

スナフキンは、いなごを木かげへひっぱっていって、あたらしい歌をおしえました。

しばらくすると、小さな音が木かげからきこえてきました。はじめは、とぎれとぎれでしたが、やがてずっとつづいて、ふるわせた音や小さな歌声もまじりました。

小さな虫も、木の精も水の精も、おしゃべりをやめて、音楽をききに、草原へおりてきまし

てきました。
「おばあさんは、いかないって。地下室へにげこむんだって。だけど、とってもよろこんで、ぼくたちに、ぼうキャンデーをくれたよ。」
「きみが、ねだったんじゃないだろうな。」
ムーミントロールがこういうと、スニフは、かっとなってどなりました。
「ぜったい、そんなことあるものか。おばあさんは、ぼくたちに七十四ペニーかりがあるから、これをあげる、といったんだ。ぼくは、そのとおりだ、といっただけさ。」
それから、かれらは歩きつづけました。道はくねりつづいています。くらい太陽が、木々のあいだにしずみ、地平線の下へねむりにいってしまうと、かわりに月がのぼりましたが、ふしぎにみどりがかった色をしていて、ぼんやりと見えました。
彗星だけが、ますますつよく光っています。満月くらいの大きさで、森じゅうを赤くあやしくてらしだしました。
野外ダンス場は、小さなあき地にありました。ほたるをあつめたぼんぼりが、いくつもおかれていて、森のちかくでは大きないなごが一ぴき、バイオリンの調子をあわせていました。
あき地には、おおぜいの人がいて、ダンスのはじまるのをまっています。小さな水の精たちも、かわいてしまった沼や森の池から、でてきていました。ダンス場には、小さな虫たちがむらがっ

ムーミントロールは答えました。
「ぼくたちは、ダンスしてるひまなんかないよ。空を見てみろ。」
と、スノークがいいました。
みんな、見ました（スノークのおじょうさんは見ませんでしたが）。
「ぐんぐん大きくなってくるなあ。きのうは、ありのたまごくらいだったのに。いまは、オレンジくらいもある。ぼくは……。」
スナフキンがこういったとき、スノークのおじょうさんが、それをさえぎりました。
「タンゴならおどれるでしょ？　一足横へ、二足うしろへよ。」
「それなら、かんたんそうだね。」
と、ムーミントロールは、あいづちをうちました。
「ばかなやつだな。いつでも、横道にそれてばかりいて。」
と、にいさんのスノークが、妹をしかりました。
「わたしたちは、ダンスのお話をはじめたのよ。そしたら、にいさんがきゅうに、彗星のことをいいだしたんだわ。わたしは、ダンスのお話をつづけているのよ。」
と、妹はいいかえしました。
ふたりは、ゆっくりと色をかえはじめました。ちょうどそのときに、スニフがいそいでもどっ

をまげて、あいさつしたんです。ドアのところで、かの女はたずねました。
「野外ダンス場へいくのは、遠いんですか。」
「いや、もうすぐだよ。でも、ダンスがはじまるのは、月がのぼってからだよ。」
おばあさんは、そう答えました。
森のおくへきたとき、ムーミントロールが足をとめていいました。
「あの草のはえたやねも、あんまりつよそうに見えなかったね。あのおばあさんも、ぼくたちといっしょにきて、ぼくたちのどうくつの中へかくれたらいいのに。」
「ぼくのどうくつの中へさ。ききにいってこようか。」
と、スニフがいいました。
「そうしろよ。」
と、スナフキン。
スニフは走っていきました。みんなはまがりかどにすわって、まつことにしました。
「あんた、あのあたらしいダンスをおどれる？　あれ、なんとかいったわね。」
と、スノークのおじょうさんがたずねました。
「いや、おどれないよ。ぼくは、ワルツがすきだ。」

トに書いてみました。

ノート　　四十ペニー

レモン水（もどした）　　三十四ペニー

メダル　　三マルク

鏡（かがみ）（ルビーつき）　　五マルク

合計　　八マルク七十四ペニー

ズボン　　八マルク

八マルクと八マルクは帳（ちょう）けしで、のこり七十四ペニー

「ふうん、あってるなあ。」

と、スノークはびっくりしていいました。

そこへスニフが、口をはさみました。

「だけど、七十四ペニーたりないよ。それは、どうするの。」

「こまかいことをいうなよ。そのぐらいのちがいなら、ぼくたちの計算では、あってるというんだ。」

と、スナフキンはいいました。

みんなは、小さなおばあさんに、おじぎをしました。スノークのおじょうさんは、ふかくひざ

ルクだし、鏡は五マルクだよ。うらに、ルビーがついているからね。みんなで、八マルク七十四ペニーだね。」
　こう、おばあさんはいいました。
　だれも、なんにもいいません。スノークのおじょうさんは、大きくため息をついて、鏡を売り場の台の上へおきました。ムーミントロールは、メダルのひもをほどきはじめました。スニフは、レモン水でびしょぬれになったじゅうたんをながめました。スノークがものを書いてしまったノートは、それだけねうちがましたのかへったのかと、かれはひとりで思案しました。
　おばあさんは、めがねごしに、みんなのようすを見て、いいました。
「ねえ、小さな子どもたち。スナフキンさんがいらないといった古ズボンがあるわけだろ。これは、ちょうど八マルクだよ。両方で帳けしになるさ。だから、あんたたちは、おかねをはらわなくていいよ。」
「ほんとですか。」
と、ムーミントロールは、たずねました。
「ほんとうですとも。わたしゃ、ズボンをもらっておくんだからね。」
と、おばあさんは答えました。
　スノークは、暗算しようとしましたが、うまくいきませんでした。それで、つぎのようにノー

それで、レモン水を気管にいれてしまったので、むせてしまったのは、いうまでもありません。気持ちのわるい音がしたかと思うと、かれはじゅうたんの上へすっかりはいてしまいました。

「ぼく、げろをはいちゃったよ。」

と、スニフはきまりわるそうにいいました。

「いつでも、こいつはこんなになるんだ。」

ムーミントロールは、こう説明してから、いいました。

「そろそろ、でかけようか。」

「みんなでいくらになります？」

と、スノークがたずねました。

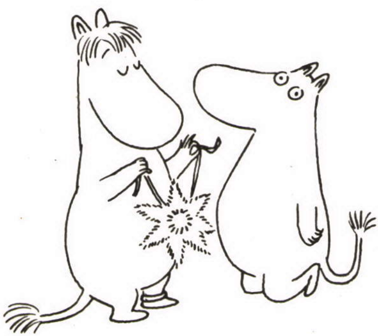
小さなおばあさんは、計算しはじめました。そのあいだにムーミントロールは、はっと思いあたりました。かれは、おかねをもっていなかったのです。まゆ毛をぴくぴくうごかして、ほかのみんなにききましたが、かれらもおかねをもってないということが、顔つきでわかりました。さあ、どうしたものでしょう。

「ノートが四十ペニー、レモン水が三十四ペニー、あの星は三マ



と、スノークのおじょうさんがいいました。
そこで、ムーミントロールは、せなかにかくしていた鏡を、さしだしていいました。
「これは、きみのだよ。ぼくのすがたを、うつしてよ。」
ふたりが鏡でうつしあいっこしているさいちゅうに、ドアのベルがなって、スナフキンがはいってきました。
「このズボンは、やっぱり、ここでもっと古くしたほうがいいと思うよ。ぼくにあわないね。」
「それは、ざんねんだこと。でも、帽子はあたらしいのがいるでしょ。」
と、おばあさんはききました。
スナフキンは、みどり色の古帽子を、いっそうふかくかぶって、おびえたようにいいました。
「ありがとう。でも、いまも考えたんだけど、もちものをふやすというのは、ほんとにおそろしいことですね。」
スノークは、ずっとすわりこんだまま、あのノートになにか書いていましたが、そのときたちあがってこういいました。
「彗星がくるというのに、売店でぐずぐずしていてはだめだ。スニフ、レモン水をさっさとのんでしまえよ。」
スニフは、ぐいぐいとひと息にびんをあけました。

あさんははしごをのぼって、いちばん上のたなへいくと、クリスマスツリーのかざりをいれた箱をひっぱりだして、クリスマスツリーのてっぺんにかざる、大きくてきれいな星を、だいじそうにつまみあげていいました。
「ほらね。わたしゃ、ちゃんとメダルをもっていたわけだよ。」
「まあ、きれいだこと。」
スノークのおじょうさんは、ムーミントロールのほうをむいて、ささやきました。
「これ、つけてあげるわ。あのわるい植物から、わたしをたすけだしてくれたんですもの。」
ムーミントロールは、むねがいっぱいになって、口がきけません。ひざをついて、首へメダルをつるしてもらいました。メダルは、とてもうつくしくかがやきました。
「あなたが、じぶんのすがたがどんなにりっぱだか、ごらんになれたらねえ。」



顔がへんになるわねえ。」
おばあさんは、ムーミントロールに目くばせすると、たなの上からなにかをとって、すばやくかれの手ににぎらせました。ムーミントロールが見ると、それは、銀のふちがついているまるい鏡で、ルビーでできた赤いばらの花が、うらがわについていました。かれは、おばあさんの顔を見て、にっこりしました。
スノークのおじょうさんは、なんにも気がつかないで、ききました。
「おばあさん、メダルもおいてる?」
「なんだって。」
おばあさんは、ききかえしました。
「メダルよ。男の人が首へつけたがるような、きれいな星形のがいいんだけど。」
「ああ、そう、メダルだね。」
おばあさんは、上から下までたなをさがし、売り場の台の下や、店じゅうのすべての場所を見ました。
「一つもないの? おばあさん。」
スノークのおじょうさんは、目になみだをうかべて、たずねました。
おばあさんも、つらそうな顔をしていましたが、やがて、いいことを思いついたのです。おば

ながら、大きな声をだしました。
「女の子に、アクセサリーをあげるのは、ちっともばかなことじゃないよ。あんたは、まだ小さくてわからないけど、ほんとに、女の子にプレゼントするのなら、アクセサリーがいいんだよ。」
と、その小さなおばあさんはいいました。
「ふうん、そういうものなの。」
スニフは首をすくめて、レモン水の上にかがみこみました。
おばあさんは、たなをぜんぶ、上から下まで見ましたが、かんむりはどこにもありません。
「この台の下には？」
と、ムーミントロールはいってみました。おばあさんは、のぞきこみました。
「いや、ここにもない。わたしが、かんむりを一つもおいてないなんてねえ。スノーク用の手袋じゃだめかしら。」
「ぼく、よくわからないや。」
といって、ムーミントロールは、とてもかなしそうな顔をしましたっけ。そのとたんに、ドアのベルがなって、スノークのおじょうさんが、売店へはいってきていいました。
「こんばんは。おばあさんは、お庭にすごくいい鏡をもってるのね。わたし、じぶんの鏡をおとしてしまってから、水たまりにすがたをうつして見るだけなの。だけど、水たまりじゃ、すこし

おばあさんは、そう説明してから、
「あしたになれば、一日古くなるわけさ。」
とつけくわえて、めがねごしにじろじろとスナフキンの顔を見ました。
「そうだな。むこうのすみっこへいって、はいてみるよ。だけど、これがぼくにあうかなあ。」
こういってかれは、庭へでていきました。

スノークは、みどり色のあたらしいノートに、なにか書いていました。
「ところで、ちっちゃなトロールちゃんは、なにがほしいの。」
と、おばあさんがききました。
「かんむりだい。」



ムーミントロールが、むずかしい顔で答えたので、おばあさんは、びっくりしました。
「かんむり。あんた、それをどうするの。」
「この子はね、それをスノークのおじょうさんにやるのさ。あの女の子に会ってから、ほんとにばかになっちゃったんだ。」
スニフが、ゆかの上でストローをつかって赤いレモン水をのみ

「レモン水おくれよ。赤いのがいいな。」
と、スニフがいいました。
「横線か、ます目のついてるノートがありますか。」
と、スノークがききました。彗星と衝突するときにどうしたらいいか、すっかり書きとめておくつもりなのです。
おばあさんは答えました。
「あるとも。青いノートにしますか。」
「ほかの色のがいいな。青いノートは、スノークのちっぽけな子どもしか、つかわないのでね。」
「ぼくは、あたらしいズボンが、一ついるんだけど。あたらしすぎちゃ、だめなんだ。ぼくの形になじむズボンでないと、おちつけないんでね。」
と、スナフキンはいいました。
「ええ、それなら。」
といって、おばあさんははしごにのぼり、やねうらからズボンを一つ、ひっぱりおろしました。
スナフキンは、心配そうにききました。
「それは、すごくあたらしそうだね。もっと古いのはないの。」
「これが、ここにある中で、いちばん古いズボンなんだよ。」



が、わかりました。
ムーミントロールが、石段をのぼっていって、ドアをあけると、家の中で小さなベルがなりました。みんな、売店へはいっていきましたが、スノークのおじょうさんだけは、外にのこって、銀色の玉に、じぶんのすがたをうつして、見ていました。
売店には、きらきらしてねずみの目のように小さな目をした、しらがのおばあさんが、すわっていました。
「おやまあ、小さい子どもたちが、おおぜいきたよ。みんな、なにがほしいのかい。」

「だれでも、すっかり安心していられる谷なんだよ、あそこは。目をさますときはうれしいし、晩にねるのもたのしいのさ。木のぼりするのによい木があって、その上に家をつくれるんだ。きみには見せてあげるけど、だれも知らないひみつの場所だってあるんだよ。ママは、どの花だんのまわりにも貝がらをならべたんだ。ベランダには、いつも日があたっててさ。あそこは、よいにおいがするよ。

それから、ぼくたちは、じぶんの橋をもってるんだ。パパがこしらえたんだよ。手押し車をおしてとおれるほど、広い橋さ。ぼく、海も見つけたよ。ぼくたちの海……。」

「ムーミントロールは、じぶんのいったこともないよその土地が、どんなにすてきかってことばっかり、まえには話してたじゃないか。」

と、スニフがいうと、

「そうさ、まえにはね。」

と、ムーミントロールは答えました。

道がまた大きくカーブして、そこに売店がありました。それも、とてもいい売店なのです。まわりには、ありとあらゆる花が、きれいにならんでさいていて、家の前の台に、銀色の玉がついていました。そして、その玉に森がすっかりうつっていますし、家は白くて、やねの上に草がはえているのでした。かんばんがでていましたので、この店で雑貨やおかしや化粧品を買えること

にしなくちゃ。ねえ、にいさん！　地球がほろびるまでには、まだ二日あるのよ。」
「あの売店へいけば、たいてい、レモン水が買えるよ。」
と、スニフがいいました。
「そして、この道は、おそらく、ぼくらのいくほうへ、つづいてるよ。」
と、ムーミントロールがいいました。
「見るだけにすればいいさ。そばをとおりながら……。」
と、スナフキンもいいました。
　スノークは、ため息をついて、小さな道のほうへまがりました。くねくねとカーブしているたのしい道でした。ほうぼうで、まがり道や坂道になり、ふざけてもつれあっていることもありました。こんな道ならいくら歩いてもつかれません。まっすぐでたいくつな道を歩くより、足が速くすすむようです。
「まるで、ムーミン谷へかえったような気がするな。」
と、ムーミントロールがいいました。
「その谷のこと、すこしきかせて。」
と、スノークのおじょうさんがたのみました。
　そこで、ムーミントロールは話しました。

第6章



あくる日、みんなはムーミン谷をさして、森の中を一日じゅう、まっすぐに歩きました。スナフキンは、すこしでもみんなを元気づけようと、ハーモニカをふきました。夕がたの五時ごろ、大きなたてふだのたっている、小さな道にでました。

「この道」

「野外ダンス場」

「売店」

たてふだには、こう書いてありました。

「まあ、わたし、ダンスしたいわ。」

と、スノークのおじょうさんは、手をたたいてさけびました。

「地球がほろびるというのに、ダンスなんかしてるひまがあるかい。」

スノークはいいました。

「わたしたち、ダンスするのだったら、いまのうち

こようか。」

と、ムーミントロールがききました。

「いいの。でも、あの彗星になにかかぶせておいてね。そうでないと、わたし、スープをつくれないわ。」

こう、おじょうさんがいうので、ムーミントロールは、彗星のところに毛布をつるしました。すると、スノークのおじょうさんは、またおちついて、小さなシチューなべに、一にぎりの豆をいれ、ジュース＝スープをつくったのでした。それからおじょうさんは、乾パンをみんなにくばりました。スノークたちがもっているのは、それだけだったのです。

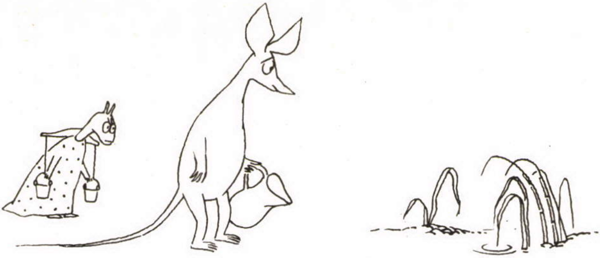
夕ごはんがすむと、みんなはスノークのおじょうさんがあんだ、草のマットレスの上でねむりました。

けれども、しずかにねむっている森の上には、彗星が光っていました。あつく、そしてきみわるく――。



スノークのおじょうさんの顔が、ゆっくりとみどり色にかわりました。
ムーミントロールが、すみれの花たばをもって、かけもどってきました。あつめられるだけ、あつめてきたのです。
スノークのおじょうさんは、花たばを見ていいました。
「わたしが、黄色だったらよかったのに、このとおり、みどり色になってしまったのよ。」
「ぼく、べつの花をとって

よ。」
「ちっとも、よかないさ。」
と、にいさんのスノークが、反対しました。
「水がなくなったのには、原因があるにちがいない……。」
　こういってスノークは、じぶんがあつめてきたたきぎのそばに、すわりこみました。たきぎは、ぜんぶおなじ長さでした。かれは、はかってあつめてきたのです。
「これにはなにか、原因が……。」
と、スノークは心配そうに、もういちどいいました。
「ぼくは、彗星のせいだと思うね。」
と、スナフキンがいいました。
　みんな、空を見あげました。日がくれかかって、夕空は赤黒く見えました。木のえだのあいだに、星ににた赤い火花のようなものが光っています。でも、それはふつうの星ではありません。ちかちかとまたたきもしませんし、きらきらとかがやきもしません。それは、もえていました。ちっともうごきません。しっぽが、まうしろについているのですからね。
「彗星は、あそこだ。」
と、スノークがいいました。



水をとりにでかけました。スナフキンは、パイプに火をつけました。そして、あおむけにねころんで、赤い空を見あげました。

「あのどうくつへはいるのは、わるくないね。きみは、彗星がこわいかい。」

と、かれはいいました。

「いいえ。あんなもの見たくないわ。だから、ほかのことを考えるようにしてるのよ。」

スノークのおじょうさんは、そういいました。

スニフには、スープの水が見つかりませんでした。沼をのぞきこんでみましたが、底にすこしどろがのこっているだけで、かわいそうに、すいれんはぜんぶ、かれてしまっていました。とうとうかれは、耳をたらして、すごすごとかえってきました。

「世界じゅうの水が、なくなっちゃったんだと思うね。さかなたちは、このことをどういってるだろうな。いまは、ジュースしかないよ。」

「だったら、ジュース＝スープをつくりましょう。それでいいわけ

「そうだった。ぼくたちのどうくつの中にいたら、たすかるにきまってるんだ。きみは、なんてかしこいんだろ。」
と、ムーミントロール。
「ぼくのどうくつの中だい。」
スニフが、大声でさけびました。
「入り口へ石をつんで、天じょうのあなも、ぜんぶふさぐんだ。そして、たべものをたくさんと、ランプをあそこへはこんでさ。すばらしいぞ。」
スノークが、口をはさみました。
「とにかく、また会議をひらかなくちゃ。仕事の分担なんか、考えよう。」
「そうよ。にいさんは、また会議をひらけるわ。だけど、いまはたきぎをすこしほしいの。それから、スープをつくるお水。それから、テーブルにかざる花も。」
「なに色の花？」
と、ムーミントロールがききました。
スノークのおじょうさんは、じぶんのからだを見ました。いまもやはり黄色でした。
「むらさき色のを。むらさき色の花が、わたしにいちばんよくにあうと思うの。」
ムーミントロールは、森へむかってかけだしました。スノークとスニフは、たきぎとスープの

「ママが、ちゃんとやるさ。ぼくたちのすてきなどうくつだって、見せてあげるよ。」
と、ムーミントロールがいいました。
「ぼくのどうくつだい。」
と、スニフが訂正しました。
「それにね。ぼくはどうくつの中に、真珠をもってるんだ。じぶんで海からとってきたんだぜ。」
と、ムーミントロールがつけくわえました。
　スノークのおじょうさんが、大声をあげました。
「真珠ですって。それでくるぶしかざりをつくれるかしら?」
「つくれるか、だって。鼻輪でも、イヤリングでも、おなかのバンドでも、かんむりでもつくれるさ。」
「それはまた、あとの問題だ。いったい、きみたちは、たすかりたいのか、たすかりたくないのか。」
　スノークは、やっきになって、えんぴつでガツンガツンと、地面をたたきました。
「にいさんは、またえんぴつのしんをおってしまったよ。わたしたち、そのどうくつの中にいたら、たすかるわ。夕ごはんをたべたい人はない?」
　こう、スノークのおじょうさんがいいました。

「あんたは、どこに住んでるの。」
と、そのとき、スノークのおじょうさんがききました。
「ぼくは、すごくきれいな谷で、パパとママとくらしてるのさ。ぼくらの家は、パパがじぶんでたてたんだよ。青い家でね。家を出発するちょっとまえに、ぼくは、庭へぶらんこをつくったよ。きみのために……。」
「あんなこと、いってらあ。いまはじめて、であったのに。」
と、スニフがちゃかしました。
「そんなことより、ぼくのどうくつの話をしろよ。いいかい、スノークのおじょうさん。ぼくは、上が『ね』で、下が『こ』というたからものを、もっているんだよ。それは、ものすごく、ぼくのことを思ってるんだ！」
「横道にそれないでくれたまえ。」
　スノークはこういって、もういちどえんぴつで、地面をコツコツたたきました。
「第一の問題は、彗星がくるまでに、われわれはそこへ到着できるか、ということ。第二は、そこへいけば、ほかのところよりも、たすかるみこみが大きいか、ということだね。」
「いままでは、うまくいったよ。」
と、スニフがいうと、

七日金曜日の午後八時四十二分に地球にぶつかることだ。四秒おくれるかもしれないが。」
「黒ありだって――。」
と、ムーミントロールが、うわのそらでいいました。かれは、スノークのおじょうさんの前髪を、じっと見ていました。ムーミンママには、前髪がありません。だから、前髪というものを、まだ見たことがなかったのです。
「どうして、ぼくのいうことは、いつも、だれもきかないんだろう。」
と、スノークは、さもこまったようにいいました。
「それは知らないけど、いつもこうなの？」
と、スニフがいいました。
　スナフキンが、注意しました。
「みんな、スノークくんのいうことを、ちゃんときこう。かれは、ぼくたちがたすかる方法はないか、みんなで考えようというんだぜ。」
　しかし、ムーミントロールはいいました。
「ぼくたちは、家へかえるんだ。みんないっしょにくるんだろ。」
「その問題は、つぎの会議でとりあげる。」
と、スノークは答えました。

れぐらいすてきになったかを見ようとしました。
「妹は、ずっとこの足輪のことをぐちってってさ。ぼくが彗星のことを話そうとするたびに、じぶんのくるぶしかざりのことばかりいうんだ。ところできみたちは、あの彗星に興味があるかい。」
と、スノークがいいました。
「うん、あるとも。」
と、ムーミントロールが答えました。
スノークは、ほっとしていいました。
「そりゃよかった。いますぐ、会議をひらくことにしよう、すわれよ。」
みんな、こしをおろしました。
スノークが、ことばをつづけました。
「ぼくが、議長と書記になる。反対があるかね。」
だれも、反対しませんでした。
スノークは、コツンコツンコツンと三回えんぴつで地面をノックしました。
「黒ありがきたの?」
かれの妹が、ばかなことをききました。
「こらっ、会議のじゃまをするな。ぼくたちは、なにを知っているか。そう、あの彗星が、八月

「まあ、あなたはほんとにつよいのねえ。」
スノークのおじょうさんがささやきました。
「なに、これぐらいのことは毎日やってるよ。」
ムーミントロールは、なにげなさそうにいいました。
「そんなこと、あるもんか。ぼく、一回も見たことは……。」
そこまでいったとき、スニフはひめいをあげました。スナフキンに、かかとをけとばされたからです。
「なにごと！」
スノークのおじょうさんは、大声をあげてとびあがりました。まだいくらか、気がたっていましたからね。
「びっくりしなくてもいいよ。ぼくがまもってあげるから。さあ、いいものをあげますよ。」
こういってムーミントロールは、金の足輪をさしだしたのでした。
「まあ。」
スノークのおじょうさんはあんまりよろこんだので、からだがすっかり黄色くなりました。
「わたし、これをさがしまわってたのよ。ほんとに、うれしいわ。」
かの女は、すぐにそれをつけると、からだをくねらせたり、頭をまわしたりして、じぶんがど

口をあびせかけました。

「すごいなあ！　あんなにたくさん、わる口をいえるなんて。」

と、スニフは感心してさけびました。

一騎打ちは、はげしくなるばかりです。アンゴスツーラは興奮でふるえ、ムーミントロールは、いかりと緊張で、顔をまっかにしていました。しまいには、手足と尾がぶるんぶるんふりまわされているのしか、見えなくなりました。

　スノークのおじょうさんが、大きな石をつかんで、アンゴスツーラになげつけました。ところが、なげかたがへたなため、ムーミントロールのおなかへ、ぶつけてしまったのです。

「あらっ、たいへん。わたし、あの人をころしてしまったわ。」

と、おじょうさんは、ひめいをあげました。

「女の子って、そんなものさ。」

と、スニフはいいました。

だけど、ムーミントロールはいっそう元気づいて、この有利な一騎打ちをつづけ、とうとう、アンゴスツーラを切り株だけにしてしまったのです（ごくみじかいうでは、そのままにしておきましたけれど）。それから、ナイフをおりたたんで、いいました。

「これでよしと。一巻のおわり。」



するとアンゴスツーラは、みどり色の目をぜんぶムーミントロールのほうへむけて、スノークのおじょうさんをはなしました。長い手が一本、へびのようにのびてきて、ムーミントロールの顔のまわりを、ふらふらまわりました。

「がんばれ！」

と、スナフキンがどなりました。

「しらみのさなぎめ。」

そうさけぶと同時に、ムーミントロールは目にもとまらぬ早わざで、アンゴスツーラの手を切りおとしました。

「ばんざあい。」

見まもっていた連中が、いっせいにさけびました。

ムーミントロールは、しっぽをいさましくふりたてて、ひらりひらりととびはねながら、ときどきアンゴスツーラに切りかかっては、つぎからつぎへと、にくまれ

「妹が、たいへんな植物に食われてるんだ。」
　そのとおりでした。
　虫をたべるおそろしいアンゴスツーラの一種が、スノークのおじょうさんのしっぽをつかまえて、いきてうごく手で、ゆっくりとたぐりよせているところでした。いうまでもなく、かの女はおそろしさのあまり、むらさき色にかわって、死にものぐるいでわめいていました。――スノークの女の子にも、こんな声がだせるのかと思われるくらいに。
「すぐいくよ、すぐいくよ！」
と、ムーミントロールはさけびました。
「これをもっていけよ、きっとやくだつから。そしてな、あいつをおこらせるんだ。アンゴスツーラは、じきにかっとなるから。」
　こういってスナフキンが、ナイフをわたしました。せんぬきとねじまわしのついたナイフでした。
「やい、この炊事ブラシめ。」
　ムーミントロールがどなりましたが、アンゴスツーラは、平気の平左でした。
「ひょっとこやろう、おいぼれねずみ。おまえは、死んだぶたのひるねのゆめみたいなやつだな。」

スニフは、命づなにおなかをしめつけられて、文句たらたらでしたが、しまいには、わめきながら地面をひきずられていきました。けれども、ほかのふたりは、走るのをやめません。ところが、一本の木の両がわを、ふたりがべつべつに走っていったため、つなが木にからまりました。ふたりははちあわせをして、やっととまったのでした。

「ちくしょう、こんなつなは、早くはずせよ。」

と、ムーミントロールはおこりました。

「きみ、わるいことばをつかったな。」

と、スニフがいいました。

「それがどうした。ひめいをあげてるのは、スノークのおじょうさんなんだぞ。ぼくはちゃんと知ってるんだ。」

と、ムーミントロールはどなりかえしました。

「まあまあ、ふたりともおちつけよ。」

スナフキンはナイフをだして、つなを切りました。

ムーミントロールは、足がみじかいのに、せいいっぱいの速さで、かけだしました。しばらく走ると、おそろしさでまっさおになっているスノークとであいました。スノークは、大声をあげました。

ぐなんてことは、考えることさえもできません。
「きっと、湖の底にあながあいちゃったんだね。それで、水がぜんぶ流れおちちゃったんだよ。」
と、スニフがいいました。
「ヘムルの谷川も、水がへってたね。」
と、ムーミントロール。
スニフが、ジュースのびんをしらべて、やかましくさわぎました。
「ジュースも、へっちゃってるぞ。」
「ばか。じぶんでのんだんじゃないか。ばかなやつだな。」
と、ムーミントロールがいいました。
「ばかなのは、きみのほうじゃないか。」
スニフがそうどなったのは、つかれて心ぼそく、はらぺこだからでした。
そのとたんに、だれかのひめいがきこえたのです。だれかが、森の中でさけんでいました。たいへんするどく、かん高いひめいです。そのため三人とも、首すじの毛を、ぴんとたてたほどでした。ムーミントロールは、鉄砲玉のように走りだしました。
「まってくれ。ぼく、ついていけないよ。ああ、うう。」

までにまにあわないぜ。」
ムーミントロールは、じしゃくを見ました。
「これは、へんだぞ。針がくるくるまわってばかりいる。きみ、じしゃくは彗星をこわがると思う？」
「そういうこともあるかもしれないぞ。ぼくたちは、本能にしたがって歩くのがいいんだ。ぼくは、じしゃくなんか信用したことがないね。じしゃくは、方角にたいする人間の自然な感覚を、くるわせるだけさ。」
こう、スナフキンは答えました。
すると、スニフが、きっぱりといったのです。
「ぼくは、いまのいま、たべものにたいする自然な感覚をもってるよ。どうして、こんなに長いあいだ、なにもたべないの。」
「そりゃ、たべものがなくなったからさ。ジュースでものんで、たのしいことを考えながら、がまんするんだな。」
と、スナフキンはいいました。
そのうちに、小さな湖にさしかかりました。水がへって、あさい池になってしまっていて、いやなにおいがします。岸べには、水草が青いねばねばしたすがたを、さらしていました。およ

ヘムルは、おどろいてくりかえしました。
「空の色？」
「ええ、あの赤い色です。」
と、ムーミントロールがいいました。
「ふうん、空などは、なりたかったらしまもようになっていても、かまいはせん。わしはめったに見ぬからな。わしが心配してるのは、このきれいな谷川が、ひあがっていくことじゃ。空などがつづけば、足に水をかけられなくなってしまうからな。」

こんなことがつづけば、足に水をかけられなくなってしまうからな。」
「けれど、それは危険な大彗星が――。」
と、ムーミントロールがいいはじめると、ヘムルはいきなりたちあがって、もちものをぜんぶあつめ、ジャブジャブとむこう岸へわたっていったのでした。
「さあ、いこう。あの人は、ひとりでいたがっているんだから。」
と、スナフキンがいいました。
歩くのに気持ちのよい土地になっていました。ふんわりと、こけがいちめんにはえていて、そこここに花もさいています。森のちかくへきていました。とてもあたたかでした。
スナフキンがききました。
「きみたちは、どっちのほうに住んでるんだい。もうまっすぐに歩いていかないと、彗星がくる

「もちろん、山くずれじゃ。家ほども大きい石がごろごろとんできて、わしのいちばんよいガラスびんがつぶされてな。わしも、もうすこしでつぶれるところさ。まあ、このたんこぶを見てくれ。ひどいものじゃ。」

それをきいて、スナフキンがいいました。

「ひょっとしたら、ぼくたちが、とおりがかりにころがしおとした石かもしれませんよ。とても大きなまるい石があると、そのままにしておくのが、もったいなくて……。」

「おまえたちが、あの山くずれをおこしたというのか。」

と、ヘムルは、ゆっくりとたずねました。

「それを、わしは考えるべきじゃった。とうぜんな。おまえたちのことは、あまり考えたこともなかったが、これからも、顔なじみになりたいとは思わんな。」

かれは、くるりとうしろむきになって、つかれた足の上へ、ザブザブと水をかけていましたが、しばらくすると、またいいました。

「おまえたちは、まだここにいるのか。」

「すぐにいきますよ。」

スナフキンはこういってから、たずねました。

「おききしたいのですが、あなたは、空の色がへんなのに、気づいておられますか。」



そばには、「北半球のこん虫、その習性と非習性」というぶあつい本がおいてありました。

「なんとも、ふしぎだ。しっぽのあるものなど、一ぴきもおらん。それなら、ディデロフォルミア＝フナトポゲテスだろうが、あれはありふれた虫だし、しっぽもないしなあ。」

そういって、かれはまた、ため息をつきました。

そのとき、

「やあ。」

といって、岩かどのうしろから、ムーミントロールが顔をだしました。

「こらっ、びっくりさせるない。おまえたちは、またきたのか。わしは、山くずれかと思ったぞ。けさは、まったくおそろしかった。」

「なにが。」

と、スニフがききました。

こう、スニフはいいました。

みんなはこしをおろして、ひとやすみしました。そのときだしぬけに、ムーミントロールがいったのです。

「ぼくたち、ばかなことしたぞ。」

「そうさ。きみたちはばかだよ。」

と、スニフはいいました。

ムーミントロールはつづけました。

「大失敗だ。あれは人ごろしだ。あの石が、スノークのおじょうさんの頭にあたったら。」

「そしたら、おじょうさんはぺしゃんこさ。」

と、スニフ。

ムーミントロールは、がばっとはねおきて、大声をあげました。

「ぼくたち、いかなくちゃ。いま、すぐに。」

こうして、にぶい太陽をうかべた赤みがかった空の下を、かれらはくだっていったのでした。

ふもとの岩のあいだを、谷川が流れていました。たいへんあさい川で、底には小石が、いくつもきらきら光り、あのへムルが、つかれた足を水につけて、ひとりでため息をついていました。

スナフキンがどなりつけました。
下ではムーミントロールがわめいていました。
「たすけてくれえ！　ひっぱりあげてくれえ。」
スニフは顔をもたげてみて、いっそう青くなりました。でもこんどは、こわさで青くなったのです。四つんばいで、にげようとしました。手足も、しっぽもつかって、ふんばりました。あっちへこっちへともがきまわったひょうしに、つなが岩のあいだにはさまって、そのためにずるずるすべるのがとまりました。
スナフキンがいいました。
「さあ、つぎはひっぱるんだぞ。ぼくが、『それ！』といったら、思いきりひっぱれよ。まだだぞ。まだまだ。さあ、それひけ！」
ふたりは全身の力をこめて、すこしずつひっぱりました。とうとう、がけのふちから、ムーミントロールが見えてきました。さいしょに耳が、それから目が、つぎに顔が、つづいてもっと大きく顔が見えてきて、さいごにムーミントロールの全身があらわれたのです。
「ああ、よかった！　ママも、ここにいたらよかったのに。」
と、ムーミントロールがいいました。
「やあ、おかえり。きみが下におちるのをとめたのは、ぼくなんだよ。」




もし、命づなをからだにまきつけていなかったら、この世の中から、ムーミントロールが一ぴき、すくなくなってしまったことでしょうね。スナフキンは、すぐさまあおむけにたおれて、ショックにたえる用意をしました。ものすごいショックがきました。スナフキンは、からだが二つにおれたほどに感じました。

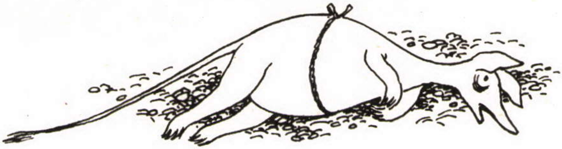
下の谷間には、ムーミントロールが、ぶらりぶらりとゆれていて、どうしようもなくもがいていました。かれは、わりに重いトロールだったのです。スナフキンのからだは、がけっぷちまで、ずるずるとひきよせられました。スニフのからだとつないであるつなが、ぴんとはって、スニフもずるずるとひきずられだしたではありませんか。

スニフは、なき声をあげました。

「やめてくれ、うるさくするな、ぼくはからだのぐあいが……。」

「谷底へおちてみろ。もっともっとひどいんだぞ。しっかりひっぱれ。」

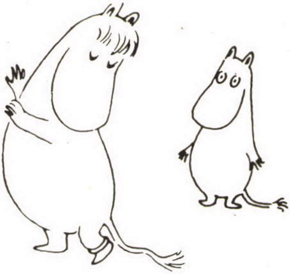
と、ムーミントロール。
スナフキンは、がけのふちにちかい、大きな石のかたまりをえらびました。
「さあ、見ておいで。一、二、三。」
石は、ゴロゴロところがりだして、がけっぷちから見えなくなりました。ふたりは、かけつけて、下をのぞきこみました。大石は、かみなりのようにあばれまくって、いくつも小石をはねとばしておちていき、だいぶ時間がたってから、ゴロゴロというこだまが、谷間によせたりかえしたりしました。
「山くずれになったね。」
スナフキンは、上(じょう)きげんでした。
「ぼくにもさせてよ！」
ムーミントロールはさけんで、がけっぷちにどうにかのっかっていた、もっと大きな石のかたまりのそばへ、かけよりました。
「気をつけろ。」
と、スナフキンはどなりました。
けれども、おそすぎました。大石がころがりだしたと思うと、つぎにはムーミントロールもあっというまにころげおちたのでした。



と、スナフキンがたずねました。
　スニフは、まっさおな顔をして、
「ううん。ぼく、めまいがする。」
といって、ばったりと地面にたおれてしまい、それいじょうは歩こうとしませんでした。
　ムーミントロールがいいました。
「おい、おい。ぼくたちは、いそがしいんだぜ。早くさがしにいかないと、あの……。」
「わかってるよ、わかってるよ。」
と、スニフは、そのことばをさえぎりました。
「あのばかなスノークのおじょうさんを、だろう。でも、ぼくにさわっちゃだめだ。げろをはくぞ。」
「スニフは、やすませておいてやれよ。石をころがして、まってることにしようや。きみは、石をころがしたことがあるかい。」
と、スナフキンがききました。
「いや、ないね。」

「本気かい。谷底へすてるの。」
スナフキンがうなずきました。
スニフは、がけっぷちまで歩いていって、ぶつぶついいました。
「このテントの中で、くらすことだってできるのになあ。ぼくがもらって、死ぬまでじぶんのテントにしてもいい……ああ、ムーミントロール、ぼくどうしたらいいのか、わからなくなっちゃったよ。」
「きみは、どうくつをもってるじゃないか。」
と、ムーミントロールは、やさしくいいました。
そこで小さな動物のスニフは、にっこりして、荷物をぜんぶなげとばしました。いきおいよく、岩のあいだをころげおちて、小さいパンケーキ焼きの道具は、カランカランとにぎやかな音をたてました。
「こりゃ、すごい。」
ムーミントロールはそうさけぶと、シチューなべをいくつも、つづけておとしました。なべは、いっそうすてきな音をたてました。いちばんしまいのシチューなべが、谷底へおちてしずかになるまでには、たっぷりたのしむことができました。
「さあ、気分がよくなったかい。」

第5章



八月四日。もう空はくもっていませんでしたが、太陽はぶきみなかさを、かぶっていました。「おさびし山」から日がのぼって、赤い空の中へすべりこんでいくとき、太陽はいくらか黒ずんで見えました。暑くなってきました。

みんなは、夜じゅうも、歩きに歩いたのです。スニフが、ぐずぐずいいだしました。

「くたびれたよう。つかれちゃったよう。もう、このテントをかつぐのを、かわってよ。小さなパンケーキ焼きの道具も。」

スナフキンはいいました。

「それはいいテントだが、人間は、ものに執着せぬようにしなきゃな。すててしまえよ。小さなパンケーキ焼きの道具も。ぼくたちには、用のなくなった道具だもの。」

スニフは、びっくりしてききました。

スナフキンがどなりました。

「おちつけよ。そんなに走ったら、谷底へついらくしてしまうぞ。彗星がくるまでに、まだ四日あるじゃないか。」

「彗星なんか、家へかえれば、パパとママがちゃんとしてくれるよ……。だけど、スノークたちをさがさなくちゃ。スノークのおじょうさんは、ぼくが足輪を見つけたこと、知らないんだもの。」

ムーミントロールは、そんな大声をあげて、夕ぐれの中にすがたをけしました。ほかのふたりも命づなにひっぱられていきました。

空をそめているいやな赤い色は、いちだんとこくなっていました。雲がふきはらわれて、この世のものとも思えない夕がたの光の中に、山々のすがたが、むきだしになっていました。はるかかなたに、川の流れがほそいおびのようにかすみ、黒い森が点々とちらばっています。

（そうだな。こいつたちは、家へかえったほうがいいだろう。そして、スノークのおじょうさんも、足輪のあるほうが、ないよりはましだろう。彗星がこようと、くるまいとな。）

スナフキンは、そんなことを考えたのでした。

「それじゃ、ぼくたち、すぐかえらなくちゃ。さよなら。」

小さな動物のスニフは、大とくいで、鼻を高くして、もどってきて、

「黒かった。まっ黒だった。」

とどなりました。

「なにが……。」

と、ムーミントロールがきくと、スニフは説明しました。

「もちろん、宇宙がだよ。そしてさ、彗星は赤くて、しっぽがうしろについてるんだ。八月七日の午後八時四十二分に、地球と衝突するはずだ。四秒おくれるかもしれん。ぼくが学者といっしょに、計算したんだぞ。」

「それじゃ、早く家へかえらなくちゃ。日曜日のごちそうは、なんだったっけ。」

と、ムーミントロールがいいました。

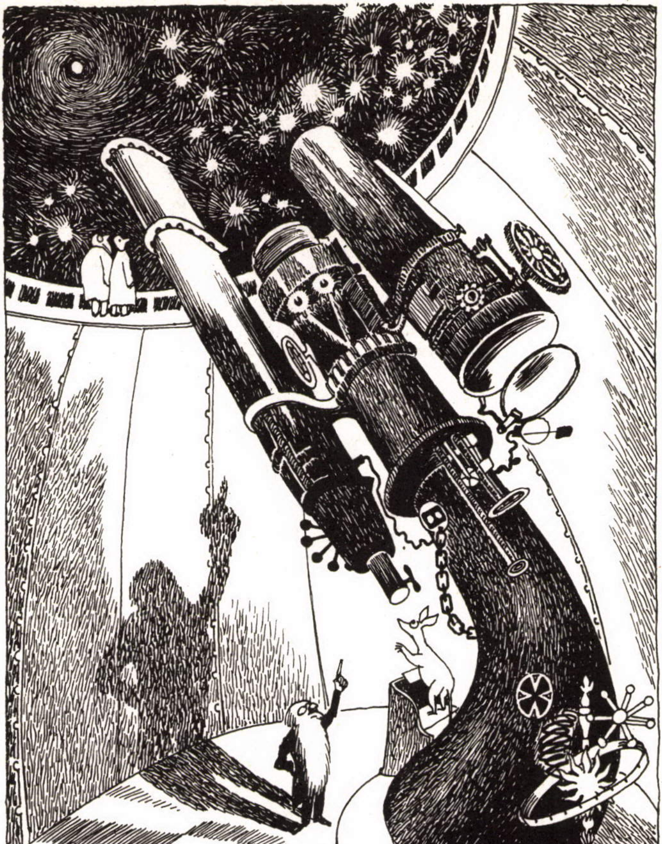
スニフは、興味なさそうに、こういってのけました。

「マカロニ＝グラタンじゃなくて、衝突グラタンさ。子どもだましだなあ。とにかく、天体望遠鏡で観測してきたものにとっちゃ。」

「だけど、とにかく早くかえらなくちゃ。」

ムーミントロールは、さっとドアをあけて、外へとびだしたのでした。

「だけど、じっとしてますね。おまけに、しっぽも見えないけど。」
スニフがいいました。
「あの彗星の尾は、うしろについているのだ。それに、まっすぐにこっちへむかってくるから、うごかないように見えるんだ。うつくしいじゃないか。」
と、学者は説明しました。
「ええ、赤いものはきれいですね。それで、いつ、ここまでくるんですか。」
スニフは、おそろしさにこちこちになって、望遠鏡の中の火の玉を見つめました。
「わしの計算したところでは、八月七日の午後八時四十二分に、地球に衝突する。四秒おくれるかもしれんが。」
「そしたら、どうなります。」
「どうなる？　そんなことは、考えたことがないね。しかし、その経過はくわしく記録しておくよ。」
スニフは、ふるえる足をふみしめて、階段をおりはじめましたが、とちゅうできゅうに足をとめて、ききました。
「きょうは、何日でしたっけ。」
「八月三日だ。時刻は、ちょうど七時五十三分。」


Tove

「こんどの彗星は、いつものよりもずっとうつくしいんで、わしはじぶんの名まえをつけようと思ってるんだ。ちょっと、見にきたまえ。」

スニフは、あとにつづいて、いくつも階段をのぼりました。小さな動物の中で、この世界最大の天体望遠鏡をのぞかせてもらえるのは、かれがはじめてでした。

「どうだ、あの彗星は、うつくしくないかね。」

と、学者がいいました。

「宇宙は、黒いんだなあ。ほんとに、まっ黒だ。」

と、スニフはつぶやきました。こわくて、身の毛がよだちました。その黒い宇宙の中に、大きな星がいくつも、まるでいきているように、息をしていました。

じゃこうねずみがいったように、どれもこれも大きくて、しかも、その星たちのまん中に、おそろしい目のような赤いものが、光っているのです。

「あれが、彗星なんですね。あの赤いのが、彗星で、こっちへすすんでくるんですね。」

と、スニフがいいました。

「もちろん、くるとも。あれが、なによりも興味のあるものなのだ。毎日、だんだんよく見えるようになってくる。日がたつにつれて、いっそう大きく赤くうつくしくなるんだ！」

と、学者はいいました。

「なんにも、礼(れい)をいうことはあるまい。」
そういって学者(がくしゃ)は、さっさと望遠鏡(ぼうえんきょう)のところへいってしまいました。
「ねえ、あの先生は、どういったの。彗星(すいせい)は、くるのかい。」
と、スニフが小声でききました。
「いつ、ぶつかるんだ？」
と、スナフキンがききました。
　ムーミントロールはいいました。
「それをきくのを、わすれちゃったよ。だけどね、スノークのおじょうさんが、ここへきたんだって。あの人は、谷底(たにそこ)へおちてなんかいないんだぞ。」
「きみは、ばかだよ。こんどは、ぼくがききにいってくる。ちゃんときいてくるから、まあ見ててくれ。」
　こういって小さなスニフは、ほかの学者(がくしゃ)のところへいって、きいてみました。
「ここには、りっぱな人たちがいて、彗星(すいせい)をいくつも発見(はっけん)したんですが——。」
「ふうん、そうか。」
学者(がくしゃ)は、うれしそうにいいました。

と、その人がいいました。
　ムーミントロールは、おずおずといいわけをしました。
「すみません。でも、ぼく、はじめてきたんです。」
「それじゃ、あいつは、きみによくにた別人だったんだな。このごろは、うるさくてかなわん。うろちょろして、子どもじみた質問をするやつらの相手になってる時間なんか、わしらにはないんだ。足輪だとかなんだとかいいおって。この彗星は、わしの生涯におこったことの中で、もっとも興味のあるものなんだからなあ……。ところで、きみは、なんの用かね。」
「たいしたことじゃないんですが、その女の子……ぼくのまえにここへきた女の子のことなんですけど、その子には、前髪があったかどうか、知りたいんです。耳のうしろに、花をかざっていたでしょうか。」
　学者は、両手を空のほうへのばして、ため息をつきました。
「わしは前髪や花には、興味がない。足輪にもだ。彗星がやってくるというときに、女の子が足輪をなくしたからって、そんなことにちょっとでも意味があると、きみはほんとに思ってるのか。」
「意味があることだって、あるでしょう。」
と、ムーミントロールは、本気でいいました。
「どうも、ありがとうございました。」



おりたりして、ねじをしめたり、機械を調節して距離をはかっては、ノートに書きこんだりしていました。みんな、とてもいそがしそうで、どの人もたばこをすっています。

「こんにちは。」

　ムーミントロールは、声をかけましたが、かれに気がついた人は、ひとりもありません。そこで、おそるおそる中へはいっていって、いちばんちかくにいた学者の上着を、ひっぱってみました。

「きみは、またここへきたのか。」

スナフキンも、あやふやでした。
「うん、そうにきまってる。太陽がしずむからさ。」
と、ムーミントロールがいいました。
だけど、それが日がしずむからではないのは、みんな知っていたのです。
夕空を赤くそめているのは、あの彗星なのです。彗星が、地球へむかって、地球に住んでいるいきものぜんぶにむかって、おそいかかってくるからなのでした。

ぎざぎざした峰のてっぺんに天文台があって、そこでは学者たちがすぐれた観測を何千もおこなっては、たばこを何千本もけむりにし、星だけを相手にしてくらしていました。天文台の塔には、ガラスのまるやねがついていて、七色のガラス玉がかざられていました。ガラス玉は、たえずゆっくりまわっていました。
先頭にたって歩いていたムーミントロールは、戸をあけて入り口でたちどまりました。塔ぜんたいが、大きな一つのへやになっていて、世界最大の天体望遠鏡が、たえず星をにらんでいるのです。望遠鏡は、宇宙の危険なものを追って、ゆっくりうごきながら、ねこがのどをならすような音をたてていました。
小さな学者が、いそがしくうごきまわりながら、ぴかぴかしたしんちゅうの階段をあがったり



ばのぼるほどつかれてきて、さむくなるばかりでした。三人は、しまいにはこしをおろして足をやすめ、ものもいわずに、あたりをつつんでいるねずみ色のベールを見つめました。
そのとき、雲がやぶれて、ふいに、雲の海が目の下にひろがりました。
こんな上から見ると、雲はいかにもやわらかそうでうつくしく、ジャブジャブと中へはいっていって、もぐったりおどったりしたくなるほどでした。
「ぼくたち、もう雲の上にいるんだなあ。」
と、スナフキンが、あらたまっていいました。
それからみんなは、ひさしぶりに見る空を見あげました。
「どうしたんだろ。」
スニフが、びっくりしたようにつぶやきました。
空は、青くなかったのです。うすく赤みがかっていて、いかにもふしぜんに見えました。
「たぶん、日がしずむからだろうよ。」

りだすと、手をのばしながらさけびました。
「つなをもっててね。」
スナフキンとスニフは、ありったけの力でつなをつかみ、ムーミントロールは、がけっぷちから、いっそうからだをのりだしました。それから、やっとうで輪をつかんで、もどりました。
「こりゃ、金でできてるぞ。スノークのおじょうさんは、左の足に金の輪をはめてると、いわなかった？」
ムーミントロールがききました。
スナフキンは、かなしそうに答えました。
「うん。あのきれいなおじょうさんは、あぶない場所へ、いつも花をつみにいくらしいよ。」
「その女の子は、きっともう、ジャムみたいにつぶれちゃってるよ。」
と、スニフがいいました。
かれらは、しょんぼりと歩きつづけました。高くのぼれ



ん、あたりいちめんが、つめたいきりにおおわれてしまいました。あるのは、もやもやしたねずみ色の空間だけで、ほかにはなにも見えません。道はずるずるすべって、歩くのが危険でした。三人ともさむくてたまらず、ムーミントロールは、ウールのズボンのことを思って、かなしくなりました。あのズボンも、地球の中心へむかって、おちていってしまったのです。

「雲って、ひつじの毛のようにやわらかくて、中をとおったら気持ちがいいだろうと、思ってたんだけどなあ。こんなばからしい旅に、ぼくはうんざりしちゃった。」

スニフがそういって、大きなくしゃみをしました。

そのときムーミントロールが、ぴたりと足をとめていいました。

「あれは、なんだろ。あそこに光っているのは……。」

「ダイヤモンドかい。」

と、スニフは、いっぺんに元気になって、ききました。

「どうも、小さなうで輪らしいぞ。」

というと、ムーミントロールは、きりの中をまっすぐにすすみました。

スナフキンがどなりました。

「気をつけろ！　あれはたしかにがけっぷちだぞ！」

ムーミントロールは、ゆっくりゆっくりとすすみました。はらばいになって、がけっぷちにの

あがると、山のおくめがけて、とんでいきました。
「あいつ、失敗したのがはずかしいんだ。わしは、とってもほこり高い鳥だからね。一回失敗したら、二度とはやらないのさ。」
と、スナフキンが説明しました。
　スニフは感激して、大声をあげました。
「子どものいるわし、すごいなあ。それから、大とかげ。地球の底までおちる滝！　ぼくみたいに小さな動物には、すごい冒険のありすぎる旅だ。」
「まだ、いちばん大きな冒険がのこってるぞ。彗星さ。」
と、ムーミントロールがいいました。
　三人とも、あつい雲を見あげました。
「いちど、青空を見たいものだね。」
　スナフキンは、わしがのこしていった羽を一本ひろって、それを帽子にさしこんでからいいました。
「さあ、いこうぜ。」
　夕がたちかくには、雲の中へはいるほど高いところまでのぼっていました。そのときとつぜ



「あいつ、いまなにを考えてるのかな。」
と、スニフがたずねました。
「おこってるみたいだぞ、ぼくたちのことを……。」
ムーミントロールがこういいかけたとき、スナフキンがさけびました。
「きたっ！」
みんなは、岩かげにへばりつきました。すごい羽音をたてて、わしがむかってきます。みんな、山の小さなわれめに、ぴったりとからだをおしつけ、おたがいにしっかりだきあって、息をころしていました。わしがおそってきました。まるで、あらしみたいです。ものすごいつばさが、岩にぶつかり、三人の目の前が、くらくなりました。その、こわかったこと。
そしてとつぜん、またしずかになったのです。三人はふるえながら顔をだしました。ずっと下の谷間で、わしは半円をえがいて舞っています。それから、すばやく上へ舞い

しぶい顔をしました。
三人は、くねくねしたほそい山道をのぼっていきました。安全のために、めいめいのからだに命づなをまきつけて。
いちばんうしろを歩いていたスニフが、いいました。
「こんどもまた、きみたちの責任だよ。わすれちゃだめだぜ。ぼくの耳の病気のことをね。」
道は、ずんずんけわしくなり、みんなは、だんだん高いところへのぼっていきました。まわりにあるものは、すごく古びて大きい、おそろしくさびしいものばかりでした。
さむざむとした絶壁のあいだを、一わのわしがつばさをひろげて、舞っていました。いきているもので目にはいるのは、このわしだけでした。
「ものすごく、でっかい鳥だなあ。こんな高いところに、ひとりぼっちでいるなんて、とってもさびしいだろうなあ。」
と、スニフがいいました。
「どこかに、およめさんがいるさ。子どももうんといるかもしれんぞ。」
と、スナフキンはいいました。
わしは、ゆうゆうと舞っていて、つめたい目とまがったくちばしのついた頭を、あちこちにむけていました。ところが、三人のま上までくると、つばさをふるわしてとまってしまったのです。


TOVE

第4章



「いやになっちゃうな。テントの中は、なんてさむいんだ。」

あくる朝、ムーミントロールは、目をさますなりいいました。

お茶をわかしていたスナフキンはいいました。

「きょうは、いちばん高い峰へのぼるぞ。」

「どうして、そこが天文台のある峰だってこと、わかるの。」

スニフはこういって、頂上を見ようと、首をのばしました。でも、ねずみ色のあつい雲にかくされていて、見えませんでした。

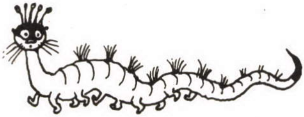
「これを見ろよ。たばこのすいがらだらけじゃないか。みんな、学者たちがなげすてたのさ。」

と、スナフキンが答えました。

「あっ、そうか。」

スニフは、じぶんがそれを見つけなかったので、

は花をかざっているし、左の足には金の輪をはめてるよ。」
「そんなの、お話じゃないよ。ちっともスリルがないもの。」
と、スニフが大声をあげました。
「からだの色をかえるスノークと、うまれてはじめて会ったのに、きみはそれをスリルだと思わないのか。」
こういってから、スナフキンはまたハーモニカをふきはじめました。
「女の子は、みんなばかだよ。きみだって。」
と、ムーミントロールはいいました。そして、ねぶくろの中にもぐりこみ、顔をテントの布のほうへむけて目をつぶりました。
けれども、その晩かれは、じぶんににたスノークの女の子に、耳のうしろへかざる花をプレゼントしているゆめを見たのでした。



に、興奮すると、色がかわるけどね。」
　ムーミントロールは、おこった目つきでいいました。
「そんなやつと、親類なもんか。色がかわるようなやつとなんか、親類じゃないよ。ムーミントロールは、一種類しかないし、色は白いんだ。」
　でも、スナフキンは平気な顔です。
「とにかくね、このスノークたちは、きみとよくにてるんだよ。形のことだがね。スノークは、計画をたてたり、原因をしらべたりするのがすきで、うるさいくらいのときもあるよ。かれの妹は、きいてることはきいてるがね、なにかほかのことを考えてるんだと、ぼくは思うよ。まあ、じぶんのことでも考えてるんだろう。あの子は、やわらかできれいなうぶ毛に、すっかりおおわれていて、前髪まであるのさ。いつでも、そいつにブラシをあててるよ。」
「ばかなやつだなあ。」
と、ムーミントロールはいいました。
「さあ、それでどうなったの。」
と、スニフがたずねました。
「ああ。べつになにもおこらなかったさ。スノークの妹は、だれかがおなかをわるくすると、小さなはらまきを草であんで、心のこもったスープをつくってやるんだ。それから、耳のうしろに

のあれはてた場所では、スナフキンのハーモニカも、とてもさびしそうにひびきました。遠くでハイエナが顔をあげて、耳をたてました。このハイエナは、音楽などをきいたことがなかったのです。それで、長くひっぱった、おそろしいなき声をあげました。

「なんだろ。」

スニフは、あかりのそばへよりました。

「おそろしいものじゃないさ。さあ、仮装舞踏会にいった花ばちの歌をやるぜ。」

と、スナフキンはいって、またハーモニカをふきました。

「いい曲だね。だけど、花ばちがどうなったのか、仮装舞踏会はたのしかったのか、よくわからないよ。かわりに、なにかお話してよ。」

と、ムーミントロールはいいました。

スナフキンは、ちょっと考えてからいいました。

「ぼくがすこしまえに会ったスノークたちのことは、話したっけ？」

「話さないよ。スノークって、なあに。」

スナフキンは、びっくりしていいました。

「きみ、ほんとにスノークのこと、知らないのか。あいつたちは、きみの親類にちがいないぜ。よくにてるもの。もっとも、きみは色が白いし、あいつたちは、いろんな色をしていて、おまけ



　その日の夕がたおそくでした。おさびし山は、おごそかにそびえて、ふかいねむりにおちていました。峰々は、谷間の上でにらみあい、谷には、こおりつくようにつめたいきりが、たちこめていました。重々しい山から、ときどき、小さな雲のかたまりが流れだして、ゆっくり山腹をすべっていきました。わしやたかが、この山腹に巣をつくっているのでした。

　一つの峰の下に、小さな小さなものが光っていました。もっとちかづいてみると、それは黄色いテントで、そのテントが光っているのだと、わかったことでしょう。こ

あみをとりあげると、おさびし山の中へ、のしのしとわけいったのでした。
「あいつ、彗星のことを、かぶとむしかなにかだと思いこんでるんだ。ばかなやつ！　まったくさ。ああ、ぼく、コーヒーがのみたいな。」
と、スニフが、むちゅうでさけびました。
「コーヒーポットは、いかだの上へおいてきてしまったよ。」
と、スナフキンがいいました。ムーミントロールはコーヒーが大すきなので、われめのところへかけよって、下をのぞきこみました。
「いかだが、なくなっちゃったぞ。コーヒーポットは、地の底へおちてしまったんだ。コーヒーなしで、どうしたらいいんだ。」
「小さなパンケーキをたべるさ。」
と、スナフキンはいいました。
　そこで、三人は火をおこして小さなパンケーキをつくり、やけるそばからたべていきました。そうするのが、これの正しいたべかたなのですよ。
　すっかりたべてしまうと、いちばん高い峰をえらんで、頂上めざしてゆっくりのぼりはじめました。天文台をつくるのなら、だれでも、できるだけ星のちかくにするでしょうからね。



「ほう。そんなら、ぜひつかまえにゃならん。どんな形をしておるのかね。」

「赤くて、長いしっぽがついてるよ。」

と、ムーミントロールがいいました。

ヘムルは手帳をだしてノートしながら、ぶつぶついっていました。

「そいつは、フィリクナルクス＝スヌフシガロニカの一種にちがいないぞ。学のある人たち、もう一つおたずねしたいが、そのめずらしいこん虫は、どうやっていきておるんかな。」

「ヘムルにたかってさ。」

スニフはそういって、くすくすわらいました。

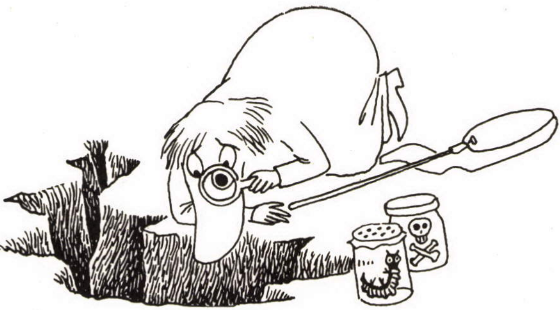
ヘムルは、顔をまっかにしました。

「学問にじょうだんをまぜるものではない。わしは、いくぞ。わしがなにものなのか、知っとるのか。」

それからかれは、びんをぜんぶあつめ、こん虫採集の

と、ヘムルは答えました。
「うん、ここが『おさびし山』さ。」
と、スナフキンがいいました。
あたりいちめんに、ものすごく大きい、ねずみ色のさびしい山々がそびえていました。しいんとしずまりかえっていて、さむいほどでした。
「ぼくたちの天文台は、どこなの。」
スニフが、またききました。
ヘムルが、いらいらしはじめました。
「それも、わしは知らん。しかし、いったい、おまえさんらは、蛾のことで、なにを知っとるのか。それを知りたいわい。」
「ぼくたち、彗星をさがしてるだけなんです。」
と、スニフがいいました。
「それは、めずらしいものかね。」
と、ヘムルは、からだをのりだしました。
「まあそうですね。百年に一つぐらいですから。」
と、スナフキンが答えました。

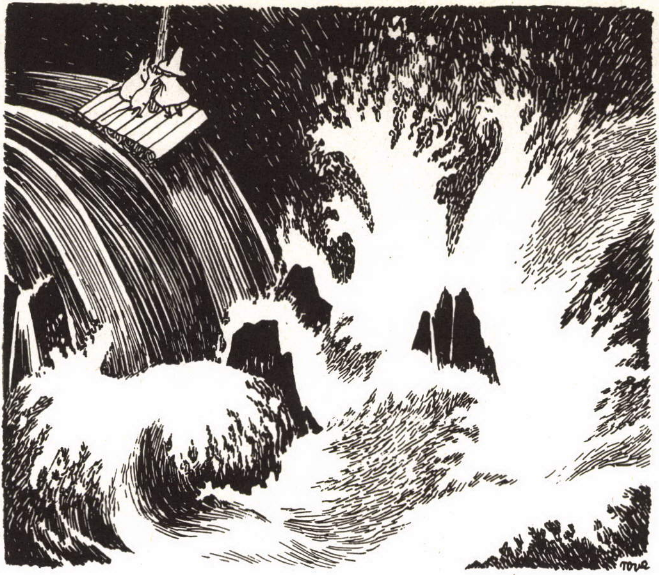
「こいつは、おかしいな。」
こういってヘムルは、ムーミントロールと、スナフキンと、スニフと、テントと、リュックサックを二つ、あみからだしたのでした。
「ほんとに、ほんとにありがとう。あぶないところをたすけてもらって。」
と、ムーミントロールがいいました。
ヘムルは、びっくりしました。
「わしが、おまえさんらをたすけたと？　そんなつもりではなかったがなあ。わしは、この下でやかましい音をたてとったこん虫（ちゅう）をつかまえようとしただけじゃ。」
……ヘムルは、のみこみがわるいのがふつうですが、おこらせさえしなければ、しんせつなのです。
「ここ、『おさびし山』ですか。」
と、スニフがたずねました。
「それは知らんがね。ここはめずらしい蛾（が）のおる山じゃよ。」



「いったい、これはなにかな。」
そういって、ヘムルは、あたりを見まわしました。空を見あげ、あみの中をのぞきこみ、虫をいれたびんのふたをあけて、びんの中ものぞいてみました。
「やかましいな。このへんに、なにかやかましいものがいるぞ。」
と、かれはつぶやいて（このヘムルは、音痴でした）、しまいには虫めがねをつかんで、草の中をさがしはじめました。さがしては、耳をかたむけかたむけ、くんくんにおいをかいでは、だんだん地面のふかいわれめにちかづきました。そこの、やかましいことといったら！
「これは、うんとかわったこん虫にちがいないぞ。きっと、めずらしい……そうだな、だれも発見したことのないものかもしれんわい。」
こう考えると、ヘムルはすっかり興奮してしまって、せいいっぱい、大きな顔をつきだして、われめの中をのぞきこみました。
「たすけて、たすけてえ。」
と、スニフがわめきました。
「あいつらは、もう気がくるいかけとるな。」
ヘムルは、ぼそぼそいいながら、あみをさしいれました。それをひっぱりあげるときの重かったこと！　ヘムルは、うんうんいいながらたぐりあげて、あみですくったものを見ました。

こういってスニフは、大声をあげてなきだしました。
「ぼく、いったじゃないの、あぶないから、岸を歩こうって！　ぼくみたいに小さなものが……。」
「よし、よし。でも、冒険物語じゃ、かならずたすかることになっているんだよ。まあちょっと、上を見てみろよ。」
と、スナフキンがいいました。
スニフは、目をこすりながら見ました。岩のわれめが、まっすぐ上につづいていて、ずっと上のほうに、くもった空がちょっとだけ見えています。
「だめだよ。ぼくは鳥じゃないもの。もしか、ぼくが鳥だとしても、やっぱりだめさ。ぼくは小さいとき耳の病気になって、それからはずっと、めまいがするんだもの。」
そういって、スニフは、またなきだしました。
そこでスナフキンは、ハーモニカをだして、ふきはじめたのです。ちょうどよいくらいの冒険じゃなくて、おそろしく大きな冒険をうたった歌でした。その、くりかえしのところは、きまって救助と、人々のおどろきとをあつかっていました。スニフも、ぼちぼちおちついてきて、口ひげをぬぐいました。ところが、その歌は、山のわれめをつたって、上へひびいていき、それがつぎつぎにこだまして、しまいに一ぴきのヘムルをおこすことになったのでした。そのヘムルは、こんな虫採集のあみを横において、ねむっていたのです。

「マストをたおすのを、てつだってくれ。早く。」
と、スナフキンがどなりました。
マストは、ザブンと水の中へおちて、見えなくなりました。三人は、ぴったりとからだをよせあって、かたずをのみました。ふいに、スニフは、なにかが耳をこするのを感じました。
「耳――ぼくの耳が、天じょうにつかえた。」
スニフは、こうさけぶと、ばったりとうつぶせになって、両手で顔をおおいました。そのとたんに、いかだがガタンと、きゅうにとまったのです。
「じっとしてろ、うごくな。」
スナフキンがどなりました。
トンネルの中は、ごくかすかにねずみ色の光がさしているだけで、めいめいのおびえた顔が、どうにか見えるだけでした。スナフキンは、懐中電燈をつけて、下をのぞきこみました。
「マストだ。マストがつっかえぼうになって、いかだがそれにひっかかっているんだ。見ろ、まったくあぶないところをたすかったんだぞ。」
みんな、見ました。黒く光っている水が、ゴーゴーとすさまじい音をたてながら、まっすぐに、底なしのあなの中へおちこんでいるのでした。
「ぼくはもう、うんざりしちゃったよう。きみらにも、こんな旅にも、きみらの彗星にも。」



「ぼくは、ここにいると思うけどなあ。これは、ママにじまんできるぞ。」
　そのとき、ほそい光がともりました。スナフキンが、懐中電燈をつけたのです。その光は、黒い水の流れや、ぬれた岩かべの上を、心ぼそそうにうろうろしました。
「なんだか、トンネルがだんだん小さくなるように思うんだけど。小さくなっていくと思わない？」
と、ムーミントロールが、うんと小さい声でいいました。
「ほんのすこしだけさ、たぶん。」
　スナフキンはそういって、気をおちつけようとしましたが、うまくいきませんでした。そのとき、バリバリと音がして、マストの先が、いかだの上へおちてきました。

れにゆれたかと思うと、ビューンとはじきとばされました……。
「なににでもいい、しっかりつかまってろ、流(なが)れおちるぞ。」
と、スナフキンがどなりました。
　しばらくは、白くあわだった水と、川の音ばかりでした。スニフのわめき声も、だれにもきこえませんでした。ちっぽけないかだは、滝(たき)を流(なが)れおちて、ぎりぎりとうめいてから、ちゃんとうかびました。それからまた、くらやみの中を走りつづけました。
「どうして、こんなにくらいの。」
　スニフが、大声をだしましたが、だれも、へんじしません。
　あわだった水だけが、青白く光り、そのほかは、すべてがまっ黒でした。まわりにそびえていた山がなくなって、トンネルの中へはいっていたのです。そこを、いかだはどうしようもなく、うずにまかれながら、流(なが)されつづけました。ときどき、かべにぶつかって、きりきりまわりました。滝(たき)の音は、しだいにうしろへ遠ざかり、やがて、あたりは、くらやみとしずけさばかりになってしまいました。
「みんな、いるの？」
と、スニフがふるえながらききました。
　ムーミントロールの声が、へんじをしました。

と、スナフキンがいいました。
流れが、とてもきゅうになりました。長い旅のあとで、わが家がちかづいたのを知った人のように、いま川は、むちゃくちゃに流れだしたのです。川ははばがせまくなり、両岸にそびえている山は、ますます高くけわしくなりました。
「ぼく、岸を歩きたいんだけどなあ。」
と、スニフはいいました。
「岸は歩けない。ぼくらは、川がおだやかになるまで、これをつづけなくちゃ。」
スナフキンが答えました。
けれども、川はおだやかになるどころではありません。いっそうはばがせまくなって、あわだった水は、みぞのようにせまい流れの中へ、おしこまれていきました。いよいよ「おさびし山」のあいだへ、はいったのです。
いかだは木の葉のようにおどりながら、ふかい谷川をつきすすみ、きりたったまわりの山にさえぎられて日の光はほそくほそくなりました。山の中のどこかから、ゴーゴーと音がきこえます。
ムーミントロールは、スナフキンの顔を見ました。こわがっているかどうか、見たのです。スナフキンは、やはりパイプをくわえていましたが、そのパイプの火は、きえてしまっていました。黒く水にぬれた岩かべがそばをかすめていきます。ゴーゴーいう音は大きくなり、いかだは大ゆ

いるだけなんだ。」
と、スナフキンは、さもなさけなさそうにいいました。
「それでも、小さな動物になら、たりるんじゃない？　まあ――ぼくくらいの大きさのなら。」
と、スニフはききました。
　スナフキンは、スニフをじろじろ見ました。
「まあね。だけど、しっぽはだめだな。しっぽはもやしちゃえよ。」
「そんなのひどいよ。それぐらいなら、からだじゅうがこげるほうが、まだましだい。じゃ、子ねこにだったらたりる？」
　けれども、スナフキンはきいていませんでした。かれは、からだをぴんとおこして、心配そうに、くんくんと鼻をうごめかしました。
「この川はおかしいぞ――なにか、気がつかないか。」
「音がきこえるよ。」
と、ムーミントロールがいいました。
　そうなのです。川が、ザーザー、ゴーゴーといっていました。そこらじゅうで、うずをまいていて、そのうずも、まえのように小さなものではありませんでした。
「帆をおろせ。」

と、スニフがききました。
「そうさ。べつに、いやなやつじゃなかったものな。だけど、あいつをつかんだもんで、やけどしたよ。火の精は岸へあがると、だんだんまたもえてきたので、大よろこびさ。それで、とんでかえるまえに、ぼくにプレゼントをくれたよ。」
「えっ、どんな？」
スニフが、大声をあげました。
「地下のやけどの油を一びんさ。火の精が地球の中心までもぐっていくときに、からだへすりこむ油だよ。」
「きみも、それをすりこんでおけば、火の中をくぐれるの。」
スニフは、いまにも目玉をとびださせそうにして、ききました。
「そうともさ。」
と、スナフキンはいいました。
「どうして、それをいままでいってくれなかったの。だったら、ぼくたちみんなたすかるじゃない。彗星がきても、ぼくたちは……。」
「しかしね、もうおかたなくなっちゃったんだよ。ぼくは、火事になってる家から荷物をだしてあげたりしたもの。こんなことになるんだったら……。いまでは、びんの底にすこしのこって

ひっかからないように、気をつけなくちゃならないけど。そう、ぼくはなるべくすずしい場所をえらんで、お茶をのんだよ。どこもかしこも、ぐつぐつわきたっていて、いきものも青い草も、ひとつも見えなかったね。下でねむっていた大地が、きゅうに目をさましたんだ。大きな音をたてて、ぼくの目の前で噴火口が口をひらいて、赤い火とものすごい灰かぐらが、もうもうとふきでたんだぜ。」

「火をふく山！　それで、きみはどうしたの。」

と、スニフが、大声でいいました。

「見てただけさ。すごくきれいだったよ。大地の中から、火の精がわんさとまいあがって、火花のようにとびまわるのが見えたよ。あたりがだんだん暑くなり、ほこりだらけになったので、ぼくも、そこからにげだしたがね。

　山のふもとで小川を見つけたから、はらばいになって水をのんだっけ。もちろん、その水はあつくなってた。でも、にえくりかえっているほどではなかったよ。すると、そこへ火の精が一ぴきとんできたんだ。そいつが、川の中へおっこちたもんで、もうすこしで火がきえてしまうところさ。頭に火がのこってるだけで、ほかのところはまだらになってけむりがでてるんだよ。火の精のやつ、声をはりあげて、たすけてくれ、とぼくにさけぶんだ。」

「たすけてやったの。」


Tove

スニフがいいました。
「なにか、話をしてよ。彗星のことじゃなくて、なにかおもしろい話をさ。」
スナフキンは、いかだのかじをとっていましたが、こうふたりにききました。
「きみたち、火をふく山の話を、ききたいかい。」
ふたりが、いきおいよくうなずくと、スナフキンはパイプにたばこをつめて、火をつけてから話しはじめました。
「あのね、いつだったか、地面がいちめんに、黒い溶岩ばかりの土地へいったときのことだよ。昼も夜も、溶岩の下でゴトゴト音がしてるんだ。それは、溶岩の下でねむってる地球が、ときどきねがえりするからさ。溶岩のかたまりが、ごろごろころがって、その上から湯げがたっていて、この世のものとは思えないほどすごいながめだったよ。ぼくがそこへいったのは夕がたで、ずいぶんつかれていたから、お茶をのみたくなったんだ。かんたんなものさ。温泉から、なべに湯をくんでくれば、それでいいんだ。」
「やけどしなかった？」
と、ムーミントロールがききました。
「ぼくは、竹馬で歩いたもの。竹馬にのってれば、どんな岩のかたまりでも、われめの上でも、平気さ。もちろん、あなぼこに



かえろうとすると、むずかしいものなんだよ。ぼくは、見るだけにしてるんだ。そして、たちさるときには、それを頭の中へしまっておくのさ。ぼくはそれで、かばんをもち歩くよりも、ずっとたのしいね。」

「ガーネットは、リュックへいれられたんだ。見るだけと、手でもってじぶんのだと思うのとは、ぜんぜんちがうのに。」

スニフは、かなしそうにいってたちあがると、音をたてて鼻をかみました。それから、みんなはもの思いにしずみ、すこしばかりふさぎこんで、うすぐらい谷間の中をひきかえしていきました。

スナフキンのおかげで、旅はたいへんたのしいものになりました。かれは、みんなの知らないメロディーをきかせたり、カードあそびや、さかなつりをおしえたりしました。ほんとうとは思えない、とほうもない話もしました。

川も、たのしいものになりました。あちこちでうずをまいて、流れが速くなったのです。いまは、川はばがせまくなって、「おさびし山」がちかづいていました。やはり、地上に重いカバーをかけたように、雲がたれこめていて、てっぺんは、すっぽりと雲におおわれていました。けれども、天文台らしいものは、どこにも見えません。



　ムーミントロールとスナフキンは、がけの上にのりだして、のぞきこみました。すると、見えたではありませんか——。おそろしい大とかげが、ガーネットの山の上に、うずくまっているのが。

「ううむ。」

と、ムーミントロールはうめきました。

　スニフは、地面にすわりこんだまま、ないています。

「すんだことだよ。ね、きみ。」

と、スナフキンがいいました。

　スニフは、しゃくりあげました。

「ガーネットが！　ぼく、一つもとってこなかったよ。」

　スナフキンはスニフのそばにこしをおろして、やさしくいいきかせました。

「そうだな。なんでもじぶんのものにして、もって

「まだ！　うんとのこっているんだもの……。」
「つゆがおりて、さむくなるぞ。」
「うん。いくよ……じきに……。」
　スニフはそういって、いっそうおくへはいっていきました。そこには、大きな赤いガーネットが二つ、こちらにむかって光っていました。
　危険は、そのときにおこったのです。二つのガーネットがうごいて、まばたきしたと思うと、それがぐんぐんちかづいてきました。そのうしろには、うろこのあるからだがついていて、石の上をするすると音をたてながらすべってきます。
「きゃっ。」ひと声ひめいをあげると、スニフは、うしろも見ずににげました。四つ足でとびはね、あっちこっちにぶつかりながら、すべったりころんだりして、岩かべのところまで、たどりつきました。それから、あぶらあせにぬれた手で、よじのぼりはじめたのです。すぐ下では、ゆっくりとおそろしい鼻息がしていました。
「どうしたの。なにをそんなにあわててるんだい。」
と、ムーミントロールがたずねました。
　スニフは、へんじもしないで、ただよじのぼるばかりです。やっと、がけっぷちへはいあがると、へなへなとしりもちをついてしまいました。

「あれを、いくつかもらってもいい？　帆前船でも、スケートでも買えるもの。」

　スニフが、わくわくしながらききました。

「すきなだけ、とれよ。」

と答えて、スナフキンはわらいました。スニフは、そろそろと谷底へおりはじめました。鼻をすりむいて、ころげおちそうになったことも、たびたびでした。でも、ぜったいにあきらめません。

　やっと下までおりると、スニフはふうと息をついてから、ふるえる手でガーネットをあつめだしました。これとくらべたら、ムーミントロールの石の真珠などなんでしょう！　ガーネットのかたまりは、大きくなるいっぽうです。スニフは谷底をだんだんおくへすすみました。そして幸福でいっぱいになりながら、むちゅうでひろいまわりました。

「おうい、まだあがってこないのか。」

と、スナフキンが、上からどなりました。



「日のあたってるときが、いいんだ。そしたら、もっとよくかがやいているからな。」
こう、スナフキンはいいましたが、スニフは、へんじもしません。むねをどきどきさせて、口ひげをさきまでぴんとたてていました。気分のわるかったことなど、どこかへふっとんでしまっていました。
いま、ふかいわれめがいりみだれている、あれはてた谷間をたどって、三人は歩いています。そこは、うすぐらくて、きみのわるいほどしずかで、さびしいところでした。三人は、ひそひそと声をかわしました。
「気をつけろよ。ここだ。」
スナフキンが、そっといいました。
みんなは、身をのりだして、ながめました。せまい谷間に、数知れぬほどたくさんの赤い石が、ほのぐらい光の中にかがやいています。黒い宇宙にちらばった、いくつもの彗星のように……。
「あれがみな、きみのものなの。」
と、スニフは、小声でいいました。
スナフキンは、平気な顔で、
「ぼくが、ここに住んでるうちはね。じぶんで、きれいだと思うものは、なんでもぼくのものさ。その気になれば、世界じゅうでもな。」



「ああ、どこへいってもいいよ。しかし、きみがどこかへいく目的がほしいのなら、ガーネットのある谷間へいこうか。」

「ガーネットだって。それ、ほんもの？」

と、スニフは、大声をあげました。

「それは知らんがね。とてもきれいだよ。」

　三人は、あれ地のおくへむかって、ごつごつした岩と、とげのあるしげみのあいだを、ゆっくりすすみました。

「いや、いいよ。ぼく、コーヒーをのむ気がしなくなった。」
「ぼくもだ。くるしい……もうすぐ、げろがでちゃう！」
と、スニフは、ひめいをあげました。
　みんなはじっとすわったまま、なにもいわずに、あれはてた風景をながめていました。スナフキンが、ハーモニカをとりだして、なにか夕ぐれの歌をふきました。
　あのおそろしいものに、いま名まえがついたのです。彗星なのでした。ムーミントロールは、いつものようにしずかにくれていく、くもった空を見あげました。けれども、かれは知っていました。雲におおわれた空のむこうに、火の玉になった星が、ちかづいてきているのです。長いしっぽを光らせた彗星が、ぐんぐんと……。
「彗星は、いつくるの。」
　ムーミントロールが、だしぬけにききました。
「それは、きみたちが天文台へいけば、きっとわかるさ。だけど、今晩はぜったいこないよ。日がくれてしまうまでに、みんなですこし散歩しないか。」
　そういって、スナフキンはこしをあげました。
「どこへいくの。」
　スニフがなさけない声で、ききました。

「彗星というのは、わからないものだ。どこからきて、どこへいくのかねえ。まあ、こっちへはこないだろう。」

スニフが、目をまるくして、たずねました。

「彗星って、なんなの。」

「きみは、そんなことも知らないのか。きみたち、危険な星を観測にいくんだろ。彗星というのはね、ひとりぼっちの星で、気がくるってるのさ。それで、尾をひきながら宇宙をころげまわってるんだ。ほかの星は、みんなちゃんとした軌道をまわってるけど、彗星というやつは、どこへでもあらわれるのさ。ここへもな。」

「そしたら、どうなるの。」

スニフは、かすれた声でききました。

「たいへんさ。地球が、こなごなになっちゃうよ。」

と、スナフキンがいいました。

「きみは、そんなことをみんな、どうして知ってるんだい。」

ムーミントロールが、せきこんでききました。

スナフキンは、かたをすくめました。

「うわさ話をきいたのさ。コーヒーを、もっとのむかい。」

のさ。ぼくはね、うちにひみつのものをもっているんだ。上が『ね』で下が『こ』のものを。この友だちは、ムーミントロール。この子のパパは、じぶんで家をたてたんだぜ。」

「ふうん、そうかい。ぼくはスナフキンというんだ。」

と、そのムムリクは答えました。かれはテントの外で火をおこして、コーヒーをわかしました。

「きみは、ここにひとりだけで住んでるの。」

と、ムーミントロールがたずねました。

「ぼくは、あっちでくらしたり、こっちでくらしたりさ。きょうは、ちょうどここにいただけで、あしたは、またどこかへいくよ。テントでくらすって、いいものだぜ。きみたちは、どこかへいくとちゅうかい？」

こう、スナフキンは、コーヒー茶わんを三つだしながらいいました。

「うん、天文台へね。ぼくたち、危険な星を観測して、宇宙がほんとに黒いかどうか、しらべるんだ。」

と、ムーミントロールが、まじめな顔でいいました。

「それは、長い旅になるよ。」

そういったきり、スナフキンは、かなりのあいだ口をとじていました。

コーヒーができあがると、コーヒー茶わんについでから、また口をひらきました。



「ハロー？」
　ムーミントロールが、用心しながら声をかけました。
　ハーモニカの音がやんで、テントからは、一ぴきのムムリクがあらわれました。みどり色の古ぼけた帽子をかぶって、パイプをくわえています。
「よう！　もやいづなを、こっちへなげろよ。きみたち、コーヒーをすこし、いかだにのせていないか。」
　スニフが、はしゃいで、さけびました。
「かんにいっぱいもってるさ！　さとうもだ。ぼくはスニフで、千キロ以上も、遠くからきたんだよ。とちゅうは、おおかたぼくがかじをとってきた

と、ムーミントロールがいいました。

スニフは、ニョロニョロたちを見つめました。とても小さくて、色が白く、顔はついていません。

「いやだな。ぼくは、ニョロニョロをちかくで見たことがないけど、見たくもないや。ぼくたち、まだつかないの。」

と、スニフはいいました。

ムーミントロールはため息をついて、つぎのまがりかどで、いかだをまわしました。すると、むこうの川岸に、なにかが見えたのです。ソフトクリームのいれもののような黄色いものでした。一日じゅうではじめて見た、あかるい色でした。

「あれは、なに？　天文台なの。」

スニフは、大声をあげました。

「いや、ちがうよ。あれは、テントだ。黄色いテントさ。中にあかりがついている……。」

と、ムーミントロールがいいました。

ちかづいてみると、だれかがテントの中でハーモニカをふいている音が、きこえてきました。

ムーミントロールは、いかだのかじをまげました。いかだはゆっくりと陸地のほうへまがり、岸べにとまりました。



ムーミントロールはいいました。

「真珠か。あんなものは、ただの白い石じゃないか。これは、ほんものなんだぞ。地球がいつこわれてしまうか、わからないときだぞ。それをどうにかできないか、ぼくたちがしらべにいくんだ。スニフは、きのう、星のことばかりいってたじゃないか。」

「うん、きのうはね。」

と、スニフはいいました。

川は、どす黒い色をして、音もなく流れつづけています。夕がたになって、五十ぴきものニョロニョロが、東のほうへむかって、川をわたっていくのが見えました。

「ことしは、あいつら、おそいんだな。スニフ、きみはニョロニョロをちかくで見たことがあるかい。あいつらは、ものもいわないし、ひとのことも気にしちゃいないんだ。両手をふりながら、ずっと遠くをにらんで、どんどんすすんでいくだけなんだよ。パパがいってたけどね、ニョロニョロたちは、どうしても思ったところへいきつけなくて、いつもどこかをあこがれてるんだって……。」

トに……。」

でも、いかだはもう、はじめのまがりかどをまわって、子どもたちの目の前には、心をそそる、人っけのない川が、見知らぬ土地にむかって、ひろがっていました。

しだいに両岸が高くなって、はるかかなたの空には、「おさびし山」が黒々とそびえていました。川の水も、空とおなじようにどす黒く、あたりはしずまりかえっています。鳥の声ひとつしません。水のおもてにはねあがる魚も、一ぴきもいません。そして、天文台も見えませんでした。

小さなスニフは、せがんでかじをもたせてもらいましたが、じきにつかれてしまって、ききました。

「まだ、つかないの。」

「これは、ものすごくだいじな大旅行だぜ。こんな旅にくわわれる小さな動物は、めったにいないんだ。」

と、ムーミントロールは、へんじしました。

「だけど、なんにもおこりゃしない。おんなじような、ねずみ色の岸がつづいて、なにもすることがないよ。真珠をあつめたり、どうくつを見つけたりできたのに……。」

スニフは、口をとがらせました。

ニフは階段のところへでて、ミルクのおさらをのぞいてみました。すると、たちまち目がさめました。おさらが、いっぱいじゃないのです。たしかに、ミルクがへっています。

（あの子ねこが、ここへきたんだ。また、くるぞ。ぼくが家へかえってきたら、きっと、ここでまってるだろう。この宇宙だって、ちゃんとおちつくだろうな。）

川岸には、いかだが帆をあげてうかんでいました。

「さあ、川のまん中をたどっていけよ。まるいやねのある、へんな建物が見えたら、それが天文台なんだ。じゃこうねずみがいっていたが、そこには星のことしか考えないえらい学者が、うんと住んでるそうだ。大きい星やら、小さい星やら、星という星についてだよ。さあ、もやいづなをたぐりこめ。じゃ、元気でな。」

こう、ムーミンパパはいいました。

「いってくるよ。」

ムーミントロールとスニフが、さけびました。いかだは、川下へすべりだしました。

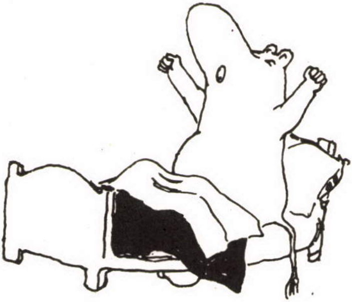
ムーミンママも、大声をあげました。

「たのしくね。日曜日までに、かえってくるのよ。おいしいグラタンをつくっておくからね。さむくなったら、わすれないでウールのズボンをはくのよ。おなかのくすりは、リュックの左ポケッ

「ねえママ、こんなにたくさん、もっていけないよ。ぼくたち、わらわれてしまうもの。」
「『おさびし山』は、さむいんだよ。」
といって、ママはセーターを二まいと、おなべを一ついれました。
「あんた、じしゃくをもってる?」
「うん、もってるよ。だけど、おさらだけでも、だしちゃだめ? ぼくたち、青い葉っぱにのせて、たべるつもりだったんだもの。」
「そうね。すきなようになさい。」
といって、ママはおさらを外へだしました。
「パパが、いかだの用意をしてくださっているところよ。じゃこうねずみは、ねむってるわ。スニフちゃんは、どこ?」
「ここさ。」
スニフは、朝っぱらなので、きげんのわるいへんじをしました——とてもねむそうに、顔じゅうをくしゃくしゃにして。ス



第3章



いよいよ旅に出発する日の朝、ムーミントロールはたいへん早く目をさましました。かれは、まどのところへかけよって、天気のぐあいを見ました。空はやっぱりくもっています。山には雲がひくくたれこめて、庭の木の葉をゆする風も、ぜんぜんふきません。

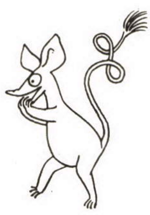
「スニフ、おきろよ。ぼくたち、でかけるんだぞ！」

ムーミントロールはそうどなって、階段をころがるようにおりました。さっそうとした気持ちで、じぶんがおそろしくつよくなったように感じました。

ムーミンママは、なにやかや、せっせとしたくしているさいちゅうでした。サンドイッチのつつみもつくってあって、客間のテーブルの上には、リュックサックやバスケットや箱が、うんとのっていました。

ムーミントロールはいいました。

のかわかったら、うちのみんながたすかるわ。」
「そしたら、ママが安心できるっていうの。」
と、ムーミントロールがききました。
「そうですとも。」
　ムーミントロールは、すっくとたちあがって、いいました。
「ぼくたち、しらべてくるよ。ママ、心配しないでね。きっと、人が思ってるより、地球はずっと大きいよ。」
　スニフは、興奮で足をがたがたさせながら、考えました。
（――ぼくも、いっしょにいくんだ。ぼくは、ついていけないほど、小さくはないんだぞ。）
　スニフは、ムーミンママにむかって、こういったのでした。
「ぼくたち、ちゃんとやるよ。安心してね。だけど、ぼくがいないあいだ、わすれないで、毎日おさらにミルクをいれて、階段の上へだしておいてよ。ひみつだから、そのわけはいわないけどさ。」



いっておるしな。」
と、パパがいいました。
「なんですって。」
ママはたずねました。
「てん、もん、だいだよ。すこし川をくだったところにあるらしい。星を観測する場所なんだ。子どもたちが、星のことしか考えようとしないのなら、あれを観測せんことはあるまい。」
「ええ、ほんとにそうですわ。」
ママはそうへんじして、ライラックのしげみの、ちりはらいをつづけました。
ムーミンママは、じっくりと考えてから、ベランダの階段へいって、いいました。
「パパとママが、考えたんだけどね。あんたたち、ちょっと旅をしていらっしゃい。」
「ママ、おねがいだ。いつ地球がこわれるかわからないときに、よそへやらないでよ。」
と、ムーミントロールはたのみました。
「宇宙はくらやみで、大きなこわい星がいっぱいなんだよ。」
と、小さな動物のスニフは、口の中でぶつぶついいました。
「そうね、あんたたちが見にいくのは、その星なのよ。じゃこうねずみがいったわ、どこかこのちかくに、星を観測する場所があるって。どの星もそんなに大きいのか、宇宙はほんとうに黒い

じゃこうねずみはそういって、地球にしていたパンくずを、テーブルの上から、ぷうっとふきとばしました。ムーミントロールは、いまにもなきだしそうになりました。

「さあ、みんないまから川へいきましょうよ。ママが、あし船のつくりかたを、おしえてあげるわ。」

と、ムーミンママがいいました。

その日は、たいへん長い一日でした。スニフもムーミントロールも、どうくつへでかける気になりませんでした。家からはなれているうちに、地球がこわれてしまったらたいへんですものね。真珠をあつめるのも、いっぺんに、ばかばかしいことだという気持ちになってしまいました。ふたりは、ベランダの階段にすわっていました。なんとなく、そうしているのが、いちばん安全なように思えたのです。そして、いまは青くなくて黒くなってしまった宇宙のことを、ひそひそと話しあいました。宇宙の中では、太陽系のぜんたいも、まきちらされたサンドイッチほどの、ねうちもないというのです。

「あの子たちに、なにかさせないといけませんわ。ふたりとも、あそぼうとしませんもの。じゃこうねずみにいわれて、この地球がほろびることしか、考えられないんですわ。」

こうムーミンママは、心配そうにムーミンパパにいいました。

「子どもたちを、しばらくよそへいかせようと思うんだ。じゃこうねずみが、天文台のことを

と、ムーミンパパが、口をはさみました。
ところが、じゃこうねずみは、平気な顔でつづけました。
「べつの太陽系は、このベランダのテーブルの上にはいりきれん。それは、あっちさ。」
じゃこうねずみはそういって、サンドイッチを一つ、庭へほうりなげました。
「あらまあ。太陽系って、たくさんありますの。」
ママは、のこりのサンドイッチを、こちらへひきよせてから、たずねました。
「あるとも。それから見たら、地球なんぞは、ほろびようとほろびまいと、ほんの小さいことなのが、おわかりじゃろ。」
と、じゃこうねずみは、陰気なわらいをうかべて答えました。
ママは、ため息をつきました。
スニフはさけびました。
「ほろびるのは、いやだ。ぼくは、どうくつを見つけたんだ。ほろびたら、こまる。」
パパが、じゃこうねずみのほうへ、かがみこんでいいました。
「どうです。しばらく、ハンモックの中で考えることにしては？　きっと、気持ちがいいでしょうよ。」
「わしをここにいさせたくないから、そんなことをいうんだな。」



こういって、ママはたのみました。
「うん、そういってみよう。」
ムーミンパパは、やくそくしましたが、またいいました。
「あの人は、ひとりぐらしが長かったから、いいたいことを、そのまま口にだしてしまうんじゃないかな。」
そのとおりでした。朝のコーヒーのあとで、じゃこうねずみはベランダのテーブルの上へ、宇宙ぜんたいをつくってみせてから、
「これが太陽だぞ。」
といって、さとういれを指さしました。
「このビスケットが、みんな星さ。そして、このパンくずが地球でな。どうじゃ、この小さいことは！　宇宙は、どこまでもつづくほど大きいのにな。宇宙は、まったくのくらやみさ。そのくらやみの中に、怪物がうごめいておるのじゃ。さそり座とか、大くま座とか、やぎ座とか……。」
「まあまあ。」

「この雨は、ふつうのものじゃないって、じゃこうねずみがいったでしょ。空気の中におかしなものがあって、首すじがもぞもぞするって。そしてね、こういったよ――地球はおそろしく小さく……。」

と、ムーミントロールがどなりました。

「きっと、じゃこうねずみは、すこし興奮していただけですよ。じぶんの家がこわれてしまって、おなかがひえてしまったら、だれでもそうなるわ。コーヒーをのんだら、ママがお庭のほこりをはらっておくから、心配しないでいいの。あんまりスニフちゃんをおどかすんじゃありませんよ。」

ムーミンママは、こういいきかせてから、家の中へはいっていって、ムーミンパパをつかまえていいました。

「あなた、外のようすをごらんになりました？」

「うん、見たとも。においをかいだら、りんのにおいがしたぞ。とってもおもしろい現象だ。」

と、パパは、ゆかいそうにいうのでした。

「でも、子どもたちが、こわがりますわ。おまけに、じゃこうねずみが、子どもたちをいっそうこわがらせますの。あの人に、たのしいことを話すか、それとも、なんにもいわないようにさせてくださいませんか？」

す黒いりんごの木を見あげました。

「おじさん、どうして、こんなになにもかも、どす黒いの。」

と、ムーミントロールがさけびました。

「わしのじゃまをするな。あっちへいって、あそぶんだ。あそべるあいだはな。こういうことは、わしらにはどうにもならん。それなら、それを哲学的にうけとるのがよいのだ。」

「こういうことって？」

と、ムーミントロールは、大声をだしました。

「もちろん、地球がほろびることさ。」

じゃこうねずみは、しずかにそういいはなったのでした。ムーミントロールは、あわてて台所へかけこみました。ママは、朝のコーヒーをわかしているところでした。

「ママ、なにもかも、みんなどす黒くなっちゃったよ。じゃこうねずみがね、地球がほろびるっていうの。見にきてよ。」

ムーミンママは、コーヒーを火からおろして、庭へとびだしました。

「まあ、これは。どうして、こんなにひどくよごれちゃったのかしら。」

ママはそういって、木の葉を手でこすりました。手は、ほんとにうすぎたなくなって、いくらかべとべとしました。

第2章



あくる日は、くもりでした。ムーミントロールは目をさますと、じっとりぬれた庭へでました。風はおさまって、雨もやんでいました。だが、なにもかもが、ふつうではありません。ムーミントロールは、じっとたってあたりをながめ、あちこちのにおいをかいで、やっとどうなったのかわかりました。

すべてのものが、どす黒いのです。空や川ばかりではありません。庭も、地面も、家も。みんな、まるでどす黒い、この世のものと思えないほど、きみわるいようすをしていました。

「たいへんだ。たいへんだ。」

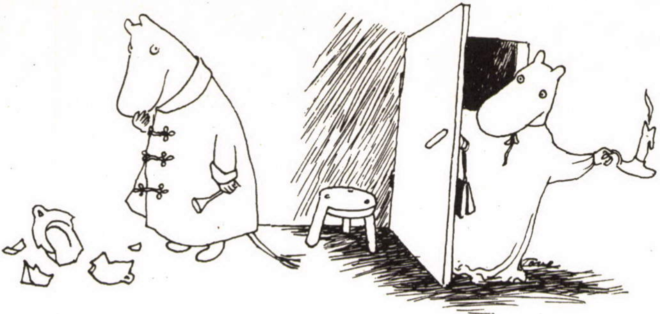
と、ムーミントロールは、そっといいました。

じゃこうねずみが家からでてきて、ムーミンパパのハンモックのところへ、ちょこちょこと走っていきました。ハンモックも、どす黒くなっていました。じゃこうねずみは、その中へもぐりこんで、ど



と、ママがいいました。じゃこうねずみは、鼻でわらいました。
「おくさんは、わしがなんのことをいうておるのか、ごぞんじないんじゃ。このごろ、空気の中におかしなものがあるのを、感じなかったかな。おまえさんは、なんの予感もしなかったかな。ときどき、首すじがもぞもぞすることは？」
　ムーミンママは、びっくりしました。
「いいえ、そんなことは。」
「なにか、こわいこと？」
　スニフがそっといって、じゃこうねずみを見つめました。
「それは、なんともいえん。この宇宙は、とてつもなく大きいし、地球は、おそろしく小さく、とるにたらん……。」
「もう、ねどこにはいりましょうよ。」
と、ムーミンママはあわてていいました。
「夜おそくに、こわいお話をするのは、ほんとによくありませんわ。」
　しばらくすると、あかりがぜんぶきえて、ムーミンやしきは、ねしずまりました。でも、雨と風は、あくる日の朝までも、つづいたのでした。

「三つも？　それは、だれのですの。」
「じゃこうねずみのだよ。あの人の家が、こわれてしまってね。われわれのとこへとまりにきたのさ。」
それから、ベランダへ石油ランプをつけて、みんなで乾杯しました。ま夜中でしたが、ムーミントロールもスニフも、いっしょに乾杯しました。でも、ふたりはミルクをのんだのです。雨は、やねをうちつづけ、風はいっそうはげしくなっていました。風がえんとつの中へふきこんで、大ストーブの口は、ガタゴトとぶきみな音をたてていました。
じゃこうねずみが、ベランダのまどに鼻をおしつけて、外のくらがりをのぞきながら、いいました。
「この雨は、ふつうのものじゃないな。」
「どんな雨でも、みんなふつうじゃないのとちがいますか。もう一ぱい、いかが。」
と、ムーミンパパがたずねました。
「まあ、一ぱいだけ。どうも、どうも。いい気持ちになってきたようだ。大きな災難は、べつに気になりゃせんが、しずむときに、はらがつめたくなるのは、どうもいやでしてな。」
じゃこうねずみは、そういいました。
「ええ、あれはとってもいやですわ。でも、この雨は、大水にはなりませんわよ。」



じい音がしました。
家じゅうの人が、目をさましました。さけび声がして、ドアがバタンと鳴ったかと思うと、ムーミンママが、ろうそくを手にもって、かけつけてきたのでした。
「まあ、あなたでしたの。わたし、どろぼうがはいってきたのかと思いましたわ。」
と、ママはいいました。
「あのりんご酒をおろそうとしたんだ。そしたら、どこかのまぬけが、このけしからんはちを、はしっこへおいときおったもんで。」
「そんなの、われたほうがよろしいわ。とってもきたないおはちでしたもの。いすの上へあがれば、らくにおろせますの。わたしにもグラスを一つとってくださいな。」
と、ムーミンママがいいました。
パパは、いすの上へあがって、りんご酒のびんと、グラスを三つおろしました。

と、ムーミンパパは、おわびしました。
じゃこうねずみは、あわれな声でいいました。
「わしは、ベッドなんぞちっともほしくない。あれは、必要のない家具ですじゃ。わしが住んでたのは、ただのあなぐらだったが、いごこちのよいところでしたぞ。たしかに、いごこちがよかろうとわるかろうと、哲学者にとっては、どうでもよいことじゃ。しかし、いずれにしても、あれはよいあなぐらじゃったよ。」
かれは、ぶるぶると身ぶるいして、水をふるいおとしました。そして、あたりのようすをうかがってから、たずねました。
「ここは、どういう家なんか。」
「ごくふつうのムーミンやしきですよ。わたしが、じぶんでたてたんです。かぜひきに、りんご酒を一ぱい、いかがですかな。」
「そんな心配は、いっこういらん。しかし、せっかくじゃから。」
と、じゃこうねずみがいいました。
ムーミンパパは、ぬき足さし足で台所へしのびこみ、あかりもつけずに、戸だなをあけると、いちばん上のたなにのっていた、りんご酒のびんへ手をのばしました。パパは、うんとうんと背のびをしました。とたんに、はちを一つおとしてしまったのです。ガラガラガチャンと、すさま

に流された。それは、いっそうなんでもないことじゃ。哲学者には、じぶんがいきていようと死のうと、まったくおなじことだからな。だが、こんなかぜひきのあとでは、わしはどうなるか、とても不安で……。」

　みじめないきものは、よわよわしい声で、そういいました。

「それは、なんともはや、もうしわけありません。あの橋の下にあなたが住んでおられるとは、知りませんでした。どうぞ、中へおはいりください。きっと、どこかへ家内が、ベッドの用意をしますから。」



その晩おそく、みんながねしずまったころ、ムーミンパパは、ものがなしそうな音をききました。パパはおきあがって、耳をすましました。

雨は、ドードーと雨どいを流れ、やねうらのいたんだまどが、いつものようにバタンバタンと、風に鳴っていました。そのときまた、ものがなしそうな、みじめな音がしました。パパはガウンをひっかけて、家の見まわりにでました。まず、青いへやを、つぎに、黄色のへやを、しまいに、まだらのへやをのぞきこみました。どのへやも、ひっそりとしずまりかえっていました。それで、ベランダのドアをあけて、雨の中をすかして見ました。懐中電燈で石段の上や、草の中をてらしました。雨つぶに光があたって、ダイヤモンドのように、光って見えます。いちだんと、はげしい風がふきました。

「おやおや、これは？」

と、パパがいいました。

それというのは、なにか口ひげがあってきらきらした目をしたものが、ずぶぬれでぶるぶるふるえながら、うずくまっていたからでした。

「わしは、じゃこうねずみ――家をうしなった、じゃこうねずみだ。家の半分は、おまえさんが川へ橋をかけたときにつぶれた。もちろん、そんなことはなんでもない。あとの半分は、この雨

けました。青いのを一つ、そのつぎに白いのを二つ、それから赤いのを一つという順で、とてもきれいになっていきました。

ムーミンママは、ひとりでそっと口ぶえをふきながら、

（雨になりそうだわ。）

と思いました。きみのわるい風が、木々のあいだをふきぬけて、木の葉はひめいをあげながら、ゆれうごき、ぜんぶうらむけになっていました。大きな、どす黒い雲が、空を走っていきます。

（また、ひどい大雨にならないでほしいわ。）

そう思ったとたんに、大つぶの雨がぱらついてきたので、ムーミンママは、のこりの貝がらをあわててひろいあつめて、家の中へはいりました。

スニフとムーミントロールは、客間のじゅうたんの上で、ねむっていました。ムーミンママは、ふたりに毛布をかけてやってから、まどぎわにすわって、雨をながめました。大つぶの黒っぽい雨です。まだ早いのに、あたりには夕やみがせまっています。雨はやねの上を流れ、庭の中にザーザーとふりそそいで、森じゅうをざわめかせ、遠くのスニフのどうくつにも、したたりおちていました。

どこか、まったくだれも知らない、ひみつのかくれ場所では、人になつかないあの子ねこが、しっぽをまるめて、ねむっていました。



なる、とってもいいもの……。でも、それがなんだかは、いえないよ。ひみつなんだもの。」

すると、スニフもやかましくいいました。

「ぼくは、はじめが『ど』で、おわりが『つ』のものを見つけたよ。そしてね、まん中に、『う』や『く』があるの。でも、それいじょうは、いえないや。」

「それは、よかったこと。一日のうちに、そんなにめずらしいことが、たくさんおこって。スープが、保温箱(ほおんばこ)の中に、はいっていますよ。パパが書きものをなさってるから、さわがしくしないでね。」

と、ムーミンママはいいました。

それからママは、貝がらをならべつづ

だ。ムーミントロールのやつ、きっというだろうなあ。「どうしたんだい、スニフ、きみは、どこへでもついてくるような、じぶんのねこをもってるのかい。」って。

そうだ。おさらにミルクをいれて、庭へだしておいてやろう。毎晩……。）

スニフは、ため息をついて、いいました。

「ぼく、はらぺこなんだ。たべることもわすれるほど、しあわせになれるんだね。」

ムーミントロールとスニフが、ムーミン谷の青いやしきへもどってきたのは、夕がたちかくでした。川の流れもゆっくりと晩にちかづいていました。そして、川の上には、色あざやかなあたらしい橋が、夕日をあびていました。ムーミンママは、花だんのまわりに、貝がらをきれいにならべているところでした。

「おもしろかったの。」

と、ママはききました。

ムーミントロールが、話してきかせました。

「ぼくたち、ここから百キロ以上も、遠くへいったんだよ。海を見つけたの。ぼく、でっかい波の中へもぐって、いいものをうんとたくさん見つけたよ。はじめが『し』で、おわりが『ゆ』に

「箱だって？　まだ、そんなことばかりいってる。きみも、なにもかも、谷底へおっこちればいいんだ。ぼくには、そんなひまはないさ。だって、どうくつを見つけたんだもの。ぼくのどうくつをさ。」

「ほんとのか。中へもぐりこむあなのあいてるやつ？　岩のかべや、砂の地面もあるどうくつかい。」

スニフは、じっとしていられないほどうれしくなって、へんじしました。

「そんなのは、ぜんぶあるさ。きみが、真珠を半分か、両手に山もり三ばい、ぼくにくれたら、ぼくのどうくつの中へ、真珠をいれさせてやるよ。」

どうくつの中へおかれると、真珠はいっそうほんものらしく白くなりました。ムーミントロールとスニフは、砂の上にあおむけにねころんで、天まどから青い空を見あげました。ときどき入り口から波しぶきがまいこんできました。日ざしも、だんだん長くなっていきました。

スニフは、あの子ねこのことを話したくて、しかたがありません。でも、話さないことにきめました。こう考えたからです。

〈あの子ねこを見つけて、ちゃんとなかよしになってからにしよう。ぼくのいくところへは、どこへでもついてくるようにしちゃうんだ。それから、ある日そろってベランダへはいっていくん



かえり道は、あまりこわいと思いませんでした。どうくつを見つけたばかりですもの、こわいことなんか、おこるはずがあるでしょうか。

ムーミントロールは、いまもまだ真珠をあつめつづけていました。かれは、波うちぎわをコルクのように、ぽいぽいとはねまわっていて、浜べには、白くてまるい石が、たくさんおいてありました。

「ああ、かえってきたんだね。箱は、どこにあるの。」

「あがっといでよ。いますぐ、あがっといでよ。」

と、スニフは大声でさけびました。

「ぼく、いいものを見つけたんだ。ひとりきりで、きみになんか考えられないくらいあぶないめにあって、いいものを見つけたんだよ。」

「それは、いい箱かい。」

ムーミントロールは、そうききながら、両手にいっぱい真珠をもって、浜べへ歩いてきました。



した。天じょうに一つあながあいていて、青い空の見えるまでになっています。砂は、日光であたたかでした。

スニフは、どうくつの中へもぐりこんで、日ざしの中にうずくまり、こんなことを考えました。

（これからずうっと、ここでくらしてやるんだ。小さいたなをつって、砂の上にねどこをつくって、晩にはろうそくをたてるんだ。ムーミントロールが、うらやましがるだろうな。）

ところが、あのいじわるな子ねこはいなくなってしまっていました。

ていってしまいました。それで、スニフが山をのぼりはじめました。水にぬれた急坂をよじのぼりながら、ひっきりなしに子ねこをよびつづけました。やっとのことで、てっぺんまでのぼってみると、子ねこは、がけっぷちへでて、せまい岩だなの上を、ゆうゆうと歩いているのでした。

「ぼくからにげていかないで。ぼく、おまえがすきなんだよ。」

スニフはさけびましたが、子ねこは、どんどん遠くへ歩いていくばかりです。岩山の下には、波がうちつけていました。スニフは、足の力がぬけて、むねがどきどきなりだしました。

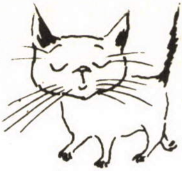
それでスニフは、四つんばいになって、子ねこのあとにつづきました。ゆっくりゆっくりはっていきながら、そのあいだ、ずっと考えていました。

(ぼくより小……ぼくよりもっと小さな、やわらかいかわいい子ねこ……、ああ、ぼくたち小さな動物の神さま、どうか、ぼくにこの子ねこをつかまえさせて。ムーミントロールを感心させてやれるように……。)

スニフは、こんなにこわい思いをしたことがありませんでしたし、じぶんをこんなに勇敢だと感じたこともありませんでした。すると、ふいにほらあながあらわれたのです。岸壁にあながあいていて、その内がわが、本式のどうくつになっていました。

スニフは、あっと息をのみました。どうくつ。こんなのは、一生に一度しか見つからないか、一生かかっても見つけられないものです。地面はきれいな砂で、かべは黒くてすべすべしていま

といってさ。」
　スニフは、きょろきょろと箱をさがしましたが、箱なんか一つもありません。海草や板きれがうちあげられているばかりでした。浜べは、ずっとむこうまでつづいていて、いきつくさきは高い岩山になっています。その岩山は、海からまっすぐにつきでていて、山ぜんたいが波しぶきにぬれていました。
（こんな仕事は、あんまりたのしくないよ。ぼくは、小さくてつまんないなあ。もう、だれともいっしょにあそびたくない……。）
と、スニフは考えました。
　ちょうど、そのときでした。小さな動物のスニフは、岩山のてっぺんをひとりでぶらついている子ねこを見つけたのです。黒と白がまだらになっているねこで、とてもほそいしっぽを、ぴんとはねあげていました。スニフは、うれしくてうれしくて、むねがしめつけられるほどでした。



　かれはどなりました。
「ねこちゃん。にゃんこちゃん、ここへおりといでよ。ぼく、ものすごくさびしいんだ。」
　子ねこは、黄色いひとみでちらりと下を見ただけで、さっさと歩い

で？」
「ぼく、真珠をあつめて、箱の中へしまっとくんだ。白い石は、みんな真珠だぜ。うんと白くてまるいのは、みんなね。」
と、ムーミントロールがいいました。
「ぼくも、真珠あつめをしたいな。浜べで、真珠をあつめよう。浜べには、白くてまるい石が、いっぱいあるもの。」
「わかっちゃいないんだなあ。」
ムーミントロールは、説明しました。
「海の中にあるのでなくちゃ、真珠じゃないよ。じゃ、いってくるね。」
こういってムーミントロールは、またジャブジャブと、水の中へはいっていきました。
「それじゃ、ぼくはなにをするの。」
と、スニフは、うしろからさけびました。
「きみはね、真珠をいれる箱を、さがす役さ。」
そういったまま、ムーミントロールは水にもぐりました。
スニフは、浜べを歩きながら、ぶつぶつひとりごとをいいました。
「ムーミントロールは、おもしろいことだと、なんでもじぶんでとっちゃうんだ。ぼくをちびだ

の中へ、もぐっていきました。はじめは、みどり色のきらきらしたあわが見えるだけでしたが、やがて、海草が森のようにしげって、砂地の上でゆれうごいているのが見えました。形のととのった海草で、内がわがもも色で、外がわに白い貝がらが、きれいにくっついていました。もっとすすむと、くらい水の中に、黒いあながあいていて、底なしのふかさになっています。それで、ムーミントロールはむきをかえて、波の上へうかびあがり、その波にのって、浜べへもどりました。そしたら、スニフが、やかましくたすけをもとめているではありませんか。

「ぼく、きみがおぼれてしまったか、さめにたべられちまったんかと思ったよ。きみがいなくなったら、ぼく、どうなるんだい。」

スニフは、そうさけびました。

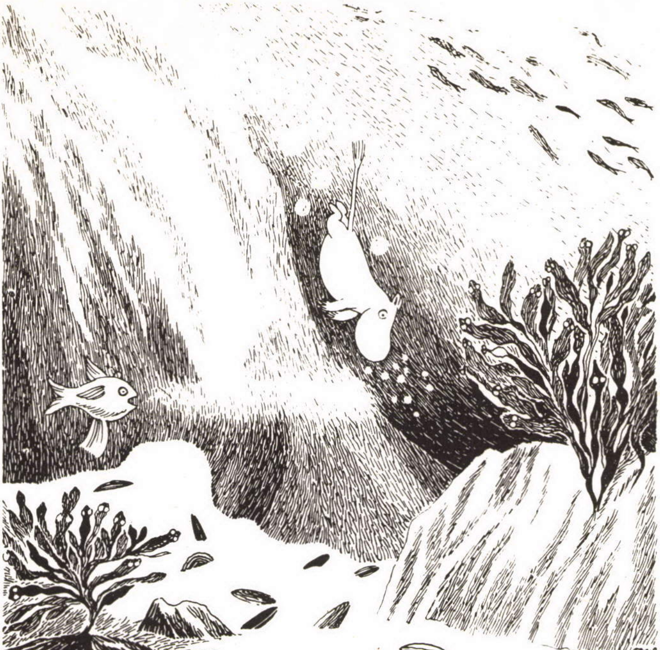
「ばかなこというなよ。ぼくは、水になれてるさ。それに、ぼく、もぐってるとちゅうで、いいことを思いついたんだ。すごくいい、ひみつの思いつきだぞ。」

「どのぐらい、大きいひみつ？『谷底へおとされてもいい』くらいの？」

ムーミントロールは、こっくりうなずきました。

スニフは、早口でまくしたてました。

「もしか、このひみつのひみつをまもらなかったら、ぼくは、谷底へおとされてもいいし、はげたかに、この足をくわれてもいい。一生、アイスクリームをたべられなくなってもいい。それ



と、ムーミントロールは、びっくりしていいました。

「目をあけたままで、きみはもぐれる？」

「もぐれるけど、そんなことしたくないよ。」

と、スニフはいいました。

ムーミントロールはたちあがって、まっすぐ海へむかいました。

スニフがさけびました。

「どうなっても知らないよ。水の下になにがいるか、わからないんだぞ。」

けれどもムーミントロールは、日光がさしこんでいる大波(おおなみ)

スニフはなき声をあげましたが、ムーミントロールは、海を目の前に見るまで、足をとめませんでした。それから、ゆっくり砂浜にこしをおろして、つぎつぎにおしよせる波を見つめました。どの波も、白いあわを頭にのせていました。しばらくすると、スニフも森からでてきましたが、ムーミントロールのそばにすわると、いいました。

「ぼくをほっといて、きみは走っていったね。ぼくを、危険なところへおきざりにしてさ。」

ムーミントロールは、いいわけをしました。

「ぼく、とってもうれしくなっちゃったんだもの。谷も川も山も知ってるけど、海もこのちかくにあるとは、知らなかったんだ。まあ、あの波をごらんよ。」

「つめたい色をして、おこってるようだよ。あの中へはいったらずぶぬれになるし、あの上にのっかると、げろがでちゃうね。」

と、スニフはいいました。

「スニフは、水にもぐるのがきらいなの？」

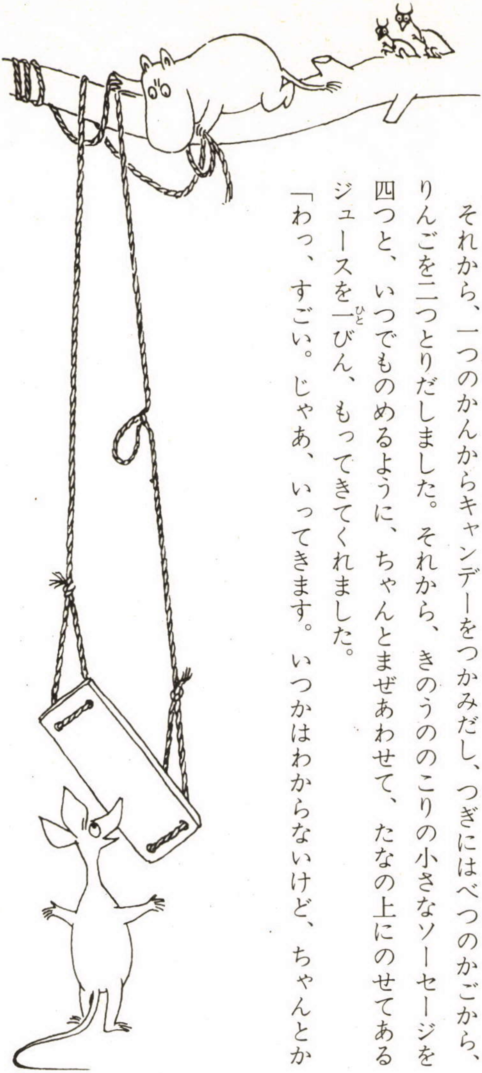


いっそうくらくなるばかりでした。しかも、はじめはのぼり道でしたが、やがてくだり道になって、だんだんほそくなり、しまいにはきえてしまって、こけやしだばかりになってしまいました。
「道って、どこかへつづいてるものなのになあ。こんなの、いけないね。こんなふうに、なくなっちゃうなんて。」
ムーミントロールはこういって、こけの中へ、すこしはいりました。
「だけど、かえり道がわからなくなりゃしないか。」
と、スニフが、小さな声でいいました。
「まてよ。なにか、きこえない？」
こういって、ムーミントロールは耳をすましました。
木々のずっとおくから、かすかな音がきこえます。ムーミントロールは、またすこしすすんで、顔を上にむけ、くんくんとにおいをかぎました。風はしめっぽくて、気持ちのいいにおいがしました。
「海だ。」
ムーミントロールはさけんで、かけだしました。かれは、およぐことが、なによりすきなのです。
「まってよ、ぼくを、おいてきぼりにしないで。」

　ムーミントロールは、びくびくしながら、みどり色のうすくらがりの中へ、はいっていきました。あたりは、まったくしずまりかえっていました。
「あやしいものがこないかどうか、四方八方に気をつけてくれよ。」
と、スニフがそっといいました。
「ぼくひとりで、そんなにぜんぶ見られるものか。うしろはだめだから、スニフ、きみがうしろを見はれよ。」
「いやだい、いやだい。うしろはいやだよ。なにかがおいかけてきたら、こわいもの。うしろは、じぶんで見てよ。」
　スニフは、びくびくしていました。
「じゃ、きみが前を歩けよ。」
と、ムーミントロールがいいました。
「それも、いやだ。ぼくたち、ならんで歩くことにしない？」
　そこでふたりは、ぴったりと横にならんで、どんどん森の中へはいっていきました。森は、ますますみどりがこくなり、



えってくるからね。」
と、ムーミントロールがいいました。
「気をつけてね。」
と、ムーミンママもいいました。
　ムーミントロールとスニフは、庭を横ぎり、野原をこえて、うすぐらい森のところまで、山をのぼりました。その森の中へは、ふたりとも、まだはいったことがありません。
　ふたりはバスケットを地面におろして、ムーミン谷を見おろしました。ムーミンやしきは、ごまつぶのように小さく見えるし、川はみどり色のほそいおびみたいに見えました。ぶらんこなどはまるで見えません。
「きみは、ママからはなれてこんな遠くまで、きたことはないだろ。ぼくはひとりだけで、ここまできたんだぞ。さあ、ぼくが見つけたあたらしい道を、見せてやるよ。」
　小さいスニフが、えらそうにいいました。
　スニフは、あちこちさがしまわって、くんくんにおいをかいだり、太陽の位置を見さだめたりしていましたが、やっと大きな声をあげました。
「ここだ、見つけたぞ。うん、なんだって。この道が、こわそうじゃないって。そんなら、きみがさきに歩けよ。」



「ママ！　ぼくたち、きょう、おべんとうをもってでかけるよ。」
「そうなの。そりゃいいわね。」
ムーミンママは、調理台(ちょうりだい)の上にのっていたバスケットに、サンドイッチをつめこみました。
それから、一つのかんからキャンデーをつかみだし、つぎにはべつのかごから、りんごを二つとりだしました。それから、きのうののこりの小さなソーセージを四つと、いつでものめるように、ちゃんとまぜあわせて、たなの上にのせてあるジュースを一(ひと)びん、もってきてくれました。
「わっ、すごい。じゃあ、いってきます。いつかはわからないけど、ちゃんとか

ムーミンやしきのそばで、ぐるっとカーブしてから、ほかの小さないきものたちのいる土地へ、流れていくのでした。みんなは、この川がどこから流れてくるのだろうかと、ふしぎに思っていました。

（道や川って、ふしぎなものだなあ。そばを流れていくのを見ていると、どこかへいきたくて、たまらなくなっちゃう。どこまでつづいているのか、つけていってみたい……。）

　スニフは、そう考えました。

　スニフが家へかえってみると、ムーミントロールはぶらんこを木につるしているところでした。

「おうい、ぼく、ひみつの道を見つけたよ。こわそうな道だぞ。」

と、スニフはいいました。

「どのぐらい、こわそうだい。」

　ムーミントロールがききました。

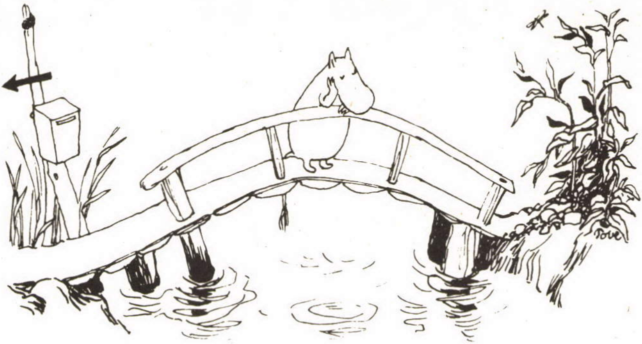
「ものすごくこわそうだ、といってもいい。」

　小さなスニフは、まじめくさって、そんなへんじをしたのです。

「それじゃ、サンドイッチをもっていかなくちゃ。それから、ジュースもだ。」

　ムーミントロールはそういって、台所のまどにむかって、どなりました。

第1章



ムーミンパパが、川へ橋をわたしおえたのとおなじ日の朝、小さな動物のスニフは、すばらしい発見をしました。いままで知らなかった、あたらしい道を見つけたのです。その道は、あるうすぐらい場所で、森の中へはいりこんでいました。スニフは、じっとたちどまって、のぞきこみました。

（これはムーミントロールに話して、ふたりでいっしょに探検しなくちゃ。ぼくひとりじゃこわいもの。）

かれはそう考えて、あとで見つけやすいように、小えだを二本、×じるしにかさねておいてから、大いそぎで走ってかえったのでした。

ムーミンたちの住んでる谷間は、とてもきれいなところです。そこには、小さないきものたちがたくさんしあわせにくらしていて、大きな木が青々としげっていました。野原のまん中を川が流れ、青い


N.W.
N.E.
W
E
SW.
S
S.E
ニョロニョロの
おさびし山
ほらあな
砂洲
ライラック
のしげみ
たきぎ小屋
ジャスミンのしげみ
ムーミンやしき
たばこばたけ
MAP OF MOOMIN VALLEY
ムーミン谷の地図
Tove



●子ねこ

黄色い目、
黒と白のまだらのからだ。
スニフにすくわれ、
友だちになる。



●スノークのおじょうさん

前髪がよくにあい、からだの色もかわる。
ムーミントロールのガールフレンドになる。

●じゃこうねずみ

哲学者。
地球がほろびてしまう、と
ムーミン谷の人々を
おどかす。





●ヘムル

彗星がこようが、
地球がほろびようが、
せっせと、
切手をあつめる。

おもな登場人物



●ムーミントロール

勇気があり、心のやさしい少年。
遠いおさびし山の天文台に、
危険にみちた旅にでかける。



●スナフキン

ひとり旅がすき、音楽もすき——。
ムーミントロールと危険な旅にでる。



●スニフ

すばらしいどうくつを見つけ、
それにかわいい子ねこも見つける。

もくじ

KOMETEN KOMMER

Written and Illustrated

by

TOVE JANSSON

ムーミン谷の彗星

トーベ=ヤンソン／作・絵
下村隆一／訳

講談社 青い鳥文庫

講談社 青い鳥文庫

すい せい
ムーミン谷の彗星

トーベ＝ヤンソン/作・絵
下村隆一/訳